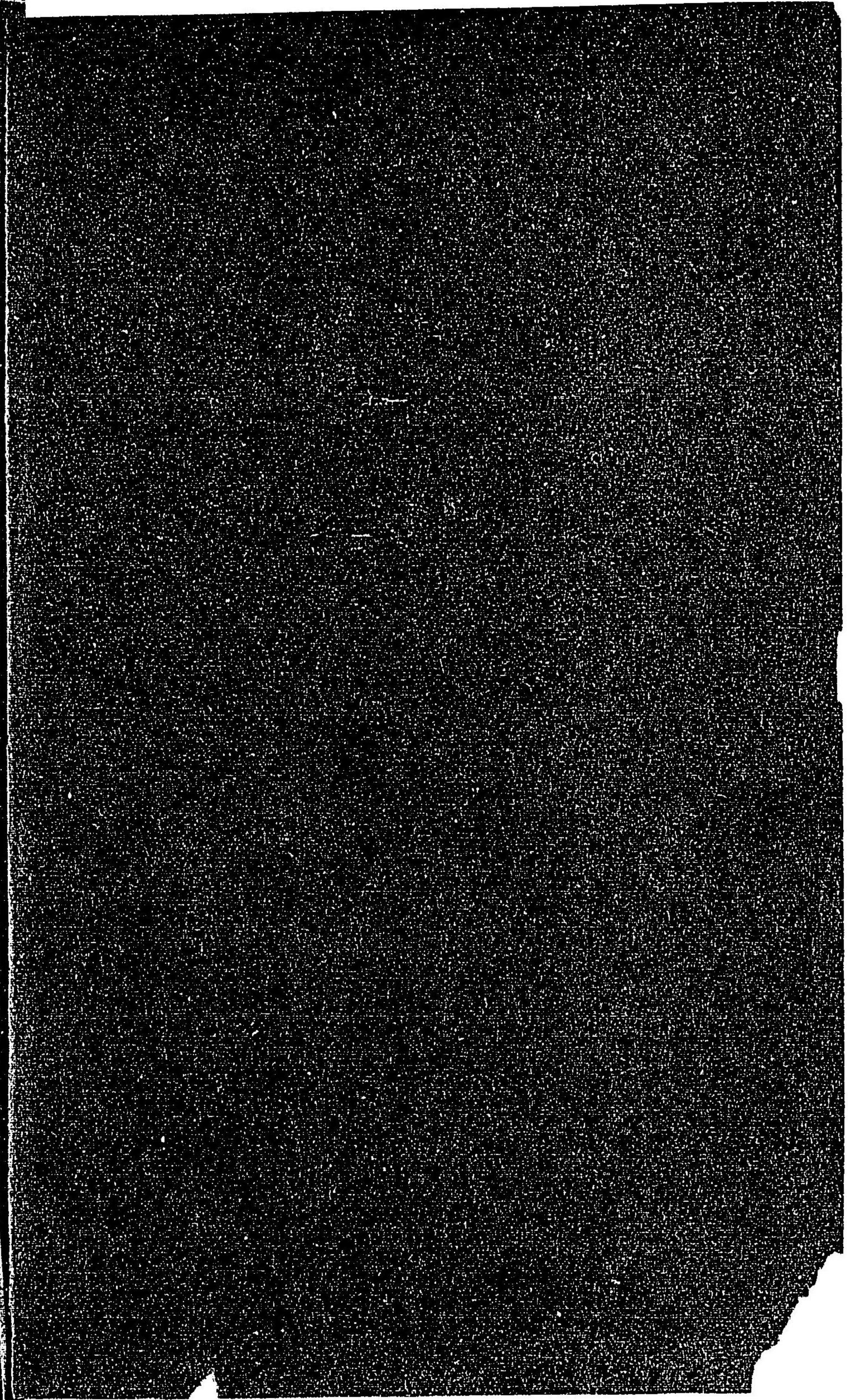


74-360



文
藝
講
話



序

過去數年間、處々の講演、數種の雜誌の爲、文藝或は他の姊妹藝術に關して講述したものゝ筆記を輯め、玆に文藝講話と題して公にする。聽衆の種類に應じて、講話の體裁、内容等に多少の斟酌は施したが、其精神は偏に藝術の爲に盡さうと思ふ一念である。講話の席や、講述筆記を載せた雜誌の名は、各條の下に明らかにして置いた。講述者は、是等の會集或は雜誌が、この度の編輯を許るされた事について、深く感謝する。

明治四十年三月

東京 上田 敏

目次

劇詩「フランチェスカ」……………	一
<small>(挿畫)カプリエレン・ゲンメンチオ付像——エレンオノラ・ドゥッセ付像</small>	
「海の夫人」……………	二六
<small>(挿畫)ヘンリック・イブセン付像——ノラ(人形の家)——「ロスマルスホルム」</small>	
外國文學の研究……………	六一
近世の英文學……………	七六
佛蘭西近代の詩歌……………	一〇五
近時の音樂論……………	一三三
樂話……………	一四八
戦後の思想界……………	一五八

戦後の文壇……………一七四

国立劇場の話……………一九三

(挿畫) コメツイ・フランセエズ興行「アタリイ」——劇場内部

藝術家に問ふ……………二二九

美術雑感……………二三六

レオナルド・ダ・ヴィンチ……………二五八

(挿畫) レオナルド・ダ・ヴィンチ自畫像——像像設計圖

マアテルリンク……………二五八

(挿畫) マアテルリンク肖像——「タンタツルの死」

文藝講話

上田敏

劇詩「フランチェスカ」 (明治三十七年七月十二日竹柏園)

今日竹柏園の例會に御招待を蒙りまして、何か文學に關する話をと云ふ仰でありますが、あまり火急の事で何を申述べて宜いか解りません。歌の方では題詠と云ふべきがあるやうに聞いて居りますが、その題詠であると却て都合が好い。萩の話をとか月の話をと云へば、申様もありませんが、唯漠然と文學に關する話と云ふのは、ちよつと頭に纏つて浮びませんのです。それで差當り御請をした時に考へて居ました事を演題に定めて御話致さうと思ひます。そこで近頃西洋の藝苑に喧傳し、又日本でもつい先日其翻案を『本郷座』で演じましたダンテ Dante 詩中の挿話を劇に仕組んだ一曲の御話を致す積り、即ちフランチェスカ・ダ・リミニ Francesca da Rimini の話でございます。日本の所謂新演劇の常として昔の事柄を現今の風俗人情に

直して演じましたのですから、原の話とは大層違つて居て、まるで思想や趣味を没くして居るのは已むを得ない次第であります。これから私の述べますのは西洋の話、而もずつと昔の話で御座います。それ故に其裡に含まれた人情或は道徳思想が今日の考を以て推測られない事があつて、皆さんがこれは餘りひどい常識に反して居るなど、仰せあつても、それは私の知らない事で、只昔はかういふ事もあつたと云ふだけの話でございます。

フランチェスカダリミニの事はダンテの『神曲』と云ふ長詩中の一節、僅々六七十行の中に書いてあります。ダンテの詩は『地獄』と『煉獄』と『天堂』と云ふ三大歌に別れて居ります。千三百年の春ダンテはフィレンツェ Firenze と云ふ伊太利亞の一都會の郊外なる穴の中に偶然入つた。夫より地底に下りて行くに随ひ、九つの圏に別れて居る地獄界に着いて昔の歴史に見えた人物又は自分の知己にも會ひ、種々見聞する所あつて、地球の中心、大魔王の罰せられる所に達し、そこを通り抜けて今度は正反對に南海の波の面へ出ました。南海の中央に山があつた。其山は七つの臺に分れて、頂上更に地上樂園と云ふのがありました。又麓の方にも別に一區ある所から其

處迄を煉獄或は淨罪界と云つて浮世の罪障を滅する修練苦行の地、こゝより期満ちて人は天堂へ行く譯になる。天堂と云ふのは別に國ではない、地球を中心とし、之を共通して居る大さの遠く圓、即ち遊星七天、恒星天、原動天と云ふぐるぐら廻つた輪でありまして、とゞの詰りが天堂の終、即ち神の玉座に達するまでの處です。ダンテは夢のやうに幻のやうにこの三界を歴遊して、終に聖三位一體の奧義を瞥見した。而も此奧義の矛盾撞着に惱んで心、其妙義を捉へるのに苦む途端、刹那一閃悟徹して、今までの幻想は消えた。即ち夢であつたのであります。『神曲』はかういふ長詩ですが、前に述べた三大歌を小別して都合百歌に致した。其の第五歌にフランチェスカの話があるので。第五歌に述べた處は地獄の第二の圏で昔の歌物語、人情話等にある才子佳人、美人英雄の居る處で、餘り正しくない行をした人々が集て居るうち、フランチェスカも其一人であります。之にダンテが會つて一場の話を聞き、如何にも哀れな、悲しい物語であると、道ならぬ事ではあるが同情の念に堪へず遂に氣絶するに至つた。六七十行ばかりの處が今度の劇の基となつたのである。此處は西洋の文學でも極めて有名なもので、ダンテ詩中の絶唱と稱せられ、西洋の文學を味ふ

人は、原の伊太利亞語で讀まなくとも、英獨佛などの翻譯では是非窺つて感服する所です。併ながら皆さんも御承知の通り、文學に於ては是非感服すべきものであつて、始めは感服し兼ねるものがある。人に言はれて讀んで見ても、どうも自分にはさう面白くない、併し面白くないと言つて済ましては、終に最高の大文學を味ふ事が出来なくなるのですから、初めダンテの詩を讀んで、是がそんなに面白いのかしらと却て不思議がる位でも、漸々他の部分を讀んだり、又は他の有名な作を多く讀こなし、た後に、復立返つてこの所を精讀すると如何にも旨い所が了解せられ、この落着きもあり、感情も深く、思想の氣高い味が知れて來ます。青年も中年の人も老人も等しく感歎する譯が分りますのです。

それで此物語を簡單に申しますと、ダンテはこの第二の圈で諸の美人や英雄に會ひ、埃及女王クレオパトラ、Cleopatra トロイヤ Troia の王子で當時の天下第一の美男であつたパリス Paris などをも見ましたが、そのあとで一對の靈に會ふ。此一對の靈と云ふのはフランチェスカ姫と、その慕ひ慕はれたバオロ Paolo と云ふ人なので、二人は相互に抱合つて、赤黒い雲の間から、白鳩の意に任かせて飛び來るやうに、

浮んで參り、フランチェスカ姫の方から先づダンテへ話かけました。これがフランチェスカの歌の初です。姫の生れ故郷は伊太利亞ボオ河のほとり、ボオの水は幾多の支流を従へて海へ注ぐラエーナ城 Ravenna であります。心優しい人には早くも襲ひ來る『愛』と云ふものが身の仇となり、道ならぬ行あつて、夫に殺されたが、『愛』の一念の強いばかりで、死後もなほ、思ひ思はれた人と共に、斯くは抱き携へて地獄の雲に漂つて居ると云ふ話をしました。そこでダンテが更に尋ねていふやう、如何なる譯にてさる事に立至つたのか、何故に殺されたのであるかと云ひますと、泣く泣く姫の語るには、噫悲の日にあつて、樂しかりし日を思ふほど悲しい事は無い。バオロと或日物語の本を讀んで居た時、感極まつて接吻したと云つて又泣き入つて仕舞ふ悲しさにダンテも同情のあまり氣絶すると云ふのであります。フランチェスカ物語が文學に現れたのはこれが抑々の初ですが、全體ダンテの『神曲』と云ふ詩は大層有名なものであると共に、中々難解のものである。既に十五世紀の頃から此詩を講釋するダンテ講筵と云ふものが開けた位で、第一の講座を持つた人は、これも有名なる彼のボッカッチョ Boccaccio と云ふ人です。此人が一字一句精しい講釋をした

時勢ひ第五歌に至つてフランチェスカの事蹟を詳しく言ふ必要が起りました。従つてボッカッチオは種々の傳記や歴史を調べて考證を試みた故、ダンテの話よりも尙ほ詳しくフランチェスカの話が世人に知れるやうになつた。其後大勢の學者註釋家が續出して、それ以外の事實傳説等を調べましたから、それや是やを集めて今日吾々が知つて居るフランチェスカの話が出来ましたのです。又それを種にして後世の人が歌に作つたり、繪に畫いたり、中には作曲したのもある。かう云ふ順序で、此頃西洋でも劇を作り日本でもそれに倣つたのですから、フランチェスカの話は決して堂々たる正史に書いてある有名な事實と云ふのではなく、實は當時では珍らしくなかつた話なので、日本今日の新聞なら三面記事にでも上るぐらゐの事であるが、其愛の熱烈強大なる爲め、唯如何にも可哀想な心地がしてフランチェスカが悪むといふは知りつゝ、同情を表する譯である。話の筋は今度の芝居を御覽になつた方、或は新聞雜誌等に於て大概御承知とも思ひますが、極く簡単に申します。尤もボッカッチオ以來種種の人が調べました事實を集めたものですから、多少人に依つて違ふのです。併し重要な事實を申すと次のやうになります。

フランチェスカ姫はダンテの詩にある如く、ラゼンナの城主グイド・ダ・ポレンタ Guido da Polenta の女で、夫の名をシオヴァンニ Giovanni と申します。是は英語のジョン John と同じく有觸れた名でございますが、苗字をマラテスタ Malatesta と云ふ、是は「悪頭」少し遠いですが、鬼頭とでも譯しませうか、名からして恐しいやうです。此人は非凡な豪傑で十八歳の初陣に、拔群の手柄があり、二十六歳の折には當時伊太利亞の群雄の中で、覇を稱したと云ふ勇氣もあり、智恵もあり、且つ亂世の事であるから、隠謀詭計の才もあつて、兎に角豪らい人なのです。只惜しい事には不具である。戦争で足を怪我して、それで跛者になりました。それ故ジャンチオット Gianciotto 或はシエンカアト Sciancato 即ち跛のシオヴァンニと綽名された。フランチェスカの親は強敵に攻められて、援を此シオヴァンニに求め、其報酬とし、又兩國の連鎖として、姫を嫁がしめたのです。然るにシオヴァンニの弟にパオロ・イル・ベルロ Paolo il Bello 即ち美男パオロの綽名ある人が居て、兄の代になつて婚儀を擧げに参つた婚禮に名代とは奇態に思はれますが、是は當時珍らしくない、よくあつた事で、諸侯の間に行はれた代理結婚と云ふことである。代理の人をやつて結婚の式を擧げる、ほんの名代に過ぎない。此

の代理としてパオロが行つたのは勿論兄の方も承知、姫の家でも知つて居た。唯知らないのは姫ばかり、フランチェスカは御殿の庭に居て、ちよつと垣根の間から使節パオロを見た。如何にも美しい立派な強さうな人が来たと思つて居ると、腰元か何か、あれが御姫様の殿御であると喋舌つて仕舞つたので、姫も其氣になり、あゝ云ふ人の所へ行くのなら誠に幸であると思つて、心の中に思つて、代理結婚とは少しも知らなかつた。婚禮の式終て其夜直ちに廿哩ばかりの松林を夢中に通つてラエンナからリミニの家へ乗込だのが一生の錯、翌朝になつて見るとこれはまた大變の違ひ、何だか悪人らしいやうな人相、而も跛者である兄ジョヴァンニだものですから、非常に喫驚りし又欺されたやうな考を懐いて怨んだのです。それが詰り後日不義の起でありませんか、と云ふ。知れて夫に殺されたと云ふのです。唯それだけの話でありませんが、近頃になつてそれを劇に仕組んだ詩人が二人ある。伊太利亞の詩人と、英吉利の詩人で、伊太利亞詩人の方が英吉利の詩人よりも日本には能く名を知られて居ります。前のはガブリエレ・ダンヌンチオ Gabriele d'Annunzio 後のはステイヴン・フィリップス Stephen Phillips と云ふ詩人で、共に未だやうやう四十恰好の人ですが、中々

妙想に富んだ作がある。英の詩人は『パオロ・アンド・フランチェスカ』 Paolo and Francesca と云ふ題で劇を作り、伊太利亞詩人は『フランチェスカ・ダ・リミニ』 Francesca da Rimini と云ふ曲を作つたが、共に近時の文壇を賑はしました。全體現今の英吉利劇壇は大に振はない、單に道具を奇麗にし、仕掛を宏大にして、出し物は誰にでも分るやうな滑稽劇か、又は流行問題を捉まへて芝居にした作ばかり、眞面目な劇で而も律語の曲は薩張なく、皆散文の平凡な劇であります。ステイヴン・フィリップスが突然昔のやうに立派な詩の作を出したから、みんなが驚いたのです。日本の芝居も、此頃は冗漫下劣な平語物のみで、優美高尚な詩でいつたものがありませぬ。節奏のある言語で演じた劇は森博士の『兩浦島』ばかりです。趣は異ふが英吉利も稍さう云ふ傾向がある。ので、之に慨して大奮發をし、昔の沙翁劇のやうに詩の芝居を書下して、之を名優に演らせやうと、ステイヴン・フィリップスが思立たので、趣味ある人には大に感動を與へて、名高くなり、苟も文學を口にする者は其芝居を觀なくつても、脚本を讀んで感服しました。ダンヌンチオの作も、これと同じく伊太利亞無韻詩の劇詩を豫て別懸である女優エレオノラ・ドゥッゼ Eleonora Duse に倣めて書き下し、これ亦歐洲の劇壇

を騒がしました。ダンヌンチオと云ふ人は小説も書くし詩も作るし非凡な才人で
す。まるで四百年前の文藝復興期に現はれた人を見るやうな心持がする。非常に華
奢な人で、ちよつと旅行をするにも靴足袋の何十足も要るやうな人、一體詩人と云
へば杖でも突いて散歩して歌でも作ると云ふのが當り前で、西洋でもさうなんで
すけれども、ダンヌンチオは贅澤な華美な氣象として性行も常人と異ふ。従て文章
も極めて艶麗絢爛、光彩陸離とでも云ふのでせう。十六七の時分から詩を以て名聲
を馳せ、二十歳を過ぎては、歌洲文壇の第一流に上つて今日までも常に進歩を續け
て居る眼覚ましい人の作ですから、甚だ壯んな華やかな詩で、その上古實を吟味し、
裝飾を奇麗にし、配景を完全にして而も意氣相投じた世界第一の女優が演ると云
ふので、初日から非常な景氣であつた所がさう云ふ人ですから従つて敵も多いの
です。千九百一年十二月九日初日の晩には反對黨が大勢行つて、口笛を吹いたり或
は足を踏鳴らして妨害をすると又ダンヌンチオの黨派は連中を作つて行つて喝
采する、口喧嘩をすると云ふ位で、観客場に満ちたさうです。千八百三十年の頃、
トル・ユウ・ユオ Victor Hugo が『ヘルナニ』 Hernani と云ふ劇を場にかけて、翰林院の博



GABRIELE D'ANNUNZIO



ELEONORA DUSE

士連を驚かしたことがあつた。其時の騒動と云へば有名なもので、ユツゴオ黨の音頭取、テオス、ルゴオチエ、Theophile Gautier が大きな體へ赤い胴衣を着て行つて、博士連の組が悪口を言ふと負けずに晉り返へして喧嘩をした。さう云ふ工合に西洋の詩人文士には随分思切つた手合が多い。中には文學の事で決闘を遣り兼ねないのもある。命の取遣りで文章を書いて居るのだから時々傑作も出来るのでせう。ダンヌンチオの劇に就いての騒動も『エルナニ』のときと同じであつたさうです。何しろ當代一流の名家の作を天下一の名優が演じたのであるから、多少の缺點があるにしろ、何さ世間の注目を惹いて、伊太利亞各地の都會で演せられ、遂には佛蘭西獨逸英吉利でも翻譯で流行しました。梗概では作家獨得の華文を没却して、其美のある所を言ひ洩らしませんが、ざつと荒筋を述べて見ませう。

其前に一言しますが此劇を演じたエレオノラ、ドゥゼと云ふ女優は方今女流では世界一と言はれてゐます。日本には餘り聞えて居ません。却つてサラ、ベルナル、Sarah Bernhardt と云ふ少しふけた女優の方が知れて居ります。尤も此サラ、ベルナルを藝神に入ると渴仰して居る人も今だにあるやうですが、ドゥゼはそれより餘

程年若く而も沈痛で深刻で其こなしの高尙な事と云つては天下無類ださうです。私の友人で永く維也納に遊學し度々伊太利亞に旅行した人が先頃歸朝して話しました。が實にドゥッゼの妙技と云つたら話にならない。勿論口をきいてもうまいが黙て立つた態度も絶妙だ。宛も希臘の石像がまのあたり肉となつて現はれたやうで悲壯の美感名状すべからざる趣があると申しました。ダンヌンチオは若い時から此人を能く知つて居る。中には夫婦になるだらうと云ふ人もありますが、其邊の所は請合ません。兎に角餘程親密の間柄でそれが爲めに心血を注いで書いたからフランチェスカと云ふのは中々儲役になつて居ります。

ダンヌンチオの新曲は御定りの五幕に分れて居る。西洋の悲壯劇と云ふものは大概五段に分れて居るのです。さて序幕はフランチェスカ館の庭園に接いた仲庭、左の方に塙がある。塙と云つてもかの透垣めいたのではなく、立派な大理石の壁であつて、處々十字形に透いてあります。仲庭の上に涼廊といふ二階があつて、其處へ腰元たちが大勢出て來ます。のび丁度舊演劇にでもありさうな景色で、數多の侍女たちの名も皆それ／＼美しい例へば其一人はビヤンコフィオーレ Biancofiore 即ち白い花

と云ふ意味ですが、名を聞いたばかりでも奇麗な人らしく思はれる。歌を御詠みになる方々は御存じでせうが、物の名にはそれ／＼味がある。馬琴の所謂名詮自稱は少しく極端とは云ふもの、芝居でも小説でも皆豪らい人は堂々たる名、卑しい人は客ちな名を持つて居るではありませんか。こゝは腰元白妙と云つたやうな工合で、其他の侍女にもいろ／＼美しい名がついて居ます。さて腰元たちが囁々して居る中に道化がやつて來ます。道化と申しますか、何と申しませうか、今日は幾ら贅澤な人でも道化を抱へて置たり連れて居る人は無いが、まあ今なら暫間です。フウル即ち馬鹿と云ふもの、詰り馬鹿でない馬鹿、只馬鹿と云ふ役なのです。王公貴人の側に侍つて徒然を慰める職掌で随分構はない無駄口や皮肉を言つても宜いやうになつて居る。又今日の事で類を求めれば丁度かの大神樂で頭を擲られたり何かして引込んで行くあれです。今此道化に腰元が擲揃つて居ます。伊太利亞の十三世紀は兵亂相睡いで殆ど寧日無き代り随分派手な時代であつたので、戦争、舞踏、虐殺、饗宴相雜て居る派手で、殺伐な時勢でありますから、腰元などでも眼八分や、三指など、いふおとなしい小笠原流ばかりに日を暮らすのではない。何ぞの事に歌や舞

踏と出かける連中で、此幕の如きは當時の風俗其儘なのです。此處は話の筋に關係した場でありませんが、芝居にしたら随分面白い賑やかな場です。所へフランチェスカの兄オスタジオ Ostasio がやつて来る。右の道化は衛兵に追捲くられ、腰元も皆逃げて仕舞ふ。こゝにオスタジオと家老職みたやうな役のセルトルド Ser Toldo と話になり、セルトルドが、姫にはどうあつても、かのマラテスタ家へ御輿入ある可しと言ふと、兄はそれは困る、いくら何でもあんな醜男の處に氣の勝つた妹をやる事は出来な、第一身じめな氣の毒の感がある。どうかほかに名案があるまいかと言ふと、この縁組協はぬ其時は此國滅亡御家斷絶頼に思ふ數百騎の精兵をいづこに求められませう。此處御英斷を以て、御決心あれぢやと申して、では御一門の運命を、さあそれはさあ、さあ、と云ふやうな儀になつて居る所へ、日本で謂へば御注進御注進と云ふ見えて敗兵數多、傷を負つて飛んで来る續いてフランシチェスカの矢張り兄二男バンニオ Bannino も馳せ戻り、敵の多勢に襲はれて戰破れし由を告げると、身體少しも傷を受けて居ない、兄は赫とばかりに怒りたちかゝる、臍甲斐無さるの、そろひ居るばかりで我家も危いのだ、もう仕方がない、思切つて妹を遣つて仕

舞はう片輪でも何でも構はないと言ひ棄て、退場すると、又先の腰元たちが戀の歌を歌て来る。フランチェスカは若き妹のサマリタアナ Samaritana と連れ立つて、色々の物語のうち、しみじみと哀れ深い夢みるやうな話があつて、人間の哀別離苦樂欲の燃え出で、陽炎の捉へ難いにも似て居るなど、いふうち腰元たちは周章たゞしく御姫様御姫様の御方が御出になりましたと告げると見れば、兄ジョソニの名代美男バオロは徐かにかの石壁のあなた後庭の葉隠より現はれ来る。姫は紅薔薇植ゑたる石の棺の傍に佇み、バオロは山桃の木陰に止まつて、塙を隔てに相對して、無言の體たらく、侍女は環の如く展がつて

梓弓

春のさつきの狩倉へ

獵夫のむれぞいでたゝす。

『恐』てふもの集ひたる

遙けき國のうたけの座

涙に『心』うきぬるを。

と歌ひ出でると、姫は石棺の紅蓋一枚輪を、やはり無言でバオロへ渡す。サマリタアナは泣く泣く萎れて階上に向ふ。忽ち正面の窓より、かの次兄バンニイノは閉ぢた戸を叩いて、フランチェスカ開けろ、開けろと絶叫するので序幕が終るのであります。

二幕目にはもう結婚後數箇月を経て居て、フランチェスカはマラテスタ夫人であります。其頃戦争があつて敵は城門に迫て來た。それを塔上より望で居るとは、姫も中々強い女です。一體フランチェスカは意志も感情も頗る強い婦人で、オフエリヤ何かのやうに弱々しい人ではない。今塔上から下を見て居ますと向はどんぢやんの大騒ぎすると傍に爆裂弾みたやうな物がある。何だと開くと兵士が言ふには、これは希臘火といふ石火矢の一種で、敵陣を驚かす爲めに使ひますと答へた。それなら私が一つ放つて見やうと、それに點火して仕舞ふ。兵士等は奥様御危ぶない、そんな事をなすつてはいけません。若し破裂したら大變ですと言ふと、なわに構ふものかねと云つて火花の煌々とするのを見て、焰の歌と云ふのを詠む折柄、バオロは登場して、御姉様、とんだ事をなさいます、危ないと言つて止めるのは流石に否み難く、塔の

後の窓に隠れると、しきりと矢が飛來て窓の戸に中る。憎くき敵の振舞と窓の間から弓にて、と、敵將らしき者を射落し、占めたと云ふ中にかや／＼音がして塔上へ大勢上つて來る中には、大將ジオヴンニが跛ひき／＼而も威風凛々として居ました。夫人が其處に居るのを見て、大に悦び、それでこそ戰國諸侯の夫人であるといふ時、フランチェスカは傍にあつた盃を夫にさすのです。所が始めよりどうも伉儷睦しくと云ふ譯には行かなかつたと見え、波瀾衝突は表に現はれずとも双方稍冷淡であつたのか、兎に角盃を捧すと、夫の言ふには先づそなたより先へお干しなさいと云ふ。フランチェスカの返辭が餘程變です。別に毒は入つて居ませんと云つた。斯ういふやうな氣合では詰り後日ひよんな事になつたのも受取れます。何しろ其盃を夫が飲んで仕舞ふと復、音がして今度はバオロの弟マラテスタ、Malatestino が負傷して昇ぎ込まれた。丁度鎌倉権五郎景政のやうな人間で、眼を射られて一旦氣絶したものの、諸人の介抱に息を吹返すと、敵は何處へ行つた、何處へ行つたと云つて晉つて、己が捕へた敵將の子を虐殺して仕舞ふと威張つて居る。捕虜は後から贖身金を取返せばよいと言つても肯かぬ。かくて二幕目はマラテスタ萬歳の凱歌中に

終ります。

三幕目はフランチェスカの居室の場で、有名なアサア Arthur 傳説集中ランスロート Lancelot (伊太利亞語ではランチルロート Lancilotto) 物語を繕いて、夫人は例の腰元達とも會話して、徒然を慰めて居ると、フィレンゼから呉服の商人が参りましたと案内するものがある。こちらへと云つて、お、呉服屋何か好い布はないか、新形はないかと言ふと、はい、それは何でも御意に召すのが御座います。精巧の縫箔を置きました肉漣の毛入絹を始とし、綾絹、緞子、山羊の毛織絹、毛織の紗、駱駝織羽緞子、綾織綿布其他何々と息もつかずに喋舌ち立てるのを、フランチェスカは可笑しが、それではこの石榴の果を織り出した錦をとつて置かうといひ、時にそちは何處から來ましたと尋ねると、呉服屋は、さればで御座います。商人の身程危険なものには御座いませんが、今度は眞に都合よく参り、實はこちらの若殿バオロ様の御供の中に入れて戴き御一緒に参りましたから至極往來も安全で、いつもなら賊に會つたり兵隊に妨げられますのが、今回は思の外早く到着致ましたと答へるのを聞いて、姫は何氣なき體を粧ひながら、心せはしく、笑を含で、色々道中の話を聞く、問はるがまゝに商

人は圖に上つて物語をすると、此絹も買て置かう、それから話はどうである、はい、かくく、で、此銀通しも欲しいよ、それからと、姫は愈々興に入り、腰元達へは、そちらにこの紫紺を上げる。御前は、この栗皮茶がよろしからう、はい、當節は其橄欖色がいつそ流行りますなど、腰元達は有卦に入つた心地、時に易者のやうな陰陽師のやうな者が道化と共に登場して、色々仕草があり、と、腰元は、數多のかづけ物を戴いた御禮の爲めと春の燕の歌を吟じて

彌生ついたちは、はつ燕
 海のあなたの静けき國の
 便もてきぬ、うれしき文を。
 春のはつ花には、ひを尋むる
 あゝ、よろこびのつばくらめ。
 黒と白との染分縞は
 春の心の舞姿

彌生來にけり、如月は
風もろとも、にけふ去りぬ。
栗鼠の毛衣脱ぎすて、
綾子羽ふたへ、今様に、
春の川瀬を、かちわたり、
しなだるゝ枝の森わけて、
舞ひつ、歌ひつ、足速の
戀慕の人ぞ、むれ遊ぶ。
岡に摘む花董ぐさ、
草は香りぬ、君ゆるるに、
素足の「春」の君ゆるるに。

けふは野山も新妻の姿に通ひ、
わだつみの波は輝く阿古屋珠

あれ、蕨蔭の黒鵜

あれ、なにか空に揚雲雀

つれなき風は吹きすぎて、

舊巢脚へて飛び去りぬ。

あゝ、南國のぬれつばめ、

尾羽は矢羽根よ、鳴く音は弦を

「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥よ、

黒と白との水干に、

舞の足どり教へよと、

しばし招がむ、つばくらめ、

たぐひもあらぬ麗人の

イソルダ姫の物語

飾り盡けるこの殿に

しばしはわれよつばくらめ

かづけの花環こゝにあり

ひとやにはあらぬ花籠を

給ふあえかの姫君は

フランチェスカの前ならで

まことは春のめがみ大神

といふ奇麗な歌を囃子に舞となる所は讀だばかりでも、どつとする位、優美で高尚です。すると前の幕にも出た事のある婢女即ち奴隸がパオロを案内して來ます。先づ世の常の挨拶あつて後、ふと其讀さしの本は何ですとパオロは尋ねる。藝のラントロット物語といふのは日本で謂へば丁度源氏物語のやうな本で、支那でいへば才子必讀の書、當時の男女は皆愛讀したものです。はい、此處まで讀みかけましたがと答へて遂に二人で讀むことになりました。此邊の事は既にダンテの詩にも現はれた事で、段々讀書に身が入り、終にランスロットがガレオット Galeotto といふ武士の

手引にて女王ギネヴィア Guinevere (伊太利亞語にてジネヴラ Geneva) と始めて密會する事を得終に接吻するに至る條に至り感極て、夢現となり。パオロはわれ知らず、姫に寄添て、くちづけする。姫もさながら心亂れて、色蒼さめ、眼燃え、手指顫へて、はつとはかり、愕然として、たじろぎながら長椅子の上の褥に仆れ、聲も微かに「いけません、パオロ様」これにて幕。

四幕目は牢獄に連なる八角形の一室で、かの三男マラテステイノが嫂フランチェスカに戀慕の情を告げ辱められたる憤懣の餘、兄ジョヴァンニにそれとなくパオロを疑ふ意を起さしむる場で、曲中人物の性格を明らかに現はして居ます。

五幕目は殺害の場なのですが、ダンテの詩を旨く用ゐた三幕目にも勝つて尙面白。他の幕と異ひ、筋勁峻刻とでも云はうか、雲低く風死して、籠り切つたのが、忽ち沛然として風雨に破れたやうな心地がします。フランチェスカの寢處に腰元達は曉がたの宿直で静かに物語して居ます。明方の話はいかにもしんみりとしてあはれ深いものです。一人の腰元やを床の中なる姫の傍に近づいて、また立歸り、なんと奥様は御美しいのであらうと云へば、又一人の答へるやう、もう夏にもなりました

が、それとも益々御美しくなるばかり。又一人は、ほんに夢の穂の延びるやう、罌粟の花のやうになど寝めそやして、噫、海から風が来る、おや大船は錨を上げるさうなと話して居るうち、姫は忽ち絶叫して飛び起る。御座いますかといふ聲に、さては夢であつたかと安心するものゝ、はて、氣がすまぬ。曉の夢は正夢とやら、唯、何となく心細い心地がして、腰元達にも懐しい言葉をかけ、燕もはや飛去つたか、昨日夕暮の山陰に、一羽の鳥も見なんだと沈んだ話になる所へ、バオロが密に訪ひ來たので俄に蘇生の思がする。愛の焰の燃え上がる二人の對話は、とても荒筋では盡されません。是時さきに末の弟マラテステイノに密告せられて、充分疑惑の念を生じた夫ジョヴニは馳せ來て、戸を叩く。そら大變と畏戸よりバオロを逃がさうとする、不幸にして袍の端が釘に掛かつて、體がまだ半分出て居るのに、フランチェスカは其れとも知らず戸を開いたものだから、堪りません。一聲高く、夫は突きかかつた可愛のバオロを刺させまいと、姫は身を以て及を受けたので、バオロは劍を落してフランチェスカを抱く。憎つき奴めと、ジョヴニは相抱合た二人を刺通すと、同體にとつかと仆れるのを見濟まし、さも痛さうに跛の足を曲げて鮮血淋漓た

長劍を他の膝にて折る。これが此劇詩の大詰で御座います。

梗概の又梗概に止まる此簡單の御話では、此劇詩の如何に情熱に富んで居るか、動作の發展が迅速で又自然であるかは到底御傳へ申しにくい。中にも春の燕の歌やバオロとフランチェスカとの對話が一々絶妙の詩になつて居るのなどは、巧妙な翻譯でなければ十分一も現はし難い。唯私は一言を添へて此梗概を結びませう。皆様の御讀み遊ばす長歌で言へば、これからは、ほんの反歌です。それは此劇詩が如何にも音樂風の味を帯びて居る事で、勿論色彩に富んだ繪畫のやうな所もあるが、婉美なる聲調の常に伴ふものあつて、宛も伴奏の樂の絶えず従つて居るやうなのは一奇です。之はダンヌンチオばかりではない、近世文學の優れたものは皆此音樂風の美を持つて居る。私の考へるには、一體近世は音樂が藝術上主權を有して居る時だらうと思ふのです。美術を建築、彫塑、繪畫、音樂、詩歌の五つに別けて、文明史の初めから考へて見ると、先づ上古には建築が盛であつた。而して他の美術も皆其風を帯びて居る。次には彫塑が盛になつた。例へば希臘では彫塑が最も發達して、其繪畫其詩歌までも彫塑の風を帯び、建築も亦皆彫塑と相待て居る。其後中世を過ぎて十

四十五十六世紀の文藝復興期には繪畫が全體として空前の發達を爲し、彫塑も漸く繪畫に近づき、詩歌も亦有聲の畫となつた。アリオスト Ariosto やタッソ Tasso の詩を見ても解かります。然るに十九世紀の中葉このかた、音樂が明らかに權威を振て來て、終に現今では他の美術に大なる感化影響を及ぼして居る。ロダン Rodin の彫塑の如き、アルヌツデオ Art nouveau の模様又建築、印象派 Impressioniste 點畫派 Pointilliste 薄明派 Crépusculariste の畫、詩歌では羅曼底格派 Romanist 及び其次の高踏派 Parnassien に代らうとする象徴派 Symboliste 又自然派 Naturaliste に代て起つた神祕派 Mystique などは、皆多大の感化を音樂に受けて居ます。それで羅旬後興 Renaissance 之の驍將たるこのカプリエレ、ダンヌンチオの作に頗る音樂の風あるは敢て怪む可きものではありません。フランチエスカの戀ありしより茲に六百有餘年、其切なる情の哀は南歐詩人の胸に響いて、餘音嫋々たるものが此劇詩を御座います。

海の夫人

(明治三十八年三月十一日竹柏園)

今日は諾威の大詩人で、唯今歐羅巴は申すに及ばず、世界中に名を轟かして居る

ヘンリック・イブセン Henrik Ibsen の御話を致しませう。

イブセンの名は吾邦にも大分今日では知られて居りますが、歐羅巴の文壇に其名聲の盛になり初めたのは既に數十年前の事で、獨逸譯、佛譯又英譯に精確の書があります。それで此英譯が十數年前に日本に渡つたこともありました。其頃は今日と違ひまして、外國文學に對する趣味が世間に普及して居りませんでした。精密な翻譯で海外の詩人を紹介することも今のやうに盛でありませんでした。イブセンの作も大した反響を與へること無しに、噂も何時か止んで仕舞ひました。當時私も上野の圖書館へ行つて此詩人の作物數種を初めて讀みましたので、イブセンの劇詩ながら其頃は自分の考が全く他の方面に向いて居りましたので、イブセンの劇詩をさほどの傑作とも思はず、唯、北歐羅巴には亂暴な突飛な思想を有つて居る人が多勢居る、大方其連中であらうと考へて、餘り深くは注意いたさず、一種怪訝の念を抱いたまゝ、後日ゆつくりと研究して見たいとのみ思ひました。然るに是は妙な事ですが、私共外國文學の研究を志す者が始終取次と頼で居ります。丸善書店、或る意味にては日本文運に裨益する所少からざるあの書肆へイブセンの本が其内參る

と云ふ事でありましたか、どうか云ふ都合で、終に到着せず、確か上方の書店へ廻つて仕舞たといふやうに聞きましたが、何れに致せ其爲に私共は其頃充分イブセンの研究を試みる事が出来なかつたので、東都の文壇ではさほど此詩人に就いて論議を聞く事がありませんでした。しかし京都に住はれて、十年一日の如く文學を研究になつて居る高安月郊君は此時代より夙にイブセンの研究に取掛られ翻譯も二三種出来上がつて居たやうに傳聞しましたが、漸く數年前早稲田大學の文學叢書中に現はれました。其中に段々外國文學に就いて精確の智識を求め、聲が盛になりまして、種々新刊書も渡來いたしイブセンに關しては英譯に續いて、シレンテ
ン Schenker の獨逸譯が參ると云ふ次第、其内には諸威語の原書をすらく、お讀みになる方が出て来るかも知れませんが、僅か十數年のことですが、便利な世の中になりました。

さて私が始めてイブセンの作に接した時には、思想も趣味も全く此詩人とは縁遠い方面に向いて居ましたのです。實申しますと今日でも世界文學の最高點にイブセンを置かうと思はないのです。海外の文學を味ふ人にもそれぞれ最負ひい

がありまして、私共は性來北歐文學には深い趣味を未だに持ちません。殊に近世のトルストイやイブセンは怖い伯父さんのやうな氣がして、英吉利や佛蘭西伊太利亞、または希臘羅馬あたりの詩人を好むやうには參りません。併ながら是は自分の性情にも依りませうが、幾分か習慣の然らしむる所で段々讀書の方面を變じたり、眼前に横はつてゐる近世文明の難問題に對して、多少考を向けて參つた今日では、イブセンのやうな一見不華美^ビではあるが極めて痛切な思想を述べた詩人も稍好きになつた數年前より時々その作物を讀みかけますと、讀めば讀むに従ひ、興味自ら加はり來て、流石に今日の盛名ある所以が解せました。それゆゑ目下の所、頗る此人に感服して居るので、今日この席の講話にと之を選びました。實は少からず不案内の方面に立入て御話申すので、御座いますから、耳新しく面白い事は言へないかも知れません。

今日はイブセンの作中、『海の夫人』Frænka Haver といふ所謂社會劇の畧筋をお話し申します。『海の夫人』とは稍拙い譯かも知れませんが、『海の女』とした方が寧ろ落付が宜いかとも思はれますが、何しろ『夫人』と書いてあるから仕方がない。一

體『海の』と云ふ語も氣に入らないので、原は『海より來りし夫人』と云ふ意味ですが、先づ『海の夫人』と譯しました。

まづ始にイブセンの略傳を述べませう。唯詩を作り劇を著はして暮して居るごく無事な生涯の人ゆゑ其傳と云はゞ單に其生年月と著作目録とに過ぎない。千八百二十八年三月二十日の生れでありますから、今年三十八年は七十八の高齡に達しました。南諾威のシイシ Skien といふ小都會に生れましたが、此處は材木を切出して、前の港から諸國へ送り出す地方です。イブセンの家には北歐諸國の血が混じて居る。祖父の系統よりは丁抹或は北獨逸の血、祖母の方からは蘇格蘭の方の血が入つて居て、兎に角北歐の血統で持切つて居ます。祖父は船長でありましたが、終に難破して死に、父は一寸とした商業を營で相應な暮しをしましたが、イブセン八歳の時に商業上の失敗よりして破産致したので、イブセンは幼年より備さに人生の辛酸を嘗めて、青年時代には大層苦んだのが、抑も其思想と性情とに偉大な感化を及ぼして居るかと思ひます。小さい時から既に大人じみた子供で、かの老子とは少し事異はりますものゝ、心のみは生れて直ぐに白髪でありました。第一小さい時

市内で一番面白いと思つた所は何であつたかと云ふに、一に監獄、二に晒者の刑場（これは罪人を市上に晒らして衆人懲めの爲に示す所です）それで三には癡狂院であつたさうです。八歳やそこいらから癡狂院や監獄を樂みにして見にいづた位です。後年の著作には一寸見て狂人じみた激烈な思想が混つて居るのも實に其筈です。十六歳にして家道困難の爲め己むを得ず、是も諾威南方の港のグリムスタッド Grimstad へ行つて一藥劑師の許に奉公して居る事、五年餘り、此間種々の書に親み又默想に耽つたのであります。時宛も歐羅巴に人心の激動漲り亘つた際で、或は匈牙利波蘭の革命運動あり、或は獨逸が丁抹を侵かすと云ふ様な時勢であるから、イブセンも見聞する所盡く慷慨の種ならぬは無く、自由思想の爲には熱心に焦慮したのも無理ではない。かくてはどうも藥屋の小僧では愈々承知出来なくなつた一體藥屋の小僧からはよく詩人が出るもので、英吉利近代の大詩人のキイツ Keats も藥屋の小僧でした。青春燃ゆるが如き才人が藥櫃の間から首を出して往來を眺めて居つてはどうにも始まらないわけです。殊にイブセンの様な氣象の勝つた反抗の精神に富んで居て、一世の御用哲學や御用文學に首を屈しない人がどうしてそ

んな無味乾燥なる生活に安じられやうか、追々友人も出来、氣が大きくなつて来てクリステイヤニヤ Christiania の大學へ入らうと志し、とう／＼念が遠どいて入學はしました、始め醫者になる積りであつたのでした、所が同學の中には後年有名になつた人が大勢居まして、一番有名なのは今なほイブセンと肩を並べて諾威文壇の文豪たる小説家ビョルンシメルチビョルンソン Bjørnstjerne Bjørnson でありましたが、此人が後年詩を作つて當年の交遊を述べた中に、イブセンは神経質で瘠せて居て、色は石膏の如く、もしや／＼生えた眞黒な鬚のなか／＼ら顔が覗いて居ると書いてある。成程晩年の肖像を見ましても、實に髯武者の老翁ですが、若い時もさうであつたのでせう。私の先生フンケエベル Von Koerber 師の御話に、度々民顯でイブセンを見た事があるが、大層づんぐりした丈の低い人だと言はれました。大學へ入る少し前、歐洲世界の形勢に憤る所あつて、劇詩『カティリナ』 Cathina を作りました。まづ首府の劇部にて演じたいと頼みましたが、どうもうまく承諾して呉れず、書肆からも出版して貰へなかつた時、丁度シュレルウッド Schulerud と云ふ法學生の友人が居て、出版費を持って呉れ大に賣らうとした所が、無慮三十部しか買手がなかつたと云ふ

やうな有様、當時は非常な貧困に陥つた、さりながら元來負惜みの強い人で、貧乏を他人に見せない爲め、食事の時刻になると、ちよつと済まして来るからといふやうな調子で外出して市を散歩して来る。程經て今度はさも旨かつたと云ふやうな顔をして歸つて參り、食後の珈琲を命じたといふ話です。まづこんなに負惜みの強い人で、褒めて言はゞ意思が固いのです。其の後諾威の傳説を種にした『將軍塚』 Kæmpehøjen といふ劇を作り、今度はクリステイヤニヤの劇部にて演ずることが出来、稍々名聲を揚げて來たが、金の方は未だ薩張りうま／＼いかない、千八百五十一年に至つて北諾威ベルゲン Bergen の劇部の座附作者となり、『聖約翰夜』 Sanctansnatten 『ノルマ』 Norma 等を作り、幾分か生計も都合好くなつたのですが、英米の文學者などに比べますと未だ中々低い暮しをして居たのでした。それで其頃はかの特色ある社會劇は未だ作りませんでした、矢張り昔風の時代物を作つたので、勿論後年の思想が少しづつ、微見えて居ますもの、形式と云ひ思想と云ひ、先づ舊式の劇を覗て居りました、其後段々考へて見て、漸々獨得の思想を發達させて來た、近世社會の批評に心を向け、『エストロオトのインゲル姫』 Fru Inger til Østraat 『ノールハッグ

の宴』Gildet paa Solhaug等には後年の調子が現はれて来た。とはいへ思想が段々近世風に傾くと同時に、社會からは愈々嫌はれて參つた。元來人好きのしな上、烈しい諷刺の風を帯びてゐますから、諸威のやうな小國にはどうも合はない。俗人の爲にひどく嫌はれた。そこで通例の人ならば金には困るし、評判は悪くなる、少しは文壇に何の彼と言はれるやうになつたら、筆を改めて世間の風潮に従ふのが通例でせうに、小さい時から意地の張つた人ですから、中々さうはしない。其後二三の作があつて、千八百六十二年『戀愛喜劇』Kjaelighedens Komædieを作りました。イブセン初期の作であります。今から考へますと、後年社會劇の萌芽は既に大概籠つて居ります。妙な考を仕組だ曲ではありませんが、結婚生涯を精密に觀察して、世間並の結婚と云ふものは間違つて居ると論じてゐる。思ひ思はれた一組の青年男女がありまして、是が世間の夫婦を見ると云ふと誠に怪しからぬ、犬が猫を遣り取りするやうにほんの約束で連添ふ事になつて仕舞ふ。それで一生の苦樂皆他人に依つたり或は餘り感服もしないのに一生眺めて居なくてはならぬやうなはめになつて居る。これは大變に不都合だ併し之に反して稀には自由結婚とでも云ひますか

所謂戀愛で成立つた夫婦もある。是も初手の半年か一年は宜いが、時経れば追々平凡になつて仕舞ひ、終には唯の結婚と同じやうな譯になる。さもなければ喧嘩をして別れるのもある。どうも世間の夫婦はどこかまづい所があるのだらうと述べてあります。一口に言ふと日本從來の夫婦などはイブセンに言はせると、まるでいけない。さうかと云つて會々耳にします。自由結婚もいけない。それでは一體どうしたら宜いかと云ふに、イブセンの考は實に奇抜である。曰く、てんで一緒にならないのが宜らしい。女の方が男が宜いと思ひ、男の方でも女が宜いと思つたならば、夫婦にならずに居て別れて居るが宜い。別れて居れば戀愛はいつまでも續くと、随分これはやけな解決で、通例の社會には應用は出来ませんけれども、考としては實に面白いではありませんか。かくてかの青年男女はとうとう夫婦にならずに仕舞ふと云ふ劇なんです。こんな風であるからイブセンの作は到底當時の人氣に投じる譯がない。イブセンは氣違だらう、夫婦になりたいからの戀愛だ、夫婦にならずに置くなんて、そんな可笑しな事があるものかと、大變に笑はれた。所がイブセン先生愈々眞面目になつて笑はれても構はずに、劇詩『ブランド』Brand又『ペーホルキメント』Peer

の言の大作を著はして、文壇の耳目を駭かした實に目覺しい作、熱烈沈痛の極を盡してある。詰り此二曲の教訓と云ふものは、人間は自己を棄てなければならぬ、己に専らでないやうに、他の爲めに働け、さすれば自ら自己を發見するに至る。之に反して自己の爲めにのみ計るものは却て自己を失ふのだといふ論であります。此二曲で大に名を成した爲に政府から六百弗ばかりの年金を貰ふことになつて、イブセンは外國へ遊びに行きました。が、風物の異つた地に悠々自適して、詩想を新しくしやうと思つたのであります。初めは一年ばかりで諾威へ歸る積りでしたが、外國へ出て見ると如何にも氣樂で、諾威のやうな小國に居るよりも世界の中心に出て居て、遠方から故國の形勢を見た方が、どうも詩作に都合が好いと云つて、段々延び延びになつて、永年伊太利亞獨逸或は佛蘭西あたりを廻つて歩き、常に著作にばかり耽りまして、『皇帝及びガリレヤ人』(Keiser og Galileer)と云ふ作を著はした。皇帝とは羅馬皇帝ユリヤノス Julianos の事で、基督教に反對し之れを亡ぼさうとして、遂に事成らず、ガリレヤ人即ち基督の教に敗けた史上の事蹟を題材とし、歴史に現れたる二大思想の衝突を描いたもので、是は詩としては非常に立派なものである所が

四五年經つて千八百七十七年に『社會の柱』(Samfundets Støtter)と云ふ劇を作り、是より後所謂社會劇と云ふ、近世社會の弊害、缺點、虛偽、惡徳を指摘した痛快の散文劇にばかり怩で、七十九年に『人形の家』(Et Dukkehjem)と云ふものを作つた。これは或意味に於てはイブセンの最大傑作であります。其後『再現』(Gengangere)といふ作がある。英譯のゴースト(Ghost)即ち幽霊では少し意が足りません。佛譯のルヅナン(Revenant)が丁度適譯で先づ生靈、死靈に當るのです。是亦傑作の一つに數へられます。『社會の敵』(En Folketjende)等其他に續々ありますが、餘は略しまして千八百八十八年の作『海の夫人』の梗概に愈々移りませう。

イブセンの社會劇中其最大傑作はどれであらう。或る人は『再現』を推し、他の人は『ロスマルスホルム』を選び、又多く『人形の家』と此『海の夫人』とを抜きんでます。何に致せ、後の二曲は共に結婚問題に關係があつて、夫妻間の愛情、離心、波瀾を詳しく述べて在るので、社會劇中兎に角最も深い感動をあたへるものには相違無い。『人形の家』は、夫に大事にされたが、本統に一人前の人間として遇せられなかつた妻ノラが、一朝事變の爲め、今迄の生活が虚偽であつた事に氣が付き、驕然己が身を

自覺して、これから一人の婦人として眞の生涯を送らう、又眞正の意味の結婚状態を新らたに作らねばならぬ、併し其前に先づ自己を立派に仕上げ、人格を養成しやうと云つて、夫を棄て、子を棄て、家を飛出す曲です。イブセンの考では現代の結婚制度、夫婦関係は虚偽である、之を眞正なるものに更へるには、或る場合には、ノラのやうにしなければならぬと云ふ積でせう。然るに此『海の夫人』の結末は全く之に反して、女主人公はつまり飛出さない方なのです。即ち初めは虚偽の結婚であつたのが、後思ひ直して家に留り、眞正の結婚生涯に入らうとする作であるから、『人形の家』と『海の夫人』とを比較参照しますと面白い節々が少くありません。

曲中人物は醫師ワングル Wangel 後妻エリイダ Ellida 及び先妻の子、ボレッタ Boletta 並にヒルダ Hilda 此ヒルダは未だ歳若の娘で、女と云ふよりも、まわ子供の方です。又以前ボレッタに本を教へた事がある教師アルンホルム Arnholm や青年彫塑家リングストランド Lingstrand の他、バレンステッド Balsted と云ふ一寸音楽をやつたり書を描いたり、又旅客の通辯として、土地の旅館に出入する男があります。最後にもう一人、これは何と申して宜からうか、未見の人とでも名づけませう。後の話に依れば其



NORA (M^{me} SUZANNE DESPRES)

—ET DUKKEHEIM—

名をフリーマン Friman と云ひますが、これも頗る要領を得ない名で、其意は即ち自由の人、社會の道德、習慣、制裁以上に超絶して居るといふ積でせう。以上が曲中主要の人物で、餘は市民、旅客數名が出て来るばかり、場所は北諾威海岸の一小邑であります。例に依て、曲を五段に別けて居る。其第一段から順を逐つて御話申します。第一段は醫師ヴングルの邸宅で、舞臺左の方に長廊下づきの家屋、右の方には、東屋めいた一小亭、奥の方は林間遙かに高山連り、兩岸削れるやうに屹立して北歐特殊の狭い入江を見せ、凡べて晴々とした夏の日庭を繞つて垣根がある。其左手家の傍に旗竿といふ書割なんです。

幕明くと家の中から娘ポレタが出て參つて先程から頻りと旗の綱をせつちし居る。パレストッドに聲を懸けて、『どうです、巧く行きますか。』いや、造作もありません。時に今日は何かお客様でもありますか。』え、アルンホルム様が入來らしやるのです。昨晚町へ御到着になりました。』へえ、アルンホルムさん……うむ、解つた。ずつと以前、御家へ見えなあなた先生でせう。』といふうち、ポレタは家へ入る時に向から来るのは今のアルンホルムかと思の外、青年彫刻家リングストランド

體かたの弱よわさうな若い人で、帽子を振りくゞやつて来て、『お早う』。パレストッドはまだ旗の綱をいぢつて後向で居たが、知人だらうと思つて、『お早うございます』と言ひながら、旗を揚げて仕舞つて、振向いて見るとよく知らない人だ。『時にあなたはどなた様で』と聞く中、リングストランドは庭にあるパレットや繪具箱を見付けて、自分も好きな道ですから、『おや、あなたは繪をお書きなさるのですか』『少しばかり書きます』『どう云ふ御繪で』『今書きかけて居るのは魚の書です、人魚が諾威の海岸に打上げられて段々と死んで行く所を寫さうと思んです』と答へた。これは全篇脚色の龍鱗を露らはして居る所なので、何でもないうやうな話ですけれども、後で思ひ廻はすと頗る面白い。即ち此『人魚』に女主人公即ち『海の夫人』を象つてあるイブセンは斯う云ふ工合に一寸とした話の中にも、後段大關係のあるやうなことを書いて置きますが、むづかしい言葉で言ひますと、これを象徴主義と云ふのです。無形むけいの思想を有形けいに書き直す所謂譬喩へいごとは違つて、事物相互の間に隱約たる一種の類似、相對を發見して、其一を現はして他を暗示する近世派の特色は此象徴でありませう。又、茲に一寸御断り申しますが、人魚と云つても、あの高木の清婦湯に付いて居

るやうな人魚ではない、あれは白髪しろかみの皺しわくちやですが、西洋せいやうの人魚はもつと若い腰から下が魚で、其上は眩くらゆい位の美人、それに日本のは何時でも金の鯨くじら録ろくみたやうに尾を上げて描いてあるが、希臘ギリヤや、北歐きたう俗話じやくわのは、さうも限つた事はありません。さてリングストランドは、是れは中々面白い、實は私も少し彫刻をやるんです。『彫刻と云ふものは派手な豪華なものですな』など、段々心易くなつて、パレストッドは身の上話になり私は元と旅役者でした連中で此町へ来て興行た所が頗る不入であつたため他の者の歸つて仕舞つた跡、私は獨身者だから、つい此所に居る氣となり、今では旅館りやういんに出入して通辯つうべんも爲る、案内者にもなる、暇の時はこんな繪具いぢりもやるので、其他一寸と顔を剃つたり、舞踏も教へたり、當市音楽會長です。所謂郷に入れば、人間は抑も風土に化するを以て宜しとすなど、喋舌しゃつせつてゐるうち、ポレックとヒルダとが出て來た。リングストランドは此ヒルダに會ひたくつて來たのですから、一禮しますと、ヒルダは別に答禮もせず、直ぐ言ふには、『あなたもう朝の散歩なすつて』『え、その未だ餘り散歩しません』『海水へは』『少し浸つて直ぐ止ました、住すまきに阿母様にお目に懸りました』と云ふのは即ち夫人ニクイダのことです。一體、ホ

レタ、ヒルダ兩人は繼母エリイダを好いて居ませんから、今『阿母様』と言はれても、『おやどなた』など、濟まして『あなたの阿母様です』と二度言はれた時『あゝさうですか』位の返答甚だ以て冷淡なそぶりです。何故さうかと云ふと、エリイダ夫人は毎日海へばかりいつて、家事はてんで構ひつけず、自然情愛が起らないから娘達との間柄もしつくりゆきません。此時ヒルダが言ふには、『少し今日は用がありませうから折角の何ですが、暇の時に御遊びに入來らしやい、こゝいらを片付けて居るのは實は御誕生日だから花を採つたり旗を揚げたりするので』、『誰の御誕生日です』、『阿母様の』、『さうですか、それでは又上りませう』と云ふ工合で、詰り體能く斷はられて青年は歸て行く。其時向から、往診を仕舞て歸て來る父ヴンダグがやつて來て、『今歸つたよ、大層草臥れた』といふうち、アルンホルムも登場して始めは此父子と後はヴンダグだけと色々話を致し、とゞ、一人になる時エリイダ夫人は海水浴の歸途、濡髪さつと振亂した儘歩いて來て、アルンホルムと一別以來の挨拶をします。

此アルンホルムは一體エリイダを、ヴンダグの所へ嫁ない時から知つて居た。エ

リイダはもとシールドギック Skoldvik といふ處の燈臺守の娘で、昔アルンホルムが其邊の學校教師であつた時戀意になつたが、ヴンダグ夫人になつた後、夫の友人といふので、交際して居る。茲に色々昔話になつて、遂に談は海の事に移ると、頗る不思議な論が起つた。エリイダの言ふには、『海ほど晴々するものはありませんね。私は一日でも海へ行かないと、氣が鬱して胸が壓されるやうですから、家に居ても大抵母屋の方には居ず、此亭へ來て色々用を致しますが、娘達は夫と同じやうに、あすこの廊下の方に居ますから、用事の時は一寸聲をかけさへすれば宜ろしいのです』と言ひ出し、段々話が眞味になつて來て、エリイダのいふには、『打明けてあなたに御話したいのです。實は此家へ來て以來、此頃では一日も此家の人のやうな心持がしませんが、どうも氣に掛つてならないのは、昔シールドギックに居た時分の事で、始終それを忘れることが出來ずに、何だか其方ばかり氣が傾いて居て、妻として或は娘の母として務を盡すことが出來ません』と、大分秘密のこと迄言及ぼさうとする時、先程歸つて行つたリングストランドが又登場する。今度は花束持參で、『や、奥様今日はあなたの御誕生日さうですから、花を持って來ました』と言ふ。エリイダは、『いゝえ、誕生

日では御座いません、何かの御間違でせう』でも、先程御嬢様がさう仰つしやいませした。家を奇麗にして旗を揚げるのだと……』つまり、二人の娘は實の母の誕生日を守つて今の母には内緒で置く、甚だ水臭いことですが、エリイダは體よく其場を濁として、『嗚呼、さうでした。實は、極うちうちで祝ひますので、では難有存じます。頂戴しませう』と花を貰つて仕舞ふ。それ故リングストランドは終に眞の意味を知らず、話を始め彫刻の事につきて一つ面白い話をした。エリイダ夫人が『あなたは彫刻をなさるさうですが、どう云ふやうな御考を有つてゐらつしやいます』と問ふに答へて『實は私の仕上げやうとするのは、なか／＼大作で、題まで定つて居ます』といふから、それは面白いして、其題は『自分の經驗から得たのです。三年ばかり前まで私も航海して居ましたが、英吉利のハリファックス Halifax と云ふ港から諾威へ歸る時、缺員が出来たので、一人の亞米利加人が水夫長に雇はれました。所此人は始終黙つて居る沈鬱な男で、船長から舊新聞を借りて始終讀んで居ました。諾威の新聞でした。諾威語の稽古だと云つて頻りに讀んで居る所が、一日自分は少し心持が悪くつて船室に寢て居た。其亞米利加人も何か怪我をして同室で例の如く新聞を讀ん

で居ますと、突然眞青な顔をしてさやつと一聲叫んだ。驚いて見ると獨語のやうに、『あれ程までに約束して置きながら、誓を破て、他所へ嫁つたか』と云つて嘆息して暫く經つて又言ふには、『なほに他所へ嫁つても構はない、どうあつても連戻す』と言つた。後は何とも言ひません、唯、奇體なのは、其言葉は諾威語でした。餘程言語の才のある人と見えて僅かの間によくも、あんなに旨く外國語を覺えたのであらう、何しろ不思議な事と思ひましたが、數日經て船は暴風に遭ひ今にも顛覆しやうといふ時、自分達は備附の大端艇に乗つて逃げるし、其他の面々も皆散々になつて、此水夫長はもう一人の男と小さい船に乗つて逃げた。其後、絶えて音信を聞きませんして見るとあの水夫長は死んだに相違ないが、あの新聞を讀だ時の風でみると、今頃は幽霊にでもなつて他處へ嫁づいた妻を連戻しに行くだらうと、其考が大層深く頭に染み込んだもので、終に之を種に大きな彫刻を作らうと決心しました。一人の女が横になつて居る上に、死んだ約束の夫が來て之を喚起さうとして居る所を彫刻にする積りです』と話すうち、見る／＼エリイダは顔色變はり、大變に感じたやうでした。が、リングストランドが歸つて仕舞つた後で、アルンホルムが『あなたは、大分

御心持を悪くなさつたやうですが』と言ふと『え、本當に厭やな心持になりました』と答へる。アルンホルム『併しその位の事は始めから呑込でいらつしやりさうなものでせうに』と話が少し行違て解からなくなる。斯ういふ事は、イブセンの頗る巧い所で、アルンホルムの言は娘達がエリイダを母と仰がずに、他人取扱をして亡くなつた實母の誕生日を内所で守るのを、嘘を氣に掛けるだらうが、斯ういふ家庭には有り勝の事で疾うから、其位の事の有るのは呑込めさうなものだといふ意味ですが、エリイダは其んな意味では無い、もつと深い秘密がある。即ち自分が昔約束した男のことを今の青年に話されたので、ぎつくりしたので、『いゝえ、さうじやあ、ありませんよ』と、アルンホルムに秘密を打明けやうとする途端、娘二人も夫も來ましたので、話が出来ずにしまひます。そんな工合で此第一段では、全體の話の糸口が解りさうになつて居つて、十分ならざるに終り、人の好奇心を刺戟してどうしても次の幕を見たいやうにしてある。戯曲の技巧上最も肝要な點はこゝであります。

『海の夫人』第二段には此市の海岸にある、譯して申せば『望遠臺』と云つたやうな

公園を多勢の人が逍遙して居ります。其の所へヴングル一家の者も散歩に來て居て例の旅館ホテに使はれてるパレストドも來て居れば、青年彫塑家のリングストランドも來合せてゐますが、全體此人は雜船の時にだいぶ水を呑んだのと、永く海中で寒いめをしたので肺に故障を起して居ながら、自分はそれでも、大した病氣の積でなく、頻りに前途に望を抱いて行くゆゑは斯うしやうとか、あゝしやうとか、事業を企てる心願をして居るのが、眞に可哀想と思はれます。此所、イブセンの筆致はいかにも自然でいろ／＼面白い點があります。第二段の眼目といふのは、夫ヴングルと妻エリイダと公園丘上の石に腰うち掛けて眞面目な話をする所で、エリイダが夫に向つて『不斷は忙しいので、本當の御話が出来ませんが、今日こそは年來心に替めて居た有邪無邪を申上げる積りです。實は私がこちらへ來る以前、約束した人がありました。其事が氣になつて、氣になつて、終には妻としての義務も果されず、従つて娘たちの世話も十分に出來ないやうになりました』と云ふ話になると、ヴングルも『お前の様子は變だと前から思つて居た。どう云ふ譯であるのだね。實は今日アルンホルムを呼んだのも、全くお前を慰める積りでした。お前はあのアルンホ

ルムを思つて居つたのだらう、いや、私には嫉妬の考はない、唯お前がさうして苦で居るのを見ると如何にも氣の毒だから、せめてアルンホルムの顔でも見せたら幾分か慰める事もあらうと思つたのだ」と言ふと、エリイダは「いえ、私決してアルンホルムさんなどを思つては居りません」ときつぱり言切る。ヴンゲルは驚いて「でも、お前が娘の頃に遊びに行つた者の中で、あの人の他には思をかけるやうな男は無い筈ではないか、一體アルンホルムでなければ誰だ」と聞くと「實は能く名も知らない人です」「名も知らない」と云ふのはどう云ふ譯だ」と又聞く。「あなたも御承知でせうが、私が娘の時分に、亞米利加船が、あの地へ着いた事がありまして、せう其の船の水夫長にフリーマンと云ふ人があつて、ちよく／＼遊びに參つて、いろ／＼な話をして居る中に、とうとう結婚の約束までしたのでした」「なに、人もあらうに、あんな男と約束したのか、あれは船長を殺して逃亡した大罪人、素性も何も解らぬ人間ではないか、どうしてあんな者と氣が合つた」「別に氣が合つたのか合はなかつたのか知りませんが、何となく引張られて行くやうな心持がしました」「でも人殺ぢやあないか」「人殺だつて何だつて構やあしません、唯もう磁石のやうな引力で

引付けられたので……」「一體平素も話をしたと云ふが、どんな話をした」「はい、海の話をして致しました」「妙だね、通例若い男女が意氣投合するといふ場合に海の話でもなからう、海の話つてどんな話だい」「それは、あの曙の海の色とか、夕暮の波の光景、鯨、江豚、氷山、霧、さう云ふ面白い話ばかりで、心は段々接近して來て、遂に或日あの人の言ふには、私は其内にお前を迎に來る、それまでの固めに結婚の式を擧げて置かうと言つて、自分の指環と私の指環を結付けて、海中へ抛込で申すには、是で結婚は濟んだ、是は人間社會の結婚でない、本當の海の結婚だ、お前は海と結婚したので此約束は堅い、極堅い、どんな事があつても破れることはない、何れ今に迎ひに來るからと言つて、それなり歸つて仕舞ひました、丁度今から十年ばかり前の事です、が今以て迎に參りませんから、かう遠ざかつて居る中に、心を引かれる事も段々薄くなり、なりました、實はアルンホルムさんからも結婚を申込まれた事もありましたが、其時はあの海の人の引力が強かつたので、御話を斷つて仕舞ひましたが、暫くしてあなたも結婚を御申込になつた頃には、もう引力がよほど無くなつて殆ど忘れたやうであつたから結婚しました、然るにこゝ三年ばかり前から、又もや引力が強くな

つて来て、何所に居るともしらず、只大尉私を引張るやうな気がします」と云ふ話。それでヴンダは醫者ですから、それは神経衰弱か何かで、病氣なんだ。營養不足などだらうから運動でもすれば直ぐなほる」と云て居る中に多勢の人がこたゝゝ来て、ので充分に話も出来ず、とかくして第二段は幕。

第三段ヴンダ邸の庭園に復ります。此庭は第一段の場所とは少し違つて居て、汐入の池があり、向ふに垣根を圍らし、其先の方に海水の遠見、癆症の彫塑家リングストランドと此家の娘ヒルダとが釣をして居ます。そこで魚の論が始まつた。娘ボレットタも其所へ来て、編物をして居れば、アルンホルムも亦遊びにやつて來るといふ次第。魚の論にいふやう、大海に住で自由に游泳して居る魚もあるかと思へば、また斯んな汐入の池に安じてゐる小さい鯉もある。人間と云ふものは海上の大魚のやうになるが宜いか、或は池中の鯉のやうに安心すべきものかと、イブセン得意の意見を洩してあります。ボレットタは頻りに世の中へ出て活世界の事物に接したい、即ち海上の大魚になりたいと述べる。さう斯うして居る中にエリイダ夫人も歸つて來まして、非常な氣焰を吐きます。其説にいふやう人間と云ふものは、一體海に居

るべき動物だ。魚と同じものである。然るに近世の社會が間違つて居るので、近世文明は人間を陸の動物にして仕舞つた。それだから私は日に一遍づゝ海に入らなないと人魚が陸へ上つたやうな心持がして、くしやくしやくすると、如何にもよくエリイダの性格を現し、又近世人の懂がれ心地を述べてあります。其内に、ヒルダ、リングストランド等は其所を去つて仕舞ひ、アルンホルムも家の方へ入つて行つて、エリイダだけ、庭に留まると海上遙かに流笛の聲がする。と見れば大きな亞米利加船が此港へ立寄つたのであつて、なほも海の方をエリイダが頻りに見て居る中、突然垣根の上に『見知らぬ人』の顔が現はれ、それと同時に夫ヴンダも家の中から出て來ます。其所が全篇の頂點になつて居る興味ある場であり、此『見知らぬ人』はやがて一聲『エリイダ』と呼びかけても、エリイダは、まだ海上を見つめて、此人が入つて來たのに氣が付きません。てつきり夫が來たのだと思つて、『あなた入來つしやいましたか』と答へる。『とうとうやつて來た』と男が言ふので、氣が付いて、願れば、全く別人。喫驚して『どなた様です、御呼になりましたのは貴方ですか』と聞きませうと、『勿論呼びに來たのだ』とちつと見詰る其眼を見て、エリイダは只愕然と『あの眼が

……あの眼が……』と云ふあたり舞臺で演ずる所を想像して見れば、俳優に非凡の技倆を要する事でせうが、又面白さうではありませんか。『分つたかね、先年の約束通り、とうとう呼びに来ましたよ』と再び言はれても、エリイダには答が出来ません。唯眼が怖い、眼が怖いと言つて居る中に夫が入つて来て、『あなたはどなたです、人の家へ無断で御入りなすつて……』と聞く、エリイダは單に怖がつて居るばかり、そこで此『見知らぬ人』と夫との談判になる。其男が言ふのは、『私は妻を迎ひに来たのです。貴方こそ何だ』『貴方こそ何だと、愚圖々々言ふと、巡査に引渡して仕舞ふ』紳士ながらも、賣言葉に買言葉。エリイダは、『それはどうか御止し遊ばして』と止める。一體此『見知らぬ人』は夫ヴンゲルをてんで眼中に置かない、無造作にエリイダに向ひ、『ちよつと此港へ寄つたばかりで、半時間もすれば直ぐ船が出る。歸りにまた寄るから、其時までには御決心なさい。迎ひに来ますよ』と言つてすた／＼歸つて行く。即ち十年前に指環を結で海中へ投じた妙な男が愈々妻を迎ひに来たのであります。して見ると、リングストランドの難船話も半は事實、半は本當でなかつた。難船はしたけれども、其男はどうかして生存して居つたのであります。

第四段はリングストランドと娘の間答で始まります。リングストランドは病氣で長生は出来ないものでありながら、頻りに前途に望を維いて、事に依つたら此家の娘のビルダと結婚したいやうなことを述べるのを、ポレツタが程よくあしらつて慰めて歸す。それからまたアルンホルムと主人ヴンゲルとエリイダの病氣のことを相談し、今までの秘密をすつかり互に打明けて、善後策を考へる。アルンホルムが言ふには、『どうも仕方がない家に置いちやあ、いけなからう。故郷シールドボックの燈臺へ暫くの間やつて、例の海濱で養生したら或は癒るかも知れない。さうしたら宜ござんせう』と云ふので、相談が極る。『ではさうしませう。今日は送別會、即ち海の夫人の送別會を開いて、楽しく會食をしやう』と云ふ所で幕になります。さて最後の第五段は、第三段と同じやうに汐入の池のあるヴンゲル邸の庭園の一隅であります。今まで舞臺に登つた人々は、大概揃つて暫くの間いる／＼話をし居りますが、と、ポレツタとアルンホルムだけ残ることになる。此アルンホルムも妙な人なんで、ポレツタは自分が前に教へた娘、年も大層遠ひますが、實は之を想つて居たので、今度此處に呼ばれたのを幸ひに結婚を申込まうと思つて來ました。

から此庭園でいよゝゝ結婚を申込みます其申込みかたが餘程うまく書いてありまして、イブセンの結婚論を明かに現はしてあります終にポレッタは年は違ふけれども貴方の妻になりませうと承諾する途端、エリイダ夫人は庭の方に降りて来て後よりヴンゲルも續いて來ます此時流笛の音、入江の方に鳴り、亞米利加船は遠見に現はれるやがては彼の『見知らぬ人』がやつて來て『さあ今歸る所だ今日一緒に行かなければ一生行かれないから……』と云ふヴンゲルは今日さへうまく無事に済めば、エリイダの病氣が癒り間違つた考も消えるだらうと思ひますから頻りに引留めやうとする男の方は依然として唯前の通りに來いゝと云ふので、中に立て當惑して居たエリイダは此時驟然として夫に向ひ、『どうか私を離縁して下さいませし』と云ふ『なせ離縁を望むのです』考へて見れば貴方と私の結婚はどうしても間違つて居ました私はあの人と通例の夫婦の關係こそ無けれ、心中に固く約束をしたのですあの人の妻ですされば永久に操を守るべきところ、貧窮の爲め又いろゝの境遇上の都合で、終に此所へ嫁に來たばかり併ながらそれは本當の結婚ではありません貴方が私を御買になつたのです『なに買ったこれはひと』

『御買ひになつたのに違ひはありません近世の結婚は畢竟女が自分を賣るのです。あの方ならば連添つて居て、一生困るまいとか、あの人ならば後々出世しやうから夫人になつて置かうとか、女の方でも計算し、又男の方でも相當に金はかゝるが、食はして置けばどうにかなるだらうと云ふ考で買ふのです、結婚ではない、ほんの賣買です、さあこの大間違を改めませう、其賣買關係を此所で絶ちませう、取消しませう』と、痛快に尋常結婚の不條理を極論して、離縁を求め、商賣上取引を止めれば宜いのだから取消して下さいと言ふので、ヴンゲルは一時は非常に留めたがどうしても肯かないし、一方には『見知らぬ人』が『さあ早く行かう、早く行かう』と催促をするので、終にヴンゲルも意を決して『それでは已むを得ない、今までの關係は絶ちませう、お前の責任を以て、自由意思を以てどうともするが宜からう』と言ひ放ちます。此自己の責任、自由意思と云ふ句が此劇の最も肝要な句であります。此言を聞いてエリイダは、愕然、夢から覺めた様になり、『責任』『自由意思』と云ふ字を繰返して、夫と『見知らぬ人』との顔を見競べて居る。さうすると『見知らぬ人』が時計を出して『やもう出帆の時刻が迫つた、約束を履行しやう、私の妻だから一緒に御出なさい』と促

すあたり、餘程ゆつくり演じる事だらうと思はれます、暫くの間エリイダは考へて居りましたが意を決して言ふには「いゝえ参りますまい、噫、始めて夢が覺めた、今までは間違つた夫婦關係であつたから、何とも思はなかつたものゝ、自分の責任、自由意思で考へると事情が丸で違つて來た、貴方は私に對してもう何の力もありません、私は矢張り陸の動物となつた、自分の考で選ぶならば、海の動物を棄て、陸の動物となりませう」とヴンダに寄添ふ。そこで「見知らぬ人」は「今までこそ自分の意思で以てお前を動かさせたが、今度はそれよりも強い一種の力が此所に現はれたやうである、ではもう是が最後の別れである」と言つてすつと庭から海岸の方へ降りて行つて仕舞ふ。此時傍の方から一番此義理ある母を嫌つて居たヒルダが飛んで來て「阿母さん」と言つて抱付くと、エリイダ夫人も急に繼子が可愛くなつて抱合ふといふ、工合實に人間と云ふものは、虚偽の上に立つて居る間は、どうしても本當の悟りが開けない。ヴンダ夫婦の關係は、眞に賣買關係で、少しも高尚な倫理上の關係でないから、さう云ふ間に入つて居る中は、昔の「見知らぬ人」との契約が有効であつて、どうしても其方に引かれるが、其代り自分で以て、其關係を絶つて、自由意思

で選擇することになれば、初めて本當の道を知ることが出来るといふのが、イブセンの根本とした教なんです。「人形の家の」ノラは、虚偽の上に築かれた家庭、虚偽の夫婦關係、親子關係、即ち夫を捨て子供を捨て自己を教育する爲に、家を出て行つた、イブセンの考ではそれも尤めない。人生の最も貴いものは自由と眞實とで、一時社會が紊亂しやうが家庭が崩れやうが所謂「胡魔化」は、どうしてもいけない。「胡魔化」の上に立つた倫理は、砂上の家の如く、つまりは永久の弊害を生ずるから、ノラの如き境遇で、あゝいふ行動を執るも宜いのである、併ながら、此「海の夫人」のやうな場合に、虚偽の關係を絶つて、自己の自由意志に依つて、新生涯に入らざる事が出れば、眞正の倫理に適ひ、又偶然に世間の所謂道徳にも合するのであると教へる積りなんであります。こゝで最後に滑稽な男のパレステッドが出て來まして「や、それでは奥様もとうとう人魚のやうにお成んなすつた陸に上つた人魚だ、人魚は陸に上ると死ぬが、人間は死なない、貴方は海の夫人ですが、是から陸の動物にお成んなさるのでせう」と言ふと、エリイダが言ふに「左様、自由意志を以てすれば人間は處を變へる事も出來ます。」ヴンダも言ふに「詰り自己の責任を以てすれば人間は思想を變へ

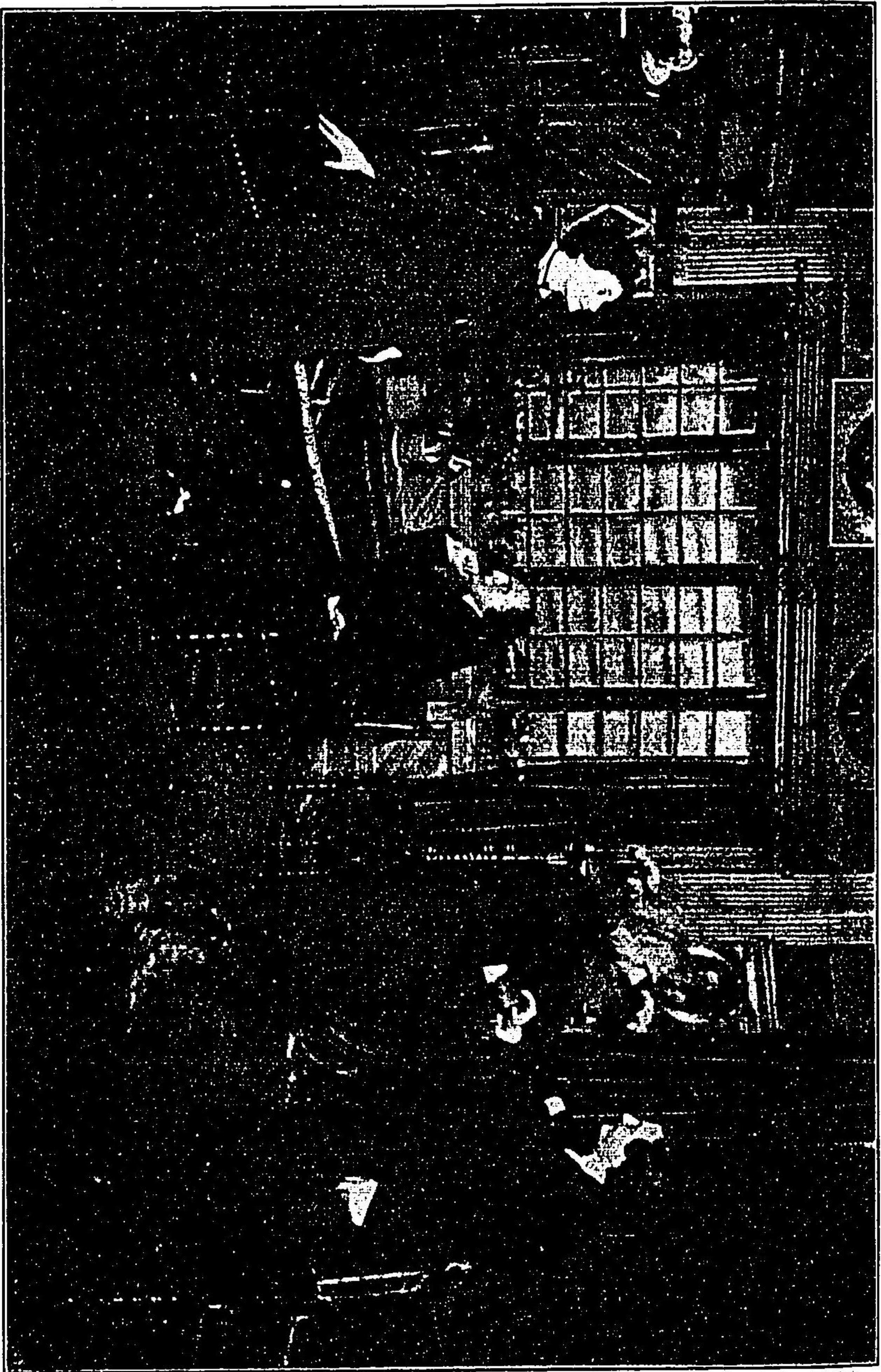
が事が出来る。『エリイダが』本當にそんなものではね』と云ふやうな所で、遠見に例の亞米利加船は入江から沖へ出て行つて仕舞ひ、海岸の方に囀鳴たる樂聲起て此劇が終ります。

以上が『海の夫人』の梗概であります。此前嘗て御話し申上げたダシモンチオの劇のやうに華々しい所は少しも無く、まるで行方が違つて居ります。態と何でも無い平凡な句ばかり列ねてゐるが、精讀して見ると非帝に意味深長に作上げてゐる所がイブセンの特色であります。私一個の趣味から申せば、イブセンのやうな詩人を非常に好きと云ふのではありませんが、靜に味つて讀んで見ますと、自分も實は近世の人間であるから古典文學の正雅なる美よりも却て此近代美をしみじみと感じます。

全體今日の世の中は決して天下泰平ではない、戦争ばかりが亂世と云ふのではなく、戦争の外に今日の世界は一大擾亂中に包まれて居て、中々大抵では無いので、二千餘年前の希臘の世に於ては人間の思想が割合に中正を得て、先づ天下泰平であつた。又今より千年ばかり前の所謂中世には、人間が宗教に安心を得て居た。歐

羅巴では基督教、日本の方では佛教儒教などで安心立命を得ましたが、十九世紀から二十世紀にかけて人間の信仰は餘程動搖を受けて、宗教のみならず、人生百般の事、凡ての思想界には狂瀾怒濤、實に氣を弱くすれば膽を寒からしむる事實ばかりであるから、眞に一世を代表する文豪の作には驚くべき思想が沸騰して居ます。トルストイ、イブセン、マアテルリンク、ニイチケ、モダンヌンチオの如きは平凡の思想家より見れば宛も亂臣賊子の如き觀を呈して居るだらうと思ひます。假にイブセンのやうな議論を直に實行して見たと想像して御覽なさい。滔々たる世間の夫婦は、大概離縁にならなければなりません。ではどうして宜いかと云ふに、イブセンのやうな考は、何も文字通に直ぐ實行しなくつても宜い理想である。唯斯う云ふ思想に刺戟されて、昔から解決が出来ない人生問題を再び新に解いて行くと、勇氣と奮發とを人心に籠めれば、イブセンの目的は大半達せられたと云てよい。ニイチケの哲學トルストイの人生觀もさうであつて、丁度溜水のやうな社會を搔廻して人間を進歩させ、發達させる動機となつて居ます。此覺悟を以て味へばイブセンの説は毫も亂臣賊子の説でなく却て濟世救民の福音と渴仰することが出来ませう。

それで斯う云ふ類の社會劇を歐羅巴の芝居で演じますと、観客は頗る感動する。まるで自分達の日常生活を舞臺に掛けたのであるから、慰みよりも寧ろ當付けられ、叱られに、教へられに行くやうなものです。芝居がはねて、歸途に成程自分のやつて居ることは、悉く皆悪いといふのではないけれども、どこか變な間違つた所もある。改革しなければいけない。今までの道徳に教へられたのは、ごく穩かなもので、金を拵へて、税を納めて、慈善會へでも行けば眞面目の生涯と思つたが、中々さうでない。此世の中には、やるべき事が幾らもある。第一人間は社會凡俗の多數説に盲從してはいけない。個人の長所を發揮しなければならんと云ふ考も起る。併し個人の長所を發揮するにしても、單にお山の大将では濟まぬ。人を虐げたり、亡ぼしたりして眞正の自己を發揮することは出来まい。矢張り個人の性を發揮するには自己を棄て、献身克己の事業を營で、他人の爲にし、社會の俗説に盲從せずして自己の考で、自分の責任を以て、行くべき道に突進す可きである。斯う云ふ人は社會の中でも先に立つて人を導く人生進化の一動機となり原因となる偉人英雄なのであります。イブセンの如きは浮世の波に一種の探海燈を照らして、社會の暗黒なる弊害を露



REBECCA (Mme Eleonora Duse) RECEUR KROLL (M. Mazzanti) ULRIC BRENDI (M. Dornak) ROSIER (M. Galvani)
NATIONAL THEATRE DE CHRISTIANIA—ROSMERSHOJN—ACTE Ier

はし、人間の本性を透けさせやうと云ふ目的で詩を作り劇を作つたのでありませう。それゆゑ此『海の夫人』其他にまだ『ロスマルヌホルム』Rosmersholm『ヘッダ・ガブリエル』Hedda Gabler『建築師』Bygmeister Soiness 千八百九十九年『死者復活の時』When We Dead Awakenと云ふ作があります。これがイブセンの最終の作になつて居ますが、大分高齢ですから、こゝに筆を擱いたやうであります。十九世紀後半以後即ち現代の思想界或は狭く言へば劇詩に向つて、イブセンの感化は實に偉大なもので、一生の述作より綜合して、其人生觀、文藝觀、劇詩の技巧等は一場の談話では盡くされません。今日は單に其一傑作を紹介して、北歐大家の偉を忍ぶことゝ致しましたのであります。

外國文學の研究

(明治三十六年十月榊牛會)

私は今日『外國文學の研究』と云ふ題を設けて、極く簡單に外國文學の研究に資するやうな事を述べやうと思ふ。こゝに外國文學と云ふのは、支那を除いての話で、支那も勿論外國であるが、支那文學は久しく日本に傳はつて居りますから、是は外

國文學の中には入れない、外國文學とは重みに歐羅巴の文學を指したのであります。それで外國の文學を研究するには、勢先づ外國語の話をしなければなりません。吾日本に於て、外國語は如何なる順序に依て學習せられたかと云ふに、吾邦へ歐羅巴語の傳はつたのは私の考では葡萄牙が一番初めであらうと思ふ。間もなく西班牙語が傳はり、同時に羅旬語も這入つて來た。それから和蘭、佛蘭西、英吉利、獨逸と云ふ様な順序になつて、近來は一人にして三つも四つも乃至十以上の外國語に通じた方もあるさうであります。併し順序はさう云ふ工合であるし、又今日の英語或は獨逸語のやうに、餘り人の知らぬ言葉で、戰國時代に日本の一隅に於て行はれたと云ふ事實も餘り明かになつて居らぬから、此葡萄牙語の事を少しく述べやうと思ひます。成程今の日用語中には、葡萄牙の言葉が頗る多い例へば、近頃仙臺平が廢つて、『茶字』の袴が流行して來ました。是は印度の利兀兒と云ふ土地から出る織物で、葡萄牙語より傳はり、それから昔しは唐棧を『聖多獸』と唱へたが、是は英語で云ふと『セントトマス』で、印度東境の地名である。『紅殼』は印度榜葛刺から來たもので、今日漢字で書くのは當字に過ぎず、矢張葡萄牙語である。それから『馬鈴薯』、『南

瓜』、『有平糖』、『金平糖』も其通りであります。又今日の人は、佛蘭西語の轉訛のつもりで、『石鹼』と云ひますが、是も『石鹼』と云つて葡萄牙の言葉であります。其他『天鵝絨』、『硝子』、『羅紗』、『合羽』、『更紗』、『莫大小』、『卵糖』、『かんてら』、『吉利支丹』、『金絲雀』も皆葡萄牙語より轉じたのであります。

斯う云ふ工合に、日本語の名詞中には、葡萄牙語の影響が頗る多い、此外基督教に關する語が此外國語を通じて傳つた事は、文學士村上直次郎氏の研究、往時の西洋交通が國語に及ぼしたる影響といふのに譲て、茲には精しく述べません。村上文學士の研究は此事に關する殆ど唯一の頗る正確の表であるから、安全に信據すべきものと思ふ。私は語學の方面より移て文學の方面へ轉じ、段々調べて見たのに、既に早く十六世紀の頃、葡萄牙人或は葡萄牙人に教を受けた日本人の手に成つた所の西洋文學の翻譯が日本に數種あるといふ事實を發見した。日本に於ける外國文學の歴史は、先づ其邊から始めるのが至當であらうと思ふ。其翻譯が數種ある中で、今日其面白いもの二種を取つて來ました。それは人のよく知つて居る Thomas a Kempis と云ふ人の著した De Imitatione Christi と云ふ書であつて、何と譯しますか、種々

譯名が違ふやうですが先づ『基督の模倣』と云つて、人は基督の心と行とを學んで、其道を踏まなければならぬと云ふ千四百十五年頃に出來た有名な書である。それが既に千五百九十六年、即ち文祿四年或は慶長元年羅馬字で日本語に翻譯されてあります。勿論羅馬字會の綴法とも違ふ一種の便利な法を以て書いてある。此書の題は次の如く書いてあります。

CONTEMPTVS mundi jenu. CORE YOVOTOI, IESV CHRIS-ono gochokyo ni naniabi

latimaki-ru michino voxiyuru qio. NIPPON IESVSNO COMPANHIA no Collegio nite

Superiores no goguegiu notte coreuo fanni fraqu mono nari. *Fogint gataxeno nengy. 1596.*

(コンテムプトム・ムンディ・エンヂ、全部これ世を厭ひイエスキリストの御行蹟を學び奉る道を教ゆる經、日本イエスキリストのコンパニヤのコレジウムにて、メヘリオレスの御下知を以てこれを版に開くものなり。時に御出世の年忌一五九五)

此書の内容を讀んで此翻譯に一種の妙味あることを示しませう。(以下羅馬字綴を漢字交りに書き更へます)

おんあるじ、いえずくりすとを學び奉る經卷第一

第一世界の實も無き事を卑しめ、おんあるじ、いえずくりすとを學び奉る事
おんあるじの宣はばく、QUI SEQUITVR ME, NON AMBVLAT IN TENEBRIS.

SED HABEBIT LVMEN VITAE. Ioan. 8 われを慕ふ者は暗路をゆかず、たゞ壽命の

光をもつべしとなり。心の暗路をのがれ、眞の光を受けむと思ふに於ては、基督の御行蹟と御氣質を學び奉れと、この御言葉を以て勸め給ふなり。しかるとさ
んば、基督の御行蹟の艱難をわれらが第一の學問とすべし。基督の御教は諸の善人の教に勝れ給へり。善の道にたち入り、たらむ人は御教に籠る不思議の甘味を覺ゆべし。しかるに多くの入基督の御法をしげく聴聞すれども、發起少きことは、基督の御内證に値遇し奉らぬ故なり。……云々

それから今一つは伊蘇普物語の翻譯であります。千五百九十三年、即ち文祿二年正月に出版した羅馬字の日本語であります。が随分是は珍本で、とても今日にはありません。『ソラテイシ・シ・ムジイヤム』British Museum の圖書館に一部現存して居るやうです。其表題を元の儘羅馬字で題はせば次の如くなります。

ESOPO NO FABVLAS. Latinu vaxite Nippon no cuchiho nasu mono nari. IESVS NO

COMPANHIA NO Collegio Amicusani voite Superiores no gomen-giofoxite coreuo famni
qizamu mono nari, Goxuxxe yori M.D.L.XXXXIII.

(エソポのフンラス、羅句を和して日本の口となすもの也、イエヌスのコンパ
ニヤのホルレジョ、天草に於てスベリオレスの御免許として之を版に刻む
のなり、御出世より千五百九十三年)

是が我國に於ける伊蘇普物語最古の翻譯でありますが、其文體の質樸なうちに
脈々たる雅味があるのも一興ですから例の狼と羊の話を読で見ませう。

ある川端におほかめも羊も水を飲むに、おほかめは川上に居、羊の子は川裾に
居た所で、かのおほかめ此羊を食はばやと思ひ、羊のそばに近づいて云ふは、そち
はなせに水を濁らいてわが口をば汚がいたぞと怒つたれば、羊の云ふは、われは
みなすそに居たれば、なせに川のかみをば濁さうぞと重ねておほかめの云ふは、
おのれが齒は六ヶ月前にも水を濁らしたれば、いかでか其罪を免がれうぞ、羊の
云ふは、其時は未生以前の事なれば更に其罪我に當らぬ、又おほかめより云ふは、
汝また身が野山の草を食ふた、これまた重犯なれば、なせに免がさうぞ、羊答へて

云ふは、我はまだ年にも足らぬ若輩で御座れば草を食むこともまだ御座ないと、
重ねておほかめ、汝は何故に雑言するぞと大きに怒つたれば、羊の云ふは、我は更
に悪口を申さぬ、只答の無いいはれを申すばかりじやと、其時おほかめ、所詮問答
は無益じや、何であらうとも儘よ、是非に己れをば我が夕飯に招すると云うた、こ
れを何ぞといふに、道理をそだてぬ悪人に對しては、善人の道理と其へりくだり
も役にたゝず、只權柄ばかりをもちやうする義じや。

以上の二書の外、なほ數種の珍本のある事は、北京駐劄英國公使サアアアチスト、
サトウ氏 Sir Ernest Satow の著『日本に於けるイエヌ會出版部』 Jesuit Mission Press in
Japan 1591-1610 と云ふ非賣品の本に詳しく出て居ます。

斯う云ふ風に、葡萄牙、西班牙の國語、又羅句語に依て多少の西洋文學が日本に傳
はりましたが、人の知る如く、徳川氏の鎖國の禁に依て、外國の宣教師は悉く海外へ
逐はれて、一時日本に這入らうとした外國文學も從て跡を絶つた。唯和蘭陀が極く
僅かの特權を授つて、徳川氏と交通して居つたもの、純文學などは少しも傳へる
ことが出来ない、唯だ出島あたりで演劇の興行があつた位の事で止つたのでせう。

蜀山の『一話一言』中に和蘭人の演劇の事が見えて居る。其曲の何たるは未だ搜索が屆きませんが、其舞臺の上に字が彫つてあるのを和蘭人にあれはとう云ふ意味ですと尋ねた處、和蘭人は答て、『藝は長く命は短し』といふ義であると云たさうです。ヒポクラテエス Hippocrates の講堂に掲げた ARS LONGA VITA BREVIS の譯でせうが、流石に蜀山の譯は巧なもの云はねばなりません。

斯の如く外國語は先づ始めに葡萄牙、西班牙、和蘭陀といふ順序を経て、多少吾邦に傳來し、多く舶來品の名に痕跡を止めたのであります。が、海外交通の禁と共に其影響する所は漸く消滅した。然るに維新前になつて、和蘭陀語の次に佛蘭西語が追入つて來た。第二帝政の盛時に當つて、那破烈翁三世の勢威其絶頂に達した際であるから、日本でも兵學、戰術等を佛蘭西に則とり、それと同時に佛蘭西の政治論、法律論、又人權説を傳唱する者も出來て、是等の研究の爲め其國語を學ぶ人も輩出したものゝ、まだ純文學を味はうと云ふ迄には全體が進歩しなかつた。其次に多く行はれたのはまづ英語でせう、而して其勢力は爾後益々盛大である。英語も初めの中は多く政治、經濟、或は憲法論、又商工業の爲に學たので、まだ其純文學を十分味ふもの

が少かつた。といふと或は反對の論者もあらうが、古い英學者たちの愛讀文學が重に論文、又舊派の小説に限られて居るのも、凡そ一般の傾向が解かります。それで最後の流行は獨逸語です。これもはじめ重に醫學、法律、經濟の方面より行はれて來て、其純文學を説くに至つたのは、つい此頃の事でありました。

日本が斯う云ふ順序を経て外國語に接し來つたのを記憶して置くのは、外國文學研究者に必要です。新時代の人々が外國文學に對して持つて居る考と、それより稍年輩の長じて、現今社會上相應の地位を占めて居る人士の外國文學否、一般に文學といふものに對する考とは、非常に反對齟齬して居る。少くとも其間に意志の疏通がありませぬ。舊派の人は眼前の必要に迫られて、明日にも何か役に立たうといふ事の爲に外國語を學んだのであります。から、文學其物を研究しやうと云ふ考はなかつた。それを近頃の青年は、見聞の便、昔日に十倍する社會に立ち例へば頻々と渡來する海外の新聞雜誌に依り、極めて豊富なる外國文學の存在を知り、どうか之を日本にも輸入し、又之と比肩するに足るものを發生させたいと云ふ熱望に驅られて、勉めて最新の書を読む。そこで先進と後進とは衝突と云ふ程でなくとも、意見の

齟齬が出来る、其事は外國文學研究者の一考すべき事實と私は考へて居ります。さて外國文學の研究法或は其方法を採る前一應の準備に就いて簡單に論じたいと思ひますが、まづ第一に文學は言語の美術である。文學を研究するには、言語に精密な注意をしなければならぬ。相應に言語を解説しなければ、幾何ほど高遠めいた議論を繰述したやうでも役に立たぬといふ事を知るのが何より必要です。是は自明の理で、故ら多言する必要が無いやうですが、近頃内外の雜誌に散見する文學の噂話で、海外文豪の月旦などをする人も少なくないのを見ては、滿更餘計な悪まれの口でもありますまい。名ばかり聞いて喋々する人々は、必竟文學の智識を有て居るのではなく、文學に關する巷談途説に稍通じたものである。それでたまさか數冊の本を通讀したにもせよ、精確に意義を解し、緻密に趣味を究めたのでなければ、まだ文學を説く資格がないのですから、後日如何なる研究法を採るにしても一應は言語に通ずることを先決問題としなければならぬ。

研究の方法は、種々の方面が有りますから、一種のみを擧げ示す事は出来ない。只初學の者は、海外文學のクラシックス Classics 即ち名著大作を始めに讀む事が肝心で

す。然らばクラシックスとは何ぞと云ふ問題になりますから、それを説きませう。全體此語は羅旬語で高級或は第一級と云ふ意味の字で、羅馬の人民中の多額納稅者を指したので、それをアウルス・ゲリウス Aulus Gellius と云ふ文學者が譬喩に用ゐて文學にもクラシックスがある、高級の品があつて、通常の文士或は文學と混同するところが出来ないといつた。それから總て文學で有名な人、或は書物をクラシックス Classics と云ふやうになりました。併ながら此語は羅馬人の標準から、割り出したので、當時の人の目から見ると、名著傑作は希臘の文學より外に無いから始めは、重に希臘文學の優れたものを指したが、間もなく羅馬の詩人歴史家等の書にも移用して、こゝに羅旬のクラシックスも出來羅馬帝國衰亡の後、所謂暗黒時代となつては、僧侶等の學ぶ所は多く前二國語の書であつたため、中世を通じて、希臘羅馬の名著傑作に此語を用ゐました。

然るに十四十五十六世紀、所謂文藝復興期に於て、歐洲の人心は空前の大活動を始め、急に長夜の夢より醒めたやうになつて、古代の文明を復活させ、又新様の思想を發揮せんとて、早速古書を讀みだした。さて研究を積んでゆくと希臘羅馬の文學に

非常な名著があるに氣が付き中世の人よりも更に深く羅句語或は希臘語を尙んだ。故に文藝復興期の人に取ても希臘羅馬文學中の名著がクラシックスであつたので、其餘風は今日まで遺つて居ます。

併しながら名著傑作を歐洲の古文にのみ限るのは甚だ謂れのない話で、此語の意味を廣く解する者も漸く現はれた。現に佛蘭西の路易十四世の朝には、文壇に二派あつて、一方は希臘羅馬の文學を近世文學の上に置き、他方は希臘羅馬の作より當代の詩歌文章が優れて居ると主張して、爭論しました。が今日の吾々から見ると、路易王朝の劇詩其他は決して希臘羅馬のそれに比して遜色が無い、或點に於ては却て優つて居るやうに思ふ位、何れも名著傑作は希臘羅馬に限つたものでなくさう思ふのは、徒に古に泥む學者の弊風でありませう。

それでは極く近世の作でも、非常に人心を刺激し感動させる美しい文學が皆所謂クラシックスかといふにさうでも無い。此語の定義はむづかしいが、簡単に且つ充分に云はうとするとまづ、下の如くです。眞のクラシックスとは、其著作を以て人類の思想を富まし、其寶庫を豊かならしめて、人類を更に一步進せしめたものである。又

前人の既に知り盡し、感盡したと思つて居る人間の心の裡に、別に新らたなる道徳上の眞理、又不朽の感情を闡明し、之を發表するには、雄大、健全、婉美の外形を以てした者である。一言以て之を掩へば「ハルモニヤ」即ち調和と云ふ特色を内容外形に具へて居る者を指すのです。文學には随分片寄つた偏狹な境地の中にて、絶妙な作もあり、鬼才などいへば、革命的と云はれる作者もあり、初學者は先づ、雅正調和、健全、雄大等の趣味より始めて、漸くに己が好む所へ移るのが、最も適當な順序でありませう。

此の名著傑作より段々研究して行つた末は、其手段として傍ら種々の方面を参照する必要が出て来る。外國の風俗人情習慣も知らなければならず、地理歴史風光等も考に入れねばならず、細かい事といふと動植物に就ても多少智識を有つ必要があらう。併し物には順序もあり、輕重もある。補助研究のうち私の特に必要として言ひたいのは、文學の姉妹なる他の美術、即ち繪畫、彫塑、建築、音樂等に對して、専門の智識でなく、唯文學研究の補助となるだけの趣味を養成する事です。姉妹藝術の關係交渉は殊に吾邦に於て等閑視せられて居る。一例を擧げて見ませば、昨日私は

上野音楽學校演奏會へ行ってグリーグ Grieg と云ふ北歐音楽家の作『オネギア』の歌』を聞きました。これは有名なるイブセン Ibsen の劇詩『エンルギント』Peer Gynt 中の殊に優れた場所、原文の意味を如何にも誠實に音楽に現はした作曲家の技倆は實に驚く可きものです。併し日本文の曲目には原詩の名も掲げてなく、全く異つた平凡の歌となつて居るので一驚を喫しました。嘗てケルビニ Cherubini の輓歌中、中世の大讃美歌『スタバット・マテル』Sabat Mater を賊軍來襲に改作した例を思へば怪むに足りませんが、何しろ欺げかほしい事です。實に造形美術などの智識なくして外國文學が味へない例は幾らもある。アポロン Apollon の車といつても大入車であるか、火の車であるか解らない。なる程日の神と字引にはあるが、どんな日の神であるか解らない。印度にも埃及にもある、併しアポロンは希臘の男神で然も非常な美男です。美男にも種々ある。細面もあらう、圓顔もあらう。是等一切の趣味は『ベルエデレ Belvedere』の『アポロン』像の寫真でも見て、之を記憶に留めれば得られる。浩瀚なる神話學の書を翻くより捷徑であります。

姉妹藝術の趣味の他に、『フォークロア』Folklore 即ち俗説の智識が必要です。まづ

有名なグリム Grimm の御伽話集を始めとし、ストラパロオラ Straparola、バンデルロ Bandello 又はペロオ Perrault などの短篇は一通り心得て居ると便利と思ふ。俗説或はお伽話に意を留めて、本當に外國人の感情になつて、文學を味はうのです。丁度『かち〜山』『桃太郎』『酒吞童子』の話を知て居て日本文學が解かるやうに『青髯子』Blue Beard や『巨人退治』Jack the Giant Killer の話が、飛でもない文學の一隅に現はれ居るので、それからそれへの智識が役に立つて來ます。又『靴を穿いた猫』Le chat botté といふ話なども面白ではありませぬか。日本の猫は足駄を穿く、紙袋を冠る。そんな事を知つて居て滑稽の趣味も起るであります。尤も今日の日本人は滑稽の趣味に乏しいやうですが、アリストフネス Aristophanes やラベレイヌ Rabelais のやうに笑倒するのも大文學である。

かく述べ來ると文學の研究には歴史も必要、言語學、美學も必要、心理學、社會學、さへは諸般の科學も一々研めなければならぬやうに聞えるが、私は精密な専門の智識を要求するのでは無く、只一通りの普通智識に通じて居ればよいと云ふのである。而して文學の研究者はこの他に一大事がある。即ち文學といふ藝術の力に由る

新らしい眞の生命を得んとする望を忘れてはなりません。然り、この新らしい眞の生命が大切である。『藝は長く命は短し』かの『無くは叶ふまじき』一大事、マルタ Martha を戒めた基督の金言を始終念頭に置きたいものであります。私は此會の永く記念を傳へむとする故人とは多少意見の相異があつた。殊に初期の議論に於て大分違つた點を有して居つたのであります。併ながら故人が晩年の議論を以て、一種の感動を青年社會の一部分に與へられた事實に鑑みれば、生死の一大事を思ひ念じて眞摯の思想に觸れられた故人は、枯淡なる評論、矮小なる研究を超越して、藝術の眞生涯に上ほられたのだと考へます。世には文學の研究者を以て自ら居りながら、内心毫も藝術の思想無きともがら多い。之とかの有益なる短生涯を送られた故人とを比して、文學研究者の一考を促して置ませう。

近世の英文學

(明治三十四年一月一日 明星)

歐米現今の最も有名なる詩人は誰であるか、或は何といふ小説が流行して居るかといふ疑問を私はよく受けます。即ち今の文學熱心の人は、しきりに泰西文壇の

近時を知りたがる。これはなるべく廣く近世の思潮を知つて、豊麗なる文字を味はふとする。我邦現時の文壇から察して、決して無理もない事である。しかしながら文學美術の如く歴史上の發達あるものを急に近世から溯つて、研究しやうといふのは、少しく順序を失つて居るかと思ふ。即ち今日の詩を解し、今日の美術を味はふとするには、どうしても其前の發達を見、前の歴史を知らなくては、いけない。是故に、いさゝか近世の小説家の名とか、詩人の名とかを聞かれます時に、自分たちの良いと思ふ詩人を勧めても、それ程に人は思はない。又餘りに有名な人を云へば、誰でも知つて居る様な工合で、甚だ返答に苦しみます。特に小説は、此頃佛蘭西が有名であるから、よく佛蘭西の小説を見たい、英譯があるなら教へてくれといふ注文が幾等もあります。私は其時いつも斯ういふのです。佛蘭西の文學は十七世紀の頃最も完全なる發達を遂げ、大家傑作も其頃に澤山ある故、佛蘭西文學を研究せんとする人は、先づ始に十七世紀の大家を味はつてから、今日の小説なり詩なりを讀むやうにするが宜いと注意し、即ちラシイヌ Racine コルネイユ Corneille ランファンテヌエ La Fontaine の如き萬世不朽なる詩人を誰にでも勧めるのです。しかしながらさうい

比較的古い文学ばかりをやつても、近世の文化に浴することも出来ませんから、先づ今日は英米近世の文学に就て、少しく述べやうと思ひます。

先づ英國から申しますと、海外文学の研究に熱心な人は、すぐにバイロン Byron といひ、或はシェリー Shelley といひ、又はキイツ Keats の名を挙げます。バイロンが十九世紀の大詩人であることは、誰も疑はない所でありますが、前世紀の中頃に至つて、大分名聲を落した。初はミルトン Milton の後に列らべ得る大家と許されましたが、今日ではさほどまでに高く思はれない。バイロンには一種の厭世觀があり、雄大な氣魄があつて、面白いには面白いが、眞の大詩人とは云へない。勿論よく近頃は再び反動が來て、以前よりは少しく稱揚される様になりましたが、何しろ古今無比の名家とはして居ないのに、日本の讀書社會では、未だにバイロンを非常に尊敬し、愛讀する人が多いやうです。これに反してシェリーは英吉利に於てはバイロンよりも大なる詩人としてゐる。又キイツに至つては、やうく、昨今に至つてわが文壇の批評に上り、其詩の評論なども、ちよい、見受けるやうです。尤も先年『文學界』といふ雑誌が、キイツ、シェリーの詩歌を論じ、或は其作に解釋を與へて、世に働いた事が

ありましたが、其時分にはさしたる反響がなかつた。私一個の考では、バイロンもえらい詩人と思ひますし、シェリーも面白い所があると思ひますが、自分の好みでいふと、キイツを第一に置きたし。キイツの『エンディミオン』Endymion は長篇で、よく人の知つて居る作であるが、『エンディミオン』よりも、寧ろ短篇の『オウダ』Ode 則ち『希臘古瓶賦』Ode on a Grecian Urn 『黃鳥賦』Ode to the Nightingale 『悲哀賦』Ode to Melancholy 等、又は『つれなきたをやめ』La Belle Dame sans merci の歌は、英文学の名壁といつても宜いと思ふ。斯の如くにして十九世紀の英文学は、始めにバイロン、シェリー、キイツの三人を出し、其外古今の大詩人ヲオズヲオス Wordsworth コウルリッジ Coleridge ランダア Landor 等の作を以て、一時非常に盛でありましたが、暫くして是等の詩人相繼いで世を謝し、一時文壇蕭條の觀がありました。時、優麗の詩風を以て、文學界を動し、終に幸福なる生涯の間、英國國民の聲と仰がれましたのは、彼のテニソン Tennyson である。

テニソン卿は日本でよく人が知られて居る。殊に其有名なる『イノック・アアデン』Enoch Arden の如きは、中學の生徒も讀んで居る様です。又文學熱心の人は、『ロックス

レイ・ホオル』Locksley Hall』を非常に愛讀して、此詩人の妙を味はつたやうに思つて居るが、簡樸なる英語を以て、眞實の哀れなる英吉利の景情を歌つた『ドナ』Donaの類をテニソンの一生の傑作と私は見て居る。其外古典に關係のある作では『ロウトス』Lothos-Eaters』『オリシムス』Odysseus』又『美女譜』Legend of Fair Women』『藝術宮』The Palace of Art』等は短篇ではないが、よく其特色を現して、優麗と云はうか、清妍と云はうか、非常に美しい言葉、美しい調に充ちて居る。又長篇では『モネド』Maud』と云ふ詩の一部分、アアサア傳説を詳しく詠んだ『アイデルス』Idylls of the King』の如きは、テニソンの畢生の大作であつて、是非一讀せねばならぬ名作である。又テニソンには辭世がある。一生の作の上に冠をかぶせて彼は世を去つたと云つても宜い位彼の『波よけ』を過ぎて『Crossing the Bar』の歌は、希臘の神話にいふ白鳥の終の歌であらう。

ロバートブラウニング Robert Browning の名も近時やゝ聞えて來たが、其作の大きう難解だといふので、まだテニソン程に讀まれませぬ。ブラウニングは優麗の點に於いても、をさ／＼テニソンに劣らないが、壯大の風調或は哲學的思想に於ては、テ

ニソンよりも遙に優つた詩人である。此人の作は信僞であり、解りにくいといふので排斥されますが、随分ブラウニングの作にも、格調の優美な所もあるし、措辭の非常に婉曲なものも、簡潔な面白い節も澤山あります。例へば『アンドレヤ・デル・サルト』Andrea del Sarto』と云ふ畫工のことを歌つた詩、或は『アント・フォン・ラヤ』Abt Vogler』といふ樂師の歌、又『故侯爵夫人』My Last Duchess』の篇などは、逆もテニソンや當時の詩人の及ばない詩であらう。ブラウニングは解りにくいと云ふので、多く讀まれません。『ブラウニング・ブリヤア』Browning Primer』といふ入門の書もあり、又『ブラウニング・サイクロペディア』Browning Cyclopaedia』といふ字引もありますから、之に據つて研究すれば、さほどむづかしい事はございませぬ。總て并クトリヤ文學を研究するには、ブラウニングとテニソンと並で研究しなければ、一代の詩風は分らない。又ブラウニングに次で世人の注意に上つた、マシュー・アノルド Matthew Arnold は論文家でもあり、教育學者でもあり、神學者でもあるといふやうな點で、散文に於ては隨分人に玩味され、其『批評論集』Essays in Criticism』は隨分人に讀まれる本である。併しながら其詩は未だ左程研究されて居ない。アノルドの詩中、『ソウラップ・アインド、ラス

タム』Sohrab and Rustum といふホメロス風の叙事詩、ゲーテ Goethe バイロン Byron を評した歌、或はハイネ Heine を悲しむ歌、或はアアサアの傳説のことを書いたトリスタン Tristan の詩など、之を看過するのは謂れなき事である。マッシュウ・アノルドの論文はうまい、うまいけれど、其論文は即ち論文なのであるから、或は亡びる事もあらう、併し其詩は即ち詩であるから、何時までも傳はるのである。

近英には又ロセッティ Rossetti 等の詩派がある。ロセッティ等の事は先年『文學界』の時分に論じたり、評をしたりしたが、渉々しい反響が無かつたのを、此頃になつて漸く文學に熱心な人々の間に傳唱され、彼の在天の美女を讀んだ詩は既に二回までも翻譯されたと記憶して居る、併ながらロセッティを味はうとするには通常の詩人を味ふよりも少し準備が要る。ロセッティは有名なるラファエル前社 Pre-Raphaelite Brotherhood の人である。これは詩人美術家が集つて出來た會で、畫はラファエル以前の方がうまい、ボティチェリ Botticelli オルカニャ Orcagna 等の方が風韻があつて、精神が籠つて居るといふ信仰から、自分達もさういふ風の繪を作るといふ精神を以て、成つた社である。だから彼等の詩を味はふには繪の事も少しは知らなくつてはなら

ぬ。ロセッティは詩を作ると同時に、繪もかいた人であつて、同じ材料をつかまへて詩にしたり、畫にもしました。例へば前に云つた在天の美女といふ詩は、有名なる傑作でありますけれども、亦同じ題目を繪に畫いたのが、非常に有名なる作品になつた。且つロセッティの詩は、こればかりでなく、其他にも『觀潮』Sea Limits 等の短篇、又『新妻の序歌』The Bride's Prelude といふ斷篇ではあるが、かなり長い詩がある。それから又一篇のソネット集即ち號けて『生命の家』The House of Life といふのは、沙翁以來の大傑作である。英文學にはちよいと二三の有名なるソネットを作つた人はありますが、ロセッティ程多く作り、完全に作つた人は殆んど無いのです。即ちロセッティは此點に於て沙翁と肩を列べると云つても不當でないと思ふ。而して前の次第であるから、此詩を研究するには、少しく繪の事も考へ、或は彼が藝術上の歸依淺からざる伊太利亞の詩人ダンテの作を熟讀したならば、發明する所が少くないであらうと思ふ。同じくラファエル前社の人で、キリヤム・モリス William Morris は後年一種の社會主義を持して、自分の主義を述べた論文なども澤山ありますが、世人は詩人とし、或は應用美術に力を盡した人として記憶して居る。モリスには『ジョイソン一代記』Life

and Death of Jason」といふ詩があり、其他種々の短篇もありませんが、最も有名なるは、『地上樂園』The Earthly Paradise」といふ、いさゝかな物語を集めた詩で、此中に希臘羅馬の話もあるし、北歐の傳説もあり、中世の物語もある。一例を申せば、かのワグネル Wagner の樂劇、又近世詩歌に散見する『タアンホイゼン』Tannhäuser の物語もあります。此詩社の人でアルシヤアノンスキンバアン Algenon Swinburne といふ現存の詩人がある。英文學中一種異彩を放つて居る詩人である。一種異彩と云ふのは、スキンバアンのやうに、聲調の多趣絶妙を恣にしたのは、古來稀なので、或人がスキンバアンをオロロンに譬へた。諸の詩人中、ミルトンは風琴の如く、テニソンは笛の如しとすれば、スキンバアンは恰もオロロンの如きもの、しかも上手が名器を弾く様な工合で、未だ曾て英文學に類ひないやうな調をスキンバアンは發明した。此人の傑作は初に出した『アタランタ、イン、カリドン』Atalanta in Calydon といふ希臘式の悲劇で、是に續いて『エレクシウス』Erechtheus 又エリサベス文學に倣つた悲劇があります。が、先づ其作を最もよく代表して居る詩集と云ふのは、彼が若い時分に作つた『ポエムズ、アンド、バラッド』Poems and Ballads だ。特にこの第一集は古今稀なる調を以て、今

まで人の云はない、云ふことを敢てしないやうな思想を歌つて居る。尤も彼はこのために一時物議を醸したが、後年に至つても、少しも氣力が衰へずに、『トリストラム、オヴ、リオネス』Tristan of Lyonesse の長篇もあるし、其他エリサベス文學の名家を歌つた『ソネット』數篇、皆研究の價値がある。併しながら此詩人を研究するのは、ロッセイを研究するよりも、尙むづかしい所がある。スキンバアンは優れた希臘學者即ち古典學者であるから、其詩の中には古典の引例が非常に多く、昔の學問をした人でなければ、迎も解らない事がある。又中世の文學に精通して居るから、中世以降の歐羅巴文學に少しく通じなければ、此詩人は味へない。又彼はこれと同時に極めて近世風の人物である。宗教并に政治に就いては、随分極端の考を持つて居る人であつて、通例の基督教には反對の態度を執り、又王政に反對して共和主義を懐いて居るのも特色である。さういふやうなわけで、スキンバアンの詩を研究するには、餘程準備をして掛らないと、本當の意味が解らないで、仕舞ふことがある。徒に字書を擁して、海外文學を味はふとりさんでも、スキンバアン、ロッセイの如き、いさゝかな典據のある詩人等は、迎も十分に解することは出来ない。異々も文學の翫賞は相當の

準備を要し、素養を積まなければなりません。無闇に文學史を讀して、能事畢れりとし、作品その物の研究を怠るのは、今日の通弊であります。戒むべき事である。

今迄述べて來た詩人は多少邦人の間に傳つて居、假令其作は讀まずとも其名位は知れて居る所が茲に一つあまり日本で評判のない詩人がある。それはエドワァド・フィッツゼラルド Edward Fitzgerald といふ人である。私の記憶して居る所では、今まで此詩人の事を云つた人はないと思ふ。雜誌新聞等には見たことがありません。併ながら今日英米でフィッツゼラルドの名は非常に有名で、其詩既に幾十版を重ねて居る。此人は既に、十八年ばかり前に亡つた人であり、生前は少しも有名でなかつたのに、八九年この方段々評判になつて來た。其詩の名は、『ルバイヤット、オヴ、オマア・カイヤム』Rubaiyat of Omar Khayyam と云ふので、此オマア・カイヤムと云ふのは紀元十二世紀の頃の、波斯の天文學者、數學家、且つ詩人ですが、此人の『ルバイヤット』は佛蘭西の學者や獨逸の學者なども譯したことがある。此詩をフィッツゼラルドが見て、自ら波斯語を習ひつゝあつたので、其翻譯をいたしました。勿論自由なる意譯であるから、オマア・カイヤムの原詩とは大いに相違して居るが、思想に至つては同じこと

である。其思想は極端なる快樂主義を含み、又厭世觀もある。例へば人間と云ふものは、何處より來り、何處へ行くのか分らない、否應なしに水の如く來り、否應なしに風の如く往く。それ故に生きて居る間に盃を擧げ、詩を詠んで、美しき人の踊るのを見て、それで心安く暮せと云ふやうな主義なのです。或は盃を擧げて飲む時にも、自分の唇の觸れる盃は美人俠骨の灰かも知れぬ。又美人のなくなつた土には美しい花が咲いたり、英雄の血を濺ぎし處に莖が匂ふと云ふやうな工合の思想もあつて、近代の懷疑思想には大に投合し、非常に歡迎された。其上、思想が斯の如く今日の人に投合したのみならず、その聲調は英文學にかつて無い美しい響を傳へて、今の文學者が非常に珍重する所である。此本は日本に餘り傳つて居なかつたから、定めし文學研究者の悦ぶ所となるだらうと思つて、私は一昨年『ビクトリアン、ライア』Victorian Lyre と題し、ロッセティ、スキンバアン、キップリング等の作と合せて、丸善から出版させました。現に英吉利では此フィッツゼラルドの詩を讀む爲に、オマア・カイヤム俱樂部といふのが建つて居る。會員は當代の知名の文士で、定の日に會して、赤い葡萄酒を飲み、赤い薔薇を襟に挿んで此詩を歌ひ、或はオマア・カイヤムの事蹟を調べ、有

名なる人の演説もあるさうです。一昨年のおマアカイヤム俱樂部會には、駐英米公使のヘイHayといふ人が甚だ面白い演説をした。何しろ是れは近世の詩を味ふ人の是非とも讀むべき本であります。

翻て散文の近時を見ますと、キングズレイ Kingsley の名が忽に浮んで來る。其作は随分あるが、先づ薄い本で云ひますと、『ギリイック・ヒーローズ』Greek Heroes。これは子供の爲に希臘の有名の話を書いた本である。子供に讀ませる目的の書ゆゑ、文章は簡易でありますから、中學生徒などに適當な讀物であらう。或は大に進んだ人でも、此本に於て少からぬ興味を感ずることがある。特に此本の中でオルフィウス Orpheus がシチリヤ Sicilia の海岸で魔女と歌の競争をするあたりは、實に篇中の白眉であらう。其外キングズレイには長い小説で、『ハイパシヤ』Hypatia、『エストワアド・ホウ』Westward Ho!、『アルトン・パン』Alton Locke など、いふのがある。其内で『ハイパシヤ』は誰にでも非常に面白い。これは希臘羅馬の古代文明と、新に興つて來た獨逸民族との衝突で、一昨年亞米利加で非常にはやつた波蘭土小説家のシエンキエヴィチ Siemkiewicz の『クオ・ヴァディス』Quo Vadis といふ本がありました。が、時代は違ふも

の、幾分か其思想が同じく、却て一段優る位の本であります。此様な本は小説として一時の樂を得るのみならず、歴史の考を得たり、或は文物の一般の考を得やうとするに適當なものであるから、誰にでも勧めます。

又近代の小説家にはステイヴンソン Stevenson がある。其名は日本にも傳つて居りますが、人は多く彼を以て冒険小説の作者として小供の讀み本を作る人だと云つて、幾分か輕蔑する氣味がある。それといふのは只翻譯を見て速断するのでありませう。併し原本を見た人は心に染みて忘れ難い快樂を覺えます。兎角日本の文界は戀愛であるとか、人情であるとか、或はむづかしい哲學思想でも書いてないと、文學でないやうに思ふ傾向があるが、それは人生の廣い觀察が無いからで、さういふ人には沙翁の戯曲でも、或はデッケンズ Dickens スコット Scott の如き小説でも決して面白くならうと思ふ。ステイヴンソンの『寶島』Treasure Island といふ小説は、海賊の金を掘りに行く話であるが、其動作の激しくして、又脚色の面白いことは、一度讀掛けたら、巻を閉づる事が出來ない位併しそれだけでは、單に新聞の續き物としての功能だけであるといはうが、そのみならず、文章の妙が非常である。彼は若い時分

から古今の文學を讀んで、一種の特別な文體を握り、今日の英文に非常な影響を及して居る。それ故に小説ばかりでなく、『童男童女に與ふ』*Virginibus puerisque* と云ふ論文集、又批評の文集もあるが、さういふ物を見ても、文章に骨を折つたことは解ります。前に云つた『寶島』の外に、『バラントロイの主』*The Master of Ballantrae* 『かどわかされ』*Kidnapped* 『破船』*The Wrecker* といふやうな面白い小説、又短篇では、『水車小屋のキル』*W. H. Miller* といふ秀麗な文字があつて、近世の英文を讀む人はどうしても見なくてはならぬ大家である。

又シモンズ *Symonds* といふ文人がある。詩人でもあり、學者でもある有名な人で、若い時から病身の爲に、アルプス *Alps* のダヴスプラッツ *Davos Platz* といふ所に引籠つて、著作に従事して居つた。此人の文體は流暢で、彩多く、熱誠の氣があつて、面白い所があります。其作には文藝復興の歴史が凡そ六巻ばかり、其他希臘の詩人を論じた本、希臘伊太利亞の紀行が二冊ばかり、エリサベス文學を論じた本が一冊、他に詩集もあり、前に云つた文藝復興史は其時代の事蹟を調べる人が先づ讀んで宜い面白い本である。歴史上の根據もなかく、正確であるし、且つ文體もごく面白く、

熱心が貫いてゐる。伊太利亞の紀行なども餘程面白い本である。之を讀んで行くと、唯紀行として利益があるのみならず、古代の美術を味ふに大なる利益を得る。又短篇ではあります。『酒と女と歌』*Wine, Woman and Song* といふ本がある。此は中世の神學生或は醫學生の歌を集めた、有名なるカルミナ *Carmina Burana* といふもので、中世の書生は笈を負うて、歐羅巴の大陸を跋渉して、或時は伊太利亞に法律を學び、或時は巴里に神學を修め、ピレニヌ *Pyrenes* 山を越えて、西班牙のサラマンカ *Salamanca* 大學に遊ぶといふやうな活潑な放縱不羈なる氣象がありました。其歌も非常に面白い。文藝復興の歴史やカルミナ *Carmina Burana* の様な、文藝史上の見通すことの出来ない事實を研究するには、シモンズの今挙げた本の如く、通俗に之を解してあるものはない。最も好い参考書であらう。

邦人のまだよく知らないワルター・ペイター *Walter Pater* といふ名家がある。私は十數年前此人の書を讀んで非常に感動し、未だ英の文壇に流行しない内から崇拜して居ます。零碎ながら私の今日まで研究し來た學藝は、殆んど此人の庇蔭と云つてよい位である。オクスフォード *Oxford* 大學の出身で、其の感化は輓近の文學界に頗る

及んで居る。此人は、文章に非常の苦心をした人で、フロオベール Flaubert の文體論を評して其主張を詳に述べた事がある。即ち其文體の一端を云つて見れば、此人の散文には詩の格調とも自ら異なる一種の格調があつて、字の組立或は句の連續等に非常に意を用ひて居る。又形容詞を面白く使つて、其文を讀むと、人が一時ひよつと驚くやうな所がある。これは昔佛蘭西のマリゾオ Marivaux といふ人が始めて發明した工夫で、之に佛蘭西語では、マリゾダアツ Mariवादage の名を與へてをります。此人の作では、『メリウス、ゼ、エビキリイヤン』 Marius the Epicurean 二冊、即ち古代文明が稍廢れて基督教の文明に移らんとする時の思潮を細かに寫した文章は勿論一種の哲學觀を含んで居て今日の人に餘程の餘響を及ぼしつゝあるのである。又其外に『翫賞論』 Appreciations 一冊、『文藝復興』 The Renaissance 一卷等がある。私は此本を見て始めて、ベイターのある事を知り、大に文藝復興に就いて興味を有つやうになりましたから、これはどうしても人に勧める本です。

カアディナル・ニウマン Cardinal Newman の名も亦近英に噴々たるものです。これもオクスフォードの人で、有名なるオクスフォード運動の熱心なる主張者であつて、英吉

利の宗教界を動した人である。漸々羅馬に傾いて舊教に投じ、カアディナルの位を授つたのであるが、其主張に就いては随分議論があり、反對贊成の聲が中々やかましいことであるが、文學の方からいへば、其思想は兎に角、散文の醇美なることには感心せずに居られない。ニウマンの文體は英文の最も完全なるものです。非クトリヤの散文家中には名家が非常に多く、シモンズ、ベイター、スキンバンの如き、又はニウマンの敵であつたキングスレイの如き、皆特得の長所はあるが、至醇なる散文といふ點からはニウマンに優る者はない。一個人としてはベイターを崇拜しますが、英文の模範としては、ニウマンを最も勧めます。ニウマンの文集は浩濶なるものであるが、どれを讀んでも其特性が現れて居て、捨て難い名文である。

斯の如く擧げて來ましたのは、先づ亡くなつた人、或は今生きて居つても、殆んど一生の事業をして仕舞つた人に就ての論であります。今の生きて居る詩人小説家はどうか、それを就いて少しく述べませう。今生きて居る人に於ては、キング Kinging を以て最も有名としてある。キングは人も知る如く、印度の孟買の生れて、幼年の頃こそ英吉利に參つて教育を受けたもの、後印度の新聞事業

に従事し、逆も本國に留つてゐる英人には分らない思想を味ひ、解し難き一種の文明に觸れてゐますから、その作には嶄新の趣があつて、一世を聳動しました。キップリングが始めて名を得たのは、『ブレイン、テイルズ、フロム、ゼ、ヒルズ』Plain Tales from the Hillsで、印度の新聞に出まして、後に一冊の本となつて、英吉利の文界に現はれた時、東洋にも斯ういふ大文學者があるかと云つて、大層名前が高くなつた。それからキップリングは英兵の歌を作つた。又ギクトリヤ金剛石祝典の時に作つた英國民を戒める歌は非常の喝采を博した。斯の如くキップリングは詩人として歓迎されて居ますが、私の考では、キップリングは詩よりも小説がうまい。詩には随分うまい所もあるが、其代り非常に拙いところがある。然るに小説に至つては、細に研究して見ると、文といひ、思想といひ、共に後世に遺るやうな物であらうと思ふ。例へば『消えし光』The Light that Failedといふ小説や、『一日の仕事』The Day's Workといふやうな短篇を集めた物などは、一遍讀んだ人が、いつ迄も記憶して居るやうな譯で、大に感動を與へる。又キップリングは『ジャングルブック』Jungle Bookといふのを作つた。これが二篇あります。印度の動物の事を書いて、其動物に銘々口をさかせた本です。これはキップリン

グが甚だ新しい事をやつたやうであります。能く考へて見ると、此書の如きは昔からある或一種の文學なので、キップリングはアイソポス Aisopos の後を受けたと云つても宜しい。アイソポスのみならず、印度に『パンチャタントラ』Panchatantra 又支那の『法苑珠林』の中にある話とか、又中世の比喻談、佛蘭西でマリイド、フランス Marie de France ランティエヌ La Fontaine フロリヤン Florian 其他英國にグイ Gay 獨逸では Lessing さういふ人の傳統を受けた禽獸譬喩談である。でキップリングの特色として褒むべき所は、其本の中の動物が、動物らしい話をするといふことです。古來比喻談には、狼も出るし、象も出る、狐も出る、併し狼の口をさく時には、殘忍なる人間のさくのと同じく、狐が口をさく時には、狡猾なる人間の如く、決して獸類といふ特性が現はれて居ない。それをキップリングが、人間ならぬ獸類の特性を現すやうに書いたのは、非常の功蹟と云つても宜しいのである。又キップリングの『一日の仕事』といふ本は種々の短篇を集めた本であります。これは今の禽獸譬喩談よりも一歩進んで居る。それは近世の文明が作つたいろくの機械の話で、例へば汽船機關車が口をさくやうに出來て居る。即ち、『〇〇七』007といふ番號の機關車が鐵道の

倉庫の中で朋輩の機關車たちの話をき、其後汽車の衝突のあつた時に駈附けてふだんから威張つて居る大きな機關車が倒れた所を見るといふ次第を人間のやうに詳しく書いてしかも人界と一種變つた別世界に遊ぶやうな所がある。これがキップリングの今日非常に持囃される所以であらう。それで唯キップリングの詩を讀んで、其散文を讀まない人は、眞に其價値を知ることが出来ない。故に其詩を讀む人は必ず小説をも研究するやうにありたいと思ふ。キップリングは未だ三十幾つといふ若い人ですから、此先どういふ事をするかも知分らないが、兎に角十九世紀末または二十世紀劈頭の大立者たることは失はぬ。

又キップリングよりもすつと前の人であります。未だ生きて居るジョージ・メリディン George Meredith は非常に深遠なる人生觀を有つて居つて、其作品は能く人情を穿ち、大きく云へば人生の問題に觸れて、大變に面白い本であります。但し此人の損な所は詩歌に於けるブラウニングと同じく文體が佻儻で一寸讀み悪い事です。その爲に一般の讀者には餘り顧みられませんが、必ず後世の批評は此人を大變に褒めるであらうと思ふ。此人の傑作は『ダイヤナ、オヴ、ゼ、クロスウェイズ』 Diana of the Crossways

又『ロオド、オオモント、アンド、ヒズ、アミンタ』 Lord Ormont and His Aminta といふ小説であります。この人は喜劇に就いて短篇の評論を作つて、モリエールを非常に稱揚した事もある。又メリディンと並んで、トマス・ハーディ Thomas Hardy といふ人がある。此人は餘程厭世の思想があつて、書くことが非常に深刻である。近世の文明を批評して其骨髓に徹するやうな所がある。『テス、オヴ、ゼ、ダヴァアギルス』 Tess of the D'Urbervilles といふ小説を書いて、非常に名を博したが、女性墮落の歴史を細かに書いた爲に、文界の物議を招いた位で、何しろ近世の大小説家である。其他第二流に至つては、パリー・パリエ といふ新進作家もあり、コナン・ドイル Conan Doyle といふ文士があつて、二流と雖も、なかく面白く、讀者に悦ばれる事は、メリディンよりも優つて居る。

さて英吉利の文學は此位にして置きまして、亞米利加は此頃どうであるかといふに、米國は近頃まで俗な國であつた。物質的文明にのみ走つて居るといふが、成程二三十年前までは實に其通りであつた。併し亞米利加の西部もだんく開拓されて、物質上文明が最早十分になつたものであるから、人民が大分精神上文明を望んで來た。爲に文學學藝も此頃はめつさり進歩して來た。亞米利加の大學などは、

英吉利及び獨逸或は佛蘭西あたりの良い所を探つて、一種の學風を作り、益々學問を研究して行くといふやうな風である。其他美術の如きは、多くは佛蘭西へ遊學して、ゼローム Gerôme であるとか、又バステイアン、ルバアジ Bastian Lepage や何かの學風を學んで、國へ歸つて立派な作を書いた人が幾らもある。それから建築の如きは最も進歩した。ポストン圖書館の壁畫等は佛蘭西の大家のピニス・ド・シャヴンヌ Puvion de Chavannes 流の畫で、其寫を私は見ましたが、非常に結構なものです。文學も従つて或はそれよりも先へ幾分か進んでゐるかも知れない。亞米利加は一概にアングロサクソンとは云ひますけれども、佛蘭西人の残りや獨逸人の移住民が澤山あつて、英吉利とは自ら風を異にし、其爲に亞米利加の文學は文體が少しく變つて居ます。早く申せば英吉利より輕快である。それで亞米利加といふ一種の固まつた風は未だ文學の上には現はれて居りませんが、歐羅巴の文明の良い所を吸収しやうといふ所の氣風が盛んである爲に、一種變つた所がある。例へばヘンリー・ジェイムズ Henry James の如きもので、ヘンリー・ジェイムズは今生きて居る人であるが、彼はモオ・バッサンあたりを研究して、短篇小説を作るに妙を得て居る。此の人はごく人情

の妙なる所、微なる所を穿つて、輕率に其文を讀んでは、妙味が分らない位の名文家です。いろ／＼作がおりますが、例へば『大家の教』The Lesson of the Master といふ稍々長い短篇がある。文學者は妻を娶つて宜いか悪いかといふ問題であつてなかに面白い所がある。その中にセント・ジョージ Saint George といふ大家は、初は實にうまい小説を作つて居りましたが、近年に至つて、まづくなつたといふ評判すると茲に一人の青年文士が此人に教を乞はうとして、いろ／＼尋ねますと、頻りに文士といふものは無妻でなくてはならぬといふ論を主張する。その辯自分は非常に美しい妻を持つて居る。併し文士といふ者はどこまでも美術に身を抛たなくてはならぬ、人間としては良い子供を持つとか、或は其子供を教育して、國家の爲に盡すのは、悪い事ではなく、是非やるべき事ではあるけれども、文學上より考へれば、決して妻を持つてはならぬと論じた。そこで青年文士が非常に感心して、自分も其主義を實行しやう、自分の思つて居た女があるのですが、思ひ切つて文學に従事しやうと決心した。さうしますと間もなく此セント・ジョージの妻が没した。それを慰めやうと思つて居ましたが、青年文士は著作に忙しくつて、半年ばかり経つて、訪ねて行くと、今度又

セント・ジ・オジが結婚するといふことだ。そこでよく尋ねると其結婚する人は前に自分の思つて居た女であつた。そこで一時は非常に怒つて怨みました。が、セント・ジ・オジに會つて見ると、向では何氣ないやうな顔をして、君はまだ若いから文學に盡し給へと勧めたといふ。どつちが善いか悪いか分らないやうな微妙な所を書いて非常に面白い。此ヘンリー・ジェイムスは亞米利加ばかりではなく、英佛あたりまで名が響いて居る人である。それから又亞米利加にはマアクト・エイン Mark Twain 即ちクレメンヌ Clemens と云ふのが本名ですが、有名なる滑稽の作者がある。これは歐羅巴でも非常に有名な人で、獨り亞米利加のみならず、英佛は勿論、獨逸、露西亞あたりまでも名が響いて居る。此人のことは大分人が知つて居るやうですから、詳しく云ひませんが、此人の本で『インノセンツ・アプロオズ』 Innocents Abroad と云ふのは非常に面白い。又『アアサア王の宮廷』 The Court of King Arthur と云ふのがあります。これも餘程面白い本です。それから餘り日本ではかれこれ云はないが、近年死だかアティス Curtis と云ふ人がある。最も有名なのは、『ブルウ・アンド・アイ』 Prue and I である。非常に文章は佳いし、思想もよほど面白く、近世英文には並びない様な一種の

味がある。又アイク・マアエル Ik. Marvel と云ふ人がある。これは文章上の名であつて本名をドナルド・グラント・ミチヤン Donald Grant Mitchell と云ふので、確か今エイル Yale 大學の評議員であるが、此人に會つた人に聞きますと、近づき易い、さういふ人である。さうでありませう。此アイク・マアエルの作を見ても、其人間の好いと云ふことが分る位。其傑作は『獨身の物思ひ』 Reveries of a Bachelor 又『夢見草』 Dream Life と云ふ。共に文章の妙と且つ人情の細かい所を寫してかゆい所に手の届くやうなのを以て、今亞米利加では、この人の本が大へんに愛讀されて居ます。又ごく近頃シイトン・タムソン Seton Thompson と云ふ人は、キップリングの如く、動物の話を書くに妙を得て居る人です。此人の熊の話などは現に非常に行はれて居ります。抑も亞米利加は常に讀者の數が多いから、本を出して一つあたると非常に澤山の部數が出る。それ故に英米の大家は其作が當る爲に、非常に儲かり、毎年一つ位づゝ有名な本といふものがある。前に云つた所のタムソンの熊の話などは去年中當つた本です。尤も去年の暮になつて、女流作家で『トウ・ハヴ・ア・ノド、ホウルド』といふ歴史小説を書いた人があつて、それから常に當つた。其作者はミス・ジョンソンといふ人です。又先年英吉利の

書家で『ポンチ』Punch 新聞に始終書いて居た人で、ドモリエ Du Maurier といふ人が、『トリルビー』Tribby といふ小説を作つて、非常に當つたこともある。斯の如く讀者が多く文學といふものは、一種の職業としても、うまく行けば、非常に利益があると爲に、くだらなく讀む人もありませうが、何しろ文學が隆盛だといふことは、米人が精神的文明の方へ向つて非常に注意して來たといふ證據なんです。唯惜しいかな、亞米利加にはまだこれといふ大詩人が此頃ありません。ロングフェロウ Longfellow、ホイッティア Whittier の後に暫く詩人が無くつて遺憾である。併し日本の人が亞米利加の文學と云つて一概に輕蔑するのは間違つて居る。例へば少しく話が戻ります。が、エドガア、ポウ Edgar Poe の如き人は亞米利加人にして、歐洲の文學に非常な影響を與へたではありませんか。ポウはごく僅の詩と數十篇のこわい小説を書いた人です。併し一種の天才が有つて、例へば音樂の方で云へば、シヤパン Chopin に比較が出来る人である。實に天才と云はうか、鬼才と云はうか、ポウほど又有名な大家に翻譯されたものは無い。佛蘭西には有名なポドレニエル Baudelaire の譯、又彼が詩は佛蘭

西の近世で有名なるステファンヌ・マラルメ Stephane Mallarmé といふ、一種の社會で非常に持囃される天才に譯されました。英吉利のスキンバンの作にも幾分かはポウの影響がある。それから『恐ろしき夜の市』The City of Dreadful Night といふ詩を作つた英吉利の評人タムソン Thomson の作にも影響があります。ポウの影響を詳しく尋ねれば、なほ意外の點にまで及ぶかも知れぬ。兎に角亞米利加文學の大立者です。

斯の如く近世英米の文學の觀察は先づ終りましたが、始に申しました通り、近世の文學は何れも昔からの歴史を受け傳統をついで發達して來て居るのであるから、輕卒に讀んでも更に解らない。例へば近頃白耳義あたりは文學が興つて、白耳義の沙翁と云はれるマアテルリンク Maeterlinck や、詩人のエルハ、アレン Verhaeren、オデンバハ Rodenbach 等の詩は誠に面白い。併しこれらの人の詩を味ふには、中世の基督教思想が非常に必要である。一寸してさういふ風ですから、況して昔からの發達を受けて、段々進歩してきた文學は、逆も昔の事を研究しなければ解らない。又文學の研究と申しても、唯矢鱈に本を讀むのが研究ではない。英文學に就て論じて

も、バイロンがうまいとか、シェリーが上手であるとかいふ事だけならば、俱樂部か何かで煙草をのみながら論ずる話で、今日英文學の研究に沙翁あたりから始めるのは、もう廢れた。少くともチオサア Chaucer からです。即ちミッドル・イングリッシュ Middle English アングロ・サクソン Anglo-Saxon 文學からです。ビウルフ Beowulf とか、或はキョチュルフ Cynewulf とか、どういふ詩人を研究して參るのが通例である。オクスフォード Oxford でも、ケンブリッジ Cambridge でも、エール Yale でも、ハーヴァード Harvard でも、皆此法を以て古代から研究して居る。それで英吉利ではスキイト Skeat 亞米利加ではラウンズベリ Lounsbury 大陸では佛蘭西のジヌスラン Jusserand 和蘭では今はなくなつたがテンブリック Ten Brink それから獨逸ではギルカア Wilcker ツピツ Tzupitza 斯ういふ人々は皆アングロ・サクソンの詩又チオサアの研究をした人です。であるから新聞などの評判ばかりでなく、歴史的に古代の文書を讀んで、深く研究しなければ、到底土臺のある學問は出來ない。近頃いろく英吉利獨逸の詩を評釋したりするのが流行であります。が、あゝいふ事は、海外の文學を紹介するのに至極便利な事ではあるが、あれも餘程確にやらぬと、切角の骨折り或は意外の弊

を來すやうな事になるかも知れぬと、ひそかに掛念して居ります。末に臨んで今日の研究法は唯本を讀んで大體に通ずる新聞記者風の事業でなくつて、心を籠めて學者が勉強する専門の業であるといふことを繰返して、この魚枝大葉なる略述を終ります。

佛蘭西近代の詩歌

(明治三十六年一月一日「明星」)

佛蘭西文學は英文學獨逸文學の如く吾邦に於て十分に研究されて居ない。殊に其詩歌に至ては詩人或は作品に就いて精密な智識を缺いて居るやうであるが、畢竟するに此明快にして暢達の趣ある言語を學んだ人が此國に數多く無いので、英詩獨文を吟咏朗讀して聲調の美を味ふやうな域に進で居ないからであらう。それで會々佛蘭西文學を唱へる者が在ても最近のゾラ Zola ドデ Daudet モオパッサン Maupassant 或はユウゴオ Hugo 等の英譯等に由て此豊富なる文學の極めて狭い一方面を窺ふに過ぎない。現にユウゴオの如きは、小説家といはうよりは寧ろ詩人と云ふ可さの『レ・ミゼラブル』Les Misérables 『ノートル・ダム』Notre Dame de Paris

等の小説は或はさほど後世に激稱されないかも知れないが、幾多の豊麗多彩なる詩賦『コンタンブラシオン』Contemplations 集中の秀逸は情熱溢るゝが如く、思想雄健にして聲調の美古今に類無く、實に佛蘭西語の氓びざる限り人の吟咏に上ほるものであるにも拘らず、其譯をだに通讀した人の少ないのは遺憾の極である。されば茲に佛蘭西近代の詩人數家を採て簡短ながら其作品を紹介し原文に就き或は譯述を通して其研究を試みやうとする人々の参考に供へる。

一 シニエ ANDRÉ CHÉNIER

十八世紀は全歐を通じて詩の衰へた時代である。即ち希臘十三世紀、文藝復興期の民又は十九世紀に生れた吾々の趣味に合ふやうな詩が衰へたので、當年の詩文にも自ら一種の味はある。例を英文學に採て云はうなら、ポップ Pope 一流の作にも警句あり、機智あり、明快なる典雅なるそれ〴〵の特色は充分具つて居るもの、『自然』の有する如き壯大も情熱も無く、一言に評し盡せば、思想にも聲調にも人間至情の音が明かに響いて居ない。それで佛蘭西文學にては詩歌の衰頹したること、他の諸國よりも甚しく、十七世紀大家の聲を飲めてより百年の間是といふ抒情の歌

を聞かなかつた位、當時の詩人はマルモンテル Marmontel、ブルテエル Voltaire の批評を標準として、ボワロオの詩學に盲從して淺薄な純理説を奉じたり、漠然と新奇な詩材を求めたりして、一人として、天才の詩らしい作を出した者が無かつた。これ偏に當年の識者が哲理に關し人類に對して偏狹な態度を執て居たからでもあるが、一つには先に述べたボワロオ Boileau の法則を墨守したせいである。其弊は明かに韻律の表に顯はれて居る。テオドル・ド・バンギエ Théodor de Banville の著『佛蘭西詩歌小論』に此事を語ていふには、『昔の詩は一行の中程に句切を置く外に、毎行の終にて句の意味が完結しなければいかぬ』とした。かくて各行は煎餅のやうに類似したのである。其結果たる必らずや、精神に乏しく、節奏を缺き殊に押韻の貧しきを感じるに至つた。愚にもつかぬ彩の無い、同一の模型に嵌つた句が出来て、乾燥無味な器械的散文的の歌となる。かゝる卑むべき羈絆を脱して佛蘭西詩歌の今日あるを致したのは、神の如き人、希臘の兒である』と述べた。これが即ちアンドレ・エ・シニエである。

此詩人は後の情熱派の祖ともいふが、寧ろロンサル Ronsard の後裔、典雅派の末

孫といふのが適當だ、千七百六十二年コンスタンティノポリス Constantinopolis の歐人居留地ガラタ Galata に生れ、父は土耳其駐在の佛國領事、母は才色共に優れた希臘婦人である。巴里に教育を受けて、父の業を継ぎ外交社會に投じて公使官書記生となり倫敦に三年ばかり駐在し、期滿ちて本國に歸るや否や宛かも革命の騷亂に會し始は熱心なる革命論者として人類自由の略に謳歌したが、ロオラン夫人のいへる如く、自由の名によりて、殘忍なる罪惡の遂行せらるゝを嫌惡して、ロベスピエール Robespierre の率ゐたジャコバン Jacobin 黨に激しく反抗した。森鷗外氏の『女丈夫』にもある如く、シャルロット・コルデエ Charlotte Corday の刑場に曳かれる時群集の中に雜て感歎したのであらう、其愛國心と獻身の美德を稱へて、一篇の頌歌を作つたのが奇禍を買つて千七百九十四年一月六日獄に下り、同年七月廿五日ギロティン・Guillotine の露と消えた。殘念なるかな、踰て二日ロベスピエールは權を失たのである。もう少しして此詩人の命は助かつたらうに。

シニエは斯の如く十八世紀の末年に歿したが、全集の世に始めて公にされたのは千八百十九年で、詩風大に同代の人と趣を異にして居るから、十九世紀詩人の始

に列してもよい。佛蘭西の詩に新しい音楽を入れた所から云へば英のコールリッジ Coleridge のやうで、古代希臘の美術思想を鼓吹した邊はまるでキイツ Keats のやうであるが、勿論キイツの如き婉美な幽麗な趣はまだ顯はれて居ない、他の藝術に例を求むればダヴィッド David の繪畫のやうに古代の典雅を學んでまだ冷たすぎる堅すぎる憾がある。僧都バルテレミイ Barthélemy の『アナカルシス巡遊記』Jeune Anaccharsis と同じ風を傳へたものだ。ロンサルを去ること二百五十年南歐の血を享け、清秀の地を慕ひ、自から云へる如く『新しき心に舊るき調を被せて』『羅甸の戀歌』歴山府朝の詩文に、清新の詩趣を覓めたのである。香の烟のやうな麗しい短生涯に牧歌 Idylles 九十一篇、輓歌 Elegies 九十六篇、其他頌歌數篇及び斷篇を物し、白鳥の歌ふが如くにして逝去した。ラマルテ、イヌは此詩人の獄中の作『わかき囚こゝろはたのとめ』Une jeune Prisonnière を評して、『ひとやの隙間洩りしいと妙なる調』といつたが、ホメエロスの事を歌つた『盲人』L'Avengle と並んで其傑作であらう。

シニエ全集は Beeg de Fouquieres, Paris, 1888, Charpentier が最も宜く評論はセント・アンツァン Sainte Beuve の『月曜漫話』Causeries du lundi を参考すべし。

孫といふのが適當だ、千七百六十二年コンスタンティノポリス Constantinopolis の歐人居留地ガラタ Galata に生れ、父は土耳其駐在の佛國領事、母は才色共に優れた希臘婦人である。巴里に教育を受けて、父の業を継ぎ外交社會に投じて公使官書記生となり倫敦に三年ばかり駐在し、期満ちて本國に歸るや否や宛かも革命の騷亂に會し始は熱心なる革命論者として人類自由の曙に謳歌したが、ロオラン夫人のいへる如く、自由の名によりて、殘忍なる罪惡の遂行せらるゝを嫌惡して、ロベスピエール Robespierre の率ゐたジロコバン Jacobin 黨に激しく反抗した。森鷗外氏の『女丈夫』にもある如く、シャルロット・コルデエ Charlotte Corday の刑場に曳かれる時群集の中に雜て感歎したのであらう、其愛國心と獻身の美德を稱へて、一篇の頌歌を作つたのが奇禍を買つて千七百九十四年一月六日獄に下り、同年七月廿五日ギロティンヌ Guillotine の露と消えた。殘念なるかな、踰て二日ロベスピエールは權を失たのである。もう少しで此詩人の命は助かつたらうに。

シニエは斯の如く十八世紀の末年に歿したが、全集の世に始めて公にされたのは千八百十九年で、詩風大に同代の人と趣を異にして居るから、十九世紀詩人の始

に列してもよい。佛蘭西の詩に新しい音楽を入れた所から云へば英のコウルリッジ Coleridge のやうで、古代希臘の美術思想を鼓吹した邊はまるでキイツ Keats のやうであるが、勿論キイツの如き婉美な幽麗な趣はまだ顯はれて居ない、他の藝術に例を求むればダヴィッド David の繪畫のやうに古代の典雅を學んでまだ冷たすぎる堅すぎる憾がある。僧都バルテレミイ Barthélemy の『アナカルシス巡遊記』Jeune Anaccharsis と同じ風を傳へたものだ。ロンサルを去ること二百五十年南歐の血を享け、清秀の地を慕ひ、自から云へる如く『新しき心に舊るき調を被せて』羅甸の戀歌歴山府朝の詩文に、清新の詩趣を覓めたのである。香の烟のやうな麗しい短生涯に牧歌 Idylles 九十一篇、挽歌 Épiques 九十六篇、其他頌歌數篇及び斷篇を物し、白鳥の歌ふが如くにして逝去した。ラマルティエヌは此詩人の獄中の作『わかき囚マカニのとめ』La jeune Prisonnière を評して、『ひとやの隙間洩りしいと妙なる調』といつたが、ホメエロスの事を歌つた『盲人』L'aveugle と並んで其傑作であらう。

（シニエ全集は Beeg de Fouquieres, Paris, 1888, Charpentier が最も宜く、評論はセント・パンツァン Sainte Beuve の『月曜漫話』Causeries du lundi を参考すべし。）

II ピエール・ジャン・ランシエ PIERRE JEAN BÉRANGER

ペランシエは前の詩人とは全く風を異にして、平民の詩人である。千七百八十年の生れで幼年の頃は裁縫師の祖父に養育され、長ずるに及で叔母なる人と共に佛蘭西の北部ペロンヌ Peronne の市に移り住み、處の印刷所に奉公して居る間、獨學で綴字文法を覺えたのは丁度フランクリン Franklin 見たやうだ。千八百九年詩人アルノオ Arnaut に知られて、巴里大學の事務員と成てから餘暇を利用して詩を作り、千八百十五年「教訓及び其他の歌」Chansons morales et autres といふ集を出した。歌とはシャンソン Chanson の事で、平易な語を用ゐて、哀樂諷刺滑稽さまざまの情緒を述べ、重に曲譜を附して、歌ふ詩である。佛蘭西では昔よりこの類の詩が流行したので、ゲテ Goethe の詩にも引いてある『マルブルク』Malbrouck の歌『ミロントン、ミロントン、ミロンテエヌ』Miron-ton, miron-ton, miron-taine と雖、節も其一種だ。ペランシエは千八百二十一年に第二の集を出したが、今度のは重に政治の歌で、國王政府の忌諱に觸れ禁錮三ヶ月罰金五百法に處せられた。而も懲りずに獄中で第三集を草し、千八百三十五年に上梓した。第四集は同二十八年に出し、これも宮廷の怒を招いて禁錮

九ヶ月罰金一萬法、これでも益々鋭鋒を收めず、千八百三十三年第五集を出版したのである。併し之を最後として、全く退隱して、國會へ出ず、翰林院へも入らず、千八百五十七年に歿した時は國葬を以て葬儀を営まれ、巴里市民の大衆に送られたといふ『シャンソン』作者の父といはれ、鳥獸譬喩譚に於けるランシエと同じやうに見られて居るが、實の處、一時溢美の譽を得たので、近時は評壇に反動の聲を聞くに至つた。高雅な趣味あるに非らず、深遠な思想も無く、また質樸な眞摯の情も少しく怪まれる。唯、當年巴里市民の聲となつて、凡衆の思想を代表し、疊句を巧に驅使した技巧があつたので、非常の盛名を博した。ルナンの如きは此作家の宗教觀が極めて淺薄なのを憤て痛論して居る。併し平俗の裡、輕妙の長處があり、又涙を促がす魔力がある。今に崇拜家を絶たない。其作は諸國の語に翻譯せられて、他の藝術に迄餘波を及ぼし、傑作『イットオ』王 Le Roi d'Yvetot の如きは管絃樂になつて居る。これはイットオといふノルマンディ Normandie の一都會の王を歌つたやうにして、眠れる如き當時の王政を諷刺した歌である。うつら〜と半日を臥床に暮らす王様で、呑氣に氣樂に飽食し、國も擴げず、軍もせず、やあとこせ、やあとこせ、何と立派な王様ぞ。

これわらうのさといふやうな歌だ英語を讀む人はサッカレイ Thackeray の『ハランド』集に旨い譯があるから就て趣味ななるもよからう。
ペランジエの『シマンソン』は三別である。

- 一 政治又軍事の歌 『舊るる旗』 Le vieux Drapeau 『五月五日』 Le Cinq mai 『老軍曹』 Le vieux Sergent 『トウヤク王』 Le Roi d'Yvetot 等
- 二 思想の歌 『平民の神』 Le Dieu des bonnes Gens 『老媪』 Le bonne vieille 『吾心』 Mon Ame 『蝴蝶』 Les Hirondelles 等
- 三 社會の歌 『乞丐』 Les Gueux 『老いたる浮浪人』 Le vieux vagabond 『シマンソン』 Jacques 等

第一の部に屬すべく『人民の記憶』 Les Souvenirs des Peuple としふ歌は大那翁の事蹟を老婆が話すやうにしてあるので此人獨得の妙を味はれる。『イヅトオ王』と並で名作だ。

(ペランジエ全集は Perroin, Paris, 1847 版で曲譜附全二巻である。批評にはルナン Renan 及びセントブサツ Sainte Beuve の文をよらう。)

三 ラマルティエヌ LAMARTINE

ラマルティエヌは佛蘭西抒情詩人の主である。之をペランジエと日を同うして語るのは殆ど神聖を瀆がすやうな心地がする。抑も十八世紀末年より十九世紀の初年に至る迄の間佛蘭西の壯丁は歐洲中原の野に轉戦して充分に他國の民情文化に接觸した。又國難を避けて英獨に走つた者も千八百十五年の後には、移住して居た諸國の文化を齎らして歸國したのであるから、文藝に於ける世界主義は蔚然として勃興したのである。既にド・スタエムル De Staël 夫人の作に此聲は顯はれて居るが、沙翁を始とし伊太利亞のアルフィエリ Alfieri マンゾーニ Manzoni 獨逸のシルレル Schiller ゲーテ Goethe ビルゲル Bürger ノヴリス Novalis ホンマン Hoffmann 等の詩人より哲學者カント、フヒテ、シリング、或は蘇格蘭のトマス・レイド Thomas Reid デーガルド・ステュアート Dugald Stewart 迄も佛蘭西の藝苑に歡迎された。それで此世界主義といふのは、國民文學の特性を没却して、無味淡泊な折衷を試みたのでなく、どこまでも各國の特性を咀嚼して、以前の國民文學に清新の氣を入れやうとしたのである。ラマルティエヌが『冥想』の歌を著したのは宛も此時である。彼はブルゴオギエ

Bourgogne 名族の裔で千七百九十年マアコン Mâcon に生れた。父は路易十六世に仕へた熱心な王黨で革命の時『恐怖時代』に刑せられむとしたが、幸にも、ロベスピエール失權に由て死を免れ、故園に歸臥した。ラマルタイヌの詩に所謂ミリュイ Mily とは此莊園である。詩人が此美しい村莊に育て、閑靜な田園の風景を味ひ、自然の清興を感じたのは後年の詩に著るしく見える。ルソオ Rousseau や シトオンブリヤン Chateaubriand と同じく獨學であつた。常に山野の逍遙を好んで一卷の書を携へ林間隴畝を歩いて、友とするは愛犬のみ。時々馬上でブルゴオギの森林を何處ともなく彷徨したといふ。後老僧アムデモン Abbé Dumont に就て羅甸を學び、數卷の詩文を繕き、それを熱心に繰返して、殆ど誦じた。其愛讀といふのは『聖書』中の田園の叙景、ベルナルダン・ド・サン・ピエール Bernardin de St. Pierre シトオンブリヤン Chateaubriand ルソオ Rousseau、プラトオン Platon タンオ Tasso バイロン Byron 等で、殊に詩人の想を動したのは『ポオル、非ルジュニイ』 Paul et Virginie の美しい物語の作者と、かの多恨なる『アタラ』 Atala、『レネ』 René の著者とであつた。

千八百十九年始めて詩集を公にした。『冥想』 Méditations である。宛もシニエの

が出た年で騒壇の争て喧傳する所となり、路易十八世の殊遇を受けて、フィレンゼ駐在佛蘭西代理公使となり、嶺南の樂園に止まること五年、ダントの故里に千八百二十三年『後の冥想』 Nouvelles Méditations を著はし、『ソオクラテヌの死』 La Mort de Socrate も同年の作だ。同二十五年バイロンがミソロンギイ Missolonghi で歿した時『チャイルド、ハロルド』の後を續けて『ハロルド終の歌』 Le Dernier Chant du Pèlerinage de Child Harold を作り、『樂調』 Harmonies を三十年に著はした。その時翰林院の座を占めたが『七月革命』の破裂に際し、永年の心願であつた東洋觀光の途に上ほり、シリヤ、パレスチナを旅行して三十二年に歸國し、議員に選ばれて政界に投じた。併し尙續々と名作は出たのである。三十六年に『ジャスラン』 Jocelyn 三十八年に『天使没落』 La Chute d'un Ange 三十九年に『歌集』 Recueils poétiques 散文で三十五年の『東邦觀光錄』 Voyage en Orient 四十七年の『ミロンドン史』 Histoire des Girondins がある。而して小説に五十二年の『ガラシエラ』 Gaziella 又閱歷を其儘寫したやうな四十九年五十一年の『語草』 Confidences 『新語草』 Nouvelles Confidences もある。『はじめの恨』といふ抒情詩の如きは、纏綿の情緒頗る誦するに足るので、讀詩者流の誦する歌

だ雑著はまだ多くある。

千八百四十八年路易必利弗王歿落の時、此詩人は假政府の頭となつて、二月二十五日暴民の襲撃を獨にて、及も持たず、偏に雄辯の力にて數時間支へたといふ、銃槍利劍を胸に擬せられて、神色自若、滔々たる雄論卓説を述べたのは、古今に珍らしい事跡ではないか、詩人にして政治に成功したものは甚だ多數でない、千八百五十二年、那破翁三世が有名なクウデターを施いた時、政界を退いて、前述の自傳めいた小説を著したのは、全く國事に奔走して家道とみに衰へたのを恢復しやうとしたのである、かくて千八百六十九年三月一日巴里に歿し、遺骸は故里マアエソンの莊に近きサン・ポアン St. Point に葬つた。

ラマルティイヌは天成の抒情詩人で自然の美、戀愛の情また死の幽玄を歌て、高雅の調を恣にした、思想極めて深遠と云ふのでも無く、聲調の妙とても、複雑の韻律を驅使した結果でも無いが、題材技巧兩つながら適應して、天真の至情は鳥の歌ふ如く發して居る、方今の批評家で警句に富だジュール・ルメトル Jules Lemaitre が彼を評して、ラマルティイヌは詩人以上である、詩の醇なるものみづからであるとは皆人の

の知言とする處だ、然ゆるが如き情熱に動いて、風聲水色みな自己の悲愁をわかち傳へるやうに考へる青春の徒には此詩人の作ほど面白いものはない、其傑作は勿論『冥想』と『樂調』との集であるが、就中『湖』Le Lac の一篇は人口に膾炙して居る、『うつもく』新なる渚に寄せられ、とこしへの夜に歸路を知らず、さては光陰の大洋に一日も船えはてずや』と歌ひ起して、湖畔の石に踞し、昔日の清遊を憶ひて、晚來の波聲濤影に悲むわたり、殆ど晚唐の詩を讀む心地がする、此詩は詩人の實歴から思ひ起したので、『ラファエル』Raphael といふ本に見えて居る、ルソオの『新エロイズ』Nouvelle Heloise 卷四十七章の消息、ミヒセエの『追憶』エウゴオの『オランピアの悲』と同工異曲であらう、此詩はニイデルマイエル Niedermeyer といふ音楽家に依つて譜を附けられ、永く藝苑に傳唱してある、此處に不朽の譽を得た湖はサヴァ Savoye のエイクス・レバン Aix-les-Bains に近きブルジエ Bourget の湖ださうだ、ラマルティイヌの作で、此他に必讀すべきは、那翁セント・ヘレナに逝きて間もなく千八百二十一年に讀だ『ボナバルト』Bonaparte ビザンティンゼの間カシヤノの泉に近き老樹の陰で歌だ『橙樹』Le Chêne 『イスキヤ』Ischia 『ミリー』Milly である。

(全集が出版あるなかで、詩人自らの蔵版千八百六十年乃至六十二年、四拾卷のよい。評論にはセントブリッジのほかに、Faguet, XIXe Siècle 1887 が公平だ。)

四 アルフレッド・ヴィニイ ALFRED DE VIGNY

ヴィニイは千七百九十七年アンドル・エ・ロワアル Indre-et-Loire のロオン Loches に生れ、千八百十四年禁軍の尉官となつたが、軍營生活の無趣味、束縛を嫌て辭職し、十八年より専心文藝に心を傾けた。既に千八百二十二年に『詩集』Poésiesを著して、之を三部に別ち神秘詩、古代詩、近世詩とした。シニエの感化も見え、十八世紀の遺響もあるが、自ら時流と選を異にして、徒に熱情の文學を弄するのでない。二十六年『サンク・マン』Cinq-Mars と云ふ歴史小説を著はし、二十九年沙翁の『オセロ』を譯し、三十五年『軍職の高卑』Grandeur et Servitude militaires と云ふ散文を出したが、『宿命』Les Destinées の詩は歿後に公にされた。他に戯曲二篇『マレンシアン・ダンクン』Marchale d'Ancenis 『チャタトン』Chatterton がある。

ヴィニイの作は斯の如くあまり多くない、併しながら一篇として輕薄な虚偽の心情を述べたものなく、皆清高峻厲の氣概が溢れて居る。第一、彼は厭世詩人で、恐らく

近世詩人の最も眞摯で、哲理に深い人であらう。厭世觀と云ても、バイロンのやうな驕兒のと違て、無暗に駄々を捏ねるのでなく、其説の結果たる、單に手を束ねて、遁世無爲に終らうとするのでもない。之に反して嚴肅の道念益々高く、人類の悲愁に對して、深い憐愍を催うした。厭世家になつた原因は彼の家庭に基いたか、青雲の志を得なかつたからであるか、それとも或人の想像する如く、終には死因となつた胃痛の病を早くより腫げに知て居たからであらうか。思ふに此詩人のやうな確乎たる哲學觀はそんな薄弱な事より生ずるものでなく、それは半平たる理性上に基て居るのである。自然と人生との衝突、『牧人の家』參照、天才の孤立、『摩西』參照、人心の腐敗、『サムソンの憤怒』參照、吾人の悲愁に對して群神の無情なること、『橄欖山上の基督』參照等に基いた堂々たる深遠の厭世觀で殆どパスカル Pascal の思想と同一だ。マアテルリンクと派を同じうする白耳義詩人エルハアレンが嘗て佛蘭西の厭世詩人を論じて、ヴィニイを挙げたのを譯して余が著『最近海外文學續篇』に載せてあるが、此文を讀む人は就て參照ありたい。實にヴィニイの詩は今人の激稱する如く大人君子の精讀に値する事、宛もブラウニングのやうで、悲壯の宏大がある。作品悉

く逸品と云ふ可きのであるが、余は始めロオラン Roland の最終を歌つた『角笛』Le Cor の詩を讀ませいか、『森蔭の角笛の音こそめでたけれ、狩犬迫る若鹿の涙の聲か、あるはさつ男の別れにと吹く音も微か、山彦のどよむを北のやまおろし、梢こそるに傳ふなり』とあるを愛讀するが『狼の死』La Mort du Loup 八十八行、一の閑文字無く息もつぎあへぬ詩歌の高潮、實に近世詩の秀抜なるものだ。『もの言はぬこそ大いなれ、餘はたい怯なり』といふも、『歎き泣き祈るは皆ひとしく卑し、勢猛に勞苦の業を成して、宿命の導く路に上ほれや、かくて吾がすなるやう、憐むとも無言にてうせよ』とは、夢のやうな情熱派の歌で比して、鏘々たる金石の響がある。モリエール Molière の厭世家アルセスト Alceste に似て、更に高潔の氣概がある。ヴィニイの作は、近時漸く崇拜者を有するに至りて、ミッセエの歌を凌ぎ、ユウゴオの詩と比肩するやうになつた。佛蘭西の詩を味ふ者は此詩人を省いてはなるまい。

(ヴィニイ全集は Calmann Lévy, Paris 八卷がある。ルナヤの『十九世紀』のほかに Brunetière, Essais sur la littérature contemporaine, 1891 を参照せよ)

五 ヴィクトル・ユウゴ VICTOR HUGO

英のスコットは吾邦にて詩人の如く言囃されるが、作品其の物の價値より評しても、又文藝史上の地位から論しても、彼は歴史小説の祖として、大陸の文壇をも聳動したのである。ユウゴオは之と反對で、吾邦では寧ろ『哀史』等の著者として知られ、詩歌戯曲などで評されないと云ふ事は、既に本論の始に述べた。勿論其小説も瑰麗雄大の趣もあつて、社會組織の不完全を痛論した處などは大に稱すべきものだが、其詩歌に比べては同日の論でないし、又茲には佛蘭西の詩を紹介するのであるから、小説の月旦はしない。

『秋葉』といふ詩集に生立の事がある。『此世紀すでに二年、羅馬(帝政)斯波多(共和)政に代り、ボナバルトより那翁顛脱しぬ……此時西班牙の一小邑ブサンソン Besançon の里、ブルトン Breton ロラン Lorrain 二種の血を享けて、色も眼も聲も弱げの兒は生まれぬ、あまりに力無ければとて母なる人のほかは皆兒の生立を心元なく思ひ居たり』と、父は那翁の一將軍、母は王黨の家に屬し、始より反對の性質を遺傳した事は、後年の作に顯はれた。『連戦連勝の軍隊に従ひ、屈服せる全歐を跋躡して、わが世をたきにさ迷ひぬ、よもを走りぬ』とある如く、幼年の頃より自然の壯麗なる

風物に接して、豊麗な詩想を吸収したが、また同時に不規則なる教育を受けたといふ弊もあつた。千八百五年より同十二年まで、其間巴里に滞在すること二年であつたほか、大概外國を歴遊したので、始はエルバド島(一八〇五—七次はアエルリノ Avellino(一八〇七—九)それから西班牙(一八一—二)と歩いて暫く馬德里の華族學校に學だ。『歌謠集』の『幼時』、『光影』の『千八百十三年フィヤンの精舎に在りし事』、『静思』の『フィヤンの尼に與ふ』(参照) ユウゴオの母は思慮深い男まさりの賢夫人であつて、かゝるなかにも愛兒の教育に意を用ゐて、自分の主義を教込だので、彼の『王政復古』の時分にはこの兒を熱心な王黨及び舊教徒として仕舞つた。

千八百十九年トウルーズ Toulouse の『文華院』 Académie des Jeux Floraux の募に應じて二篇の詩を賦し、賞を得たが、翌年も同様に一等の選に入つて『文華博士』の號を授かつた。かくて二十二年二十六年『歌謠集』 Odes et Ballades を公にして、騷壇の眼を注がしめながら、アルタアスコットの感化で『イスラランドのアン』 Han d'Island といふ一小説を書いた。二十八年に至つて有名な『東邦詩』 Orientales を著すや否や詩壇の寧馨兒として顯はれたり、と滿城の士女争て此書に赴いた。而して千八百三十年即

ち佛蘭西文學史に記憶すべき『ミルニイサントラント』の歳二月二十六日、第二十八回の誕生日に『エルナニ』 Hernani の劇を場の上に上ぼしたのこそ、文藝の大事件で、これより彼は情熱派の驍將となり、文壇革新の急先鋒となり、陣頭に起て、天下に號令した。かのテオフィル・ゴオチエが、長髮紅袍青春の徒を麾いて、此劇の初日を賑やかしたのも、此時である。幕明の劈頭第一、典、雅派の韻律法を破壊して保守黨の膽を寒からしめた快心の舉である。此劇の成功は即ち情熱派の大氣焰を吐いたものだが、實は二十七年に『クロムエル』 Cromwell の曲を作て之に添へた序言は此派の宣言書と云ふべきか、これは先年宮本法學士が譯して『柵草紙』に載せてあつたと思ふ。擬古舊劇の根底を覆へさむとした雄篇だ。されどこれもとスタンダルやスタエル夫人の夙に唱道した事で、敢て珍らしくない。唯時運の機變を察し他人の思想を吸収すること天稟ともいふべき人であるから、斯の如く盛名を博したのである。この所、不思議にもアルテエルに似て居る。

不幸にもユウゴオは此文名に満足しないで政界の牛耳を執らうとした。茲に詳論する暇がないが、兎に角これは大失敗に歸したので、始の王黨が自由黨となり又

共和黨に變じ、とゞのつまり例の『クウデター』 Coup d'Etat の時に巴里御構になつたから、ブリッセル Bruxelles ジェルシー Jersey ゲルンゼン Guernsey に轉住して、普佛戰爭の時まで歸らず、戦後都に入るを得て、千八百八十五年に歿した。

政界の事業はかくて失敗に終たが此間文壇に於ける勢力は老來益重を加へて、十九世紀中葉大陸詩壇の北斗であつた。述作頗る多いから、精細の評は難いが、評家は此詩人の作を三期に別つて論じるから、今暫くそれに従はう。まづ一生の作品に三段の變遷がある。併し、これは詩人自らの意志より出た自覺ある變化といはうより寧ろ己も抑へ難かつた自然の發展である。又は時勢の潮流に促されて、即ち周囲の事情よりかう成つたのである。

第一、抒情體時代 二十二年の『歌謠集』より始り、當初は稍々古風な浮誇の譏を免れ難かつた。『東邦詩』亦此瑕がある。第一、實の景情を寫したので無く、主觀に基いた夢幻の歌だ。『天火』に顯はれた埃及の風景も『後宮怨』に見える土耳其の習俗も純なる主觀で、『秋葉』 Les Feuilles d'automne, 1831 にもこの風があるし、『黄昏の歌』 Chants du crépuscule, 1835 の詩も『折にふれたる』が多く、大概自家の喜憂を豊麗な詞藻

に托したのだ。それで其技巧の絶妙所謂『ヴェルチオジテ』 Virtuosité は實に感嘆の辭を盡し切れない。佛蘭西の原詩に就て味はなければ、韻律措辭の靈活は感じがたいが、英の詩人スキンプアンの狂するばかりなる崇拜も無理ならぬやうに考へられる。『畏しき神は萬物のもなかに此人の心する給ひ、どよもす木魂の風情なれば』 『内聲』 Voix intérieures, 1837 『光影』 Les Rayons et les Ombres, 1840 の集は佛蘭西抒情詩集の絶美なるものだ。着想の妙既に企及すべからず、聲調の豊大、雄健、多趣、最も靈活それでいつしか狭小な自己を離れて、漸く客觀の域に足を進めて來た。

第二、叙事體諷刺體時代 ユウゴオ茲に放れて孤坐靜思の機多く、藝術の想漸々圓熟した。愛憎の性はまだ衰へず、逆境に處して益々募つたくらゐ『天罰』 Châtiments, 1836 の集は冷嘲熱罵、面もひけ難い、而も詩美を具へた『贖罪』 L'Expiation 百五十六行はじめに『此日雪ふる』と繰返すこと五回、陰雲漠々として、罪業の蓄積し來るやうだ。ユウゴオの詩才益々熟して來たのではないか、書く所、述ぶる所、客觀のしつかりした力があつて、『歷世史話』 Légende des Siècles 第一集五十九年『眠れるボオズ』 Booz endormi の如きは、蓋し此詩人の傑作であらう。『路都記』に基いて優麗にして同時

に莊嚴なる内外界の靜寧を歌ひ『ガルガラに夜風わたりぬ』の邊覺えず神恩の廣大無邊に頷うかせる『靜思』Contemplations, 1856の集にも秀什が多いが此第二期に屬すのだ。『喬森陰の歌』Chansons des Rues et des Bois, 1865もさうだ。

第三黙示體時代 孤獨沈思の生涯はユウゴオの想を驅つて幽玄神秘の方面に向け永遠を思ひ絶對を慕ひ坐るに崇高の詩趣を捉へむとするに至つた。アイヌヒエラス以賽亞の流を汲むに至つた。『歴世史話』第二集(七十七年)第三集(八十一年)は勿論此期にはいる。『大禍の歲』L'Année terrible, 1872『祖父の術』L'Art d'être Grand Père, 1877『必靈の四風』Quatre Vents de l'Esprit, 1882 皆暗澹たる無邊大の詩美を有して、物に譬ふれば、レムブランドの陰影多き繪畫のやうだ。詩人は終に預言者である。詩歌は終に黙示録となつた。

ユウゴオの劇詩は他の情熱派劇と附隨して特別の研究を要するから細説を省く。唯其重なるものを擧げれば前に述べた『シロムエン』『エルナニ』の他『マリオン・ド・ロマン』Marion Delorme, 1831『御遊』Le Roi s'amuse, 1832『アンソナヤ・ボニンシヤ』L'Arcée Borgia, 『マリン・チャルマン』Marie Tudor, 1833『アンソナヤ』Angelo, 1835『マインラ

ク』Ruy Blas, 1838『市長』Les Burgraves, 1843等だ。

序に小説の目を擧げる。『シマンガン』Bug Jargal, 1818, 1826『ノスマランドのアン』Han d'Islande, 1823『刑人の終日』Le Dernier jour d'un condamné, 1829『ノオトル・ダム寺』Notre Dame de Paris, 1831『ノロケ・シヤ』Claude Gueux, 1834『哀史』Les Misérables, 1862『海人』Les Traveilleurs de la mer, 1866『笑ふ人』L'Homme qui rit, 1869『九十三年』Quatre-vingt-treize, 1874等だ。

要するに詩人としてユウゴオを評すれば先づ思想の淺膚趣味の不平均、用語の誇大等が著るしい缺點であるが、情熱の盛にして、時代の精神を吸收同化する天才があり、又外界の印象を強く烈しく感得して、之を豊麗な押韻で、奇警な對句等の修辭で顯はす大詩才が有つた。後の長處は古今無類な程、燦爛たるものであつたから、前の重大な缺點を掩うて居た。また説明し難い一種の魔力があつて讀者を引きつける。始より此詩人の瑕を知りぬいて居ても、一たび其作品に向へば一種の美を覺える。實に大詩人といふべしだ。

(ユウゴオ全集(但し消息を缺く)は、1885-1888, Hetzel, Paris 五十六卷がある。評論枚舉し難い。まづ例の

六 ミッセエ ALFRED DE MUSSET

ミッセエの詩は天真爛漫を以て著はれる。鳥の歌ふ如く歌ふと云ふ點に於てはラマルティエヌと派を同じうし、機智警句全篇にゆき渡つて居る。處、巴里子の名に負かず獨得の妙がある。抒情に關する彼の主義は赤心を披瀝して讀者の同情を求め共に泣き共に喜び望み苦み感せしめると云ふに在つた。されば戀歌の名人、輓歌の憂愁を述べるにも宜い。

千八百十年首都に生れ、二十八年、情熱派に加盟したが、間もなく之を脱した。一生の述作おほむね三十歳の前に出たので、千八百五十七年に歿した。傑作は千八百三十五年から三十八年迄に著述した『夜の思』Les Nuits、所謂『抒情體輓歌』である。『神の望』L'Espoir en Dieuも同時の作。『ローラ』Rollaは三十三年、これも感情を重する人の愛讀詩だ。劇詩の才も有つたので、『婚劇及び古歌』といふ書に數篇の小戯曲が收めてある。抑も、ユウゴオ、ラマルティエヌ、ミッセエ等の一時唱道した、『ロマンチズム』Romantismeは現代の民心には最早喜ばれない。吾邦では近時荐りに『ロマンチズ

ム』の聲が高く、最近の歐洲詩壇は、皆この派であるかのやうに思ふ人も有るが、それは大間違である。尤も『ロマンチズム』とは、甚だ曖昧な言葉で、論じやうによれば、随分詩文の好きな人は皆此派の如く云ひ得るもの、慣用の語義では十九世紀の前半に勃興した情熱を重し自我を尙び、主觀を專にした、反動の聲を云ふのである。其後幾多の變遷あつて、意志を重し客觀を主とする別種の文藝が勢力を得て來た。晩近新ロマンチズムの語も無いのでは無いが、それは主に獨逸の文壇だけの新語で、まだ英佛の語には採用しない。兎に角、通例所謂『ロマンチズム』とは別物であるから、ほかに何とか言葉が有りさうなものだ。文藝の史を讀まず作品を味はずに、漫に文壇の通言を振廻して、得々とする人は、意外の誤解をして、終に自ら覺ることが出來まいと、餘計な事だが、密に案じるのである。十九世紀後半から今世紀にかけて、達人の眠は感情を放れて、意志の強健にむいて來た。されば、ミッシェル Michellet よりもスタンダル Stendhal をミッセエよりも、非ニイを尊奉するのである。白耳義のエルハアレシなどは、ミッセエを酷く評して居る。さすがに『野卑ならねども』局肅にして、表面に矛盾多く、根柢に論理を缺き、薄徳の果なればにや、不知不識の間、彼は『人間といふ動

物の活模型』『藝術の理想また諍列にわらず、雄健にわらず』『この人は詩獄に悠遊する輕薄の一才人なり』と貶したが、『ミラッセエの戀はおろかし、されどめでたき歌をもて其恨を泣きぬ』と助けたのも一理あるので、『五月の夜』『十月の夜』などは、青春の敬慕をとこしへに惹く歌であらう。たゞ最高の藝術とはいへぬ。大人一生の教化とするに足りなす。

(全集は Charpentier 版十巻がある。抜萃は『佛蘭西大家叢書』の Arède Baine の編輯したのがよい。フジエの評公平である。)

七 ゴオチエ THÉOPHILE GAUTIER

詩人評論家小説家として、多能の名を擅にするゴオチエは千八百十一年ビレネエの山中に生れ、七十二年巴里で歿した。始め書を學び、間もなく文學に投じ、ユウゴオ等と結で情熱派の飛將軍と爲た。言行風采一として俗人を驚かさぬのは無かつた。第一非常に丈が高く、鬚も髪も長くして、絢爛眼を森ふ如き眞赤なちよつきで押歩いた。此人がはじめ書を習つたのは、大に後年の作に影響して居る。文藝に於ける格調の靈妙、輪廓の正確を主張して、情熱主義より、自然主義に變ずる媒介を作つ

た。純なる客觀風の叙述を好で、後年の寫實派勃興の因となり。ルコント・ド・リールが『無我』の詩と默契したところ、頗る興味がある。又『瑰奇』Les Grotesques, 1853 と云ふ評論集には卷頭にギヨン評す位で、怪を好み奇を喜んだ自然の結果とし、後に『悪の花』を作つたポドレエル等の開祖となつたのも面白い。此人の詩では『瑠璃及彫玉』Emaux et Camées 1852 が傑作であらう。

(ゴオチエ一生の作あまりに多いから、未だ全集は無い。著書多くは Charpentier の蔵版だ評論にはフジエ、ブリンチヘル等がよい。抜萃は例の『佛蘭西大家叢書』中にある。)

シニエよりゴオチエまで、これが所謂奇瑞の歳千八百三十年前後からかけて、情熱派の衰頹に達するまでの詩人である。然し、哲理の討究、又科學の進歩政教の難問、殊には『澆季』懷疑の苦悶などで詩文に反響が無からうや、『高踏派』Parnassiens 起り、『頹唐派』Décadents 出で、『象徴派』Symbolistes また之を嗣ぎ、詩壇の狂瀾はまた收らなす。ルコント・ド・リール Leconte de Lisle、バウダレイヌ Baudelaire、ボセ・ロリヤ、ド・マン、マリア José-Maria de Heredia、ベルンハス Verlaine、マリン・プーラン、シュル・プーダン Sully Prudhomme 等は、

最近の詩風を代表する名家であつて、充分精讀の價值がある。但し十九世紀末人心内部生命の奮闘苦悶を閲みしてはじめて味ふべきもので、幽玄もあり狂熱もあり到底一回の談話に盡くされない。殊に白耳義新文學のマアテルリンク Maeterlinck、エルハアレン Verhaeren、ロオデンバン Rodenbach、又は佛蘭西本國のマラルメ Mallarmé 如きに至ては、トルストイ伯などから御小言の出た位に難解だ、少くとも幽玄だ。さればとて、近世人の胸には、それが何となくしみじみと感ずるの不思議である。縹緲たる幽趣微韻茲に至て、靜な大勢力を逞くする、何にしる今人の世界觀は大でない、微妙な陰や音や香を尋ねて居るのであるから、一方に神秘説の粗當然である。又おほむね厭世悲哀の觀に傾て居るのも怪しくない。又蟬脱して、自我發展説や勢力の福音となるも自然の傾向だ。而して、諸の遠觀はまた一世を支配するに至らず、謂はゞ微光の裡を摸索して居る。又譬ふれば、醜醉の最中である。それ故藝術に顯はれた形式が糺糊として、捉へ難いのである。吾黨は常に古大人を尊奉して居るが、自ら同代の思潮に掉しもするので、どうか其一端を未知の士に傳へやう、日本の言葉に譯して吾邦の文學にも現代想の一龍鱗を表はさうと勉めて居ると、

新聞小説の如く、時文評論の如く、流暢でない、明瞭でないとの非難を聞く。こちらも實は流麗(即ち淺薄で)明快(即ち粗大で)となつては却て迷惑するのである。吾等の譯文は兎も角、原文も頗る難解實は幽玄晦澁(實は深遠)の作品であることを先づ知らせたい。唯幸にして清新の趣味に富で、前人の蹤を履むまいと決心した勇猛の氣ある文藝の士が、吾等の舉に同情を寄せらるゝのが、如何にも楽しいのである。かゝる奮心のある人々に向て、後日機を得たなら、なほ委しく現代の佛蘭西詩歌を説くであらう。非ニイ、ルコント、ドッリル、ボドレ、エル等の詩に表はれた世界觀に關しては、嘗てエルハアレンの『悲哀』といふ評論を譯したから、それにて一端は窺はれやう。『新白耳義派』の雄鎮なる『曙』 Les Aubes の作家より、近世詩の月旦を聴くもまた云ふべからざる興味がある。佛蘭西詩歌の傾向が、達人の思想に前後して、かの女頭獅身獸の謎を説かうとするに在るのが、明らかに認められるのである。

近時の音樂論

(明治三十三年七月十四日東京音樂學校)

今日は俄かにお呼寄せになりました。罷出でましてごさいます。全體他の御方の

お話になる所を私に代理を務めろと仰つしやいました。所が私は御承知の如く音楽に就ては全く聲でございませぬ、それに俄かのお頼みでお話申す事はございませぬが、お断り申しては却つて失禮かと思ひまして出ました。其題は只今御披露なさいました如く近時の音楽論と申すのでございませぬ。此音楽論と云ふは近時世間に流行する音楽に就ての批評であります。是に就て少しく申述べたいと思ひます。近來此音楽學校は漸々盛大に趣くやうに見え、其内内地雜居などになります。日本音楽の趣味も廣く行はれて参りませうから色々な議論が必ず起るであらうと思ふ。而して其議論の中には有益のものもありませうが中には音楽の前途に對して憂ふべき論もあるかもしれぬ。私は前申した如く音楽に就ては門外漢である。所が此門外漢と云ふ語は大變流行する語でございまして、世間の音楽論は大概門外漢の論であります。却て音楽の當事者、琴を弾き、笛を吹かれる方の論ではない。それ故に案外効果が少なくとつ拍子もない論もあります。併し此門外漢と云ふ語は一種の美名でありまして、門外漢とさへ云へば音楽に就てどの位不穩當な論を立て、どの位不人情な論を言つても構はないやうである。全體私も音楽は精し

くない、精しくはないが、どうかさういふ門外漢の組へは這入たくないので、一體音楽は世間の學者の云ふやうな無理な注文を入れる者ではない、相當な尊敬を持ち相當な考を費やして始めて之に注文をすべきものであらうと思つて居ります。

抑も世間の所謂門外漢の論の中で人望のあるのは音楽の折衷といふ事で、日本の音楽はいけない、小規模である、室内の音楽であるから、是に西洋の趣味を加へ、西洋と日本とを折衷しやうと云ふのである。而して此美術の折衷と云ふ事は、音楽のみならず、世間に於ては繪畫建築の論に至るまで、よくいふ事でありまして、甚だしきに至ては宗教の折衷と云ふ事を説く者もある。併し私は折衷と云ふ事に就ては大不賛成であります。なせと云ふに此宗教であれ哲學であれ美術であれ、凡べて高尚な事より又小にしては一國の風俗人情に至る迄折衷と云ふ事で旨く往つたためしは昔からありません。是を日本の繪畫に取りまして論じて見ませう。世間のいふにはどうか日本の繪と西洋の繪とを折衷して見たい、日本の繪には短所がある。又西洋の繪にも短所があらうといふ、有るか無いか分らないけれども先づさう言つて置く、それ故西洋の長所を入れて遣つたら好くなるだらうと云ふ論がありま

すけれどもそれは單に數學的の論である、決して美術や審美論に持出すべき論法ではないと思ふ、其證據には此美術の折衷と云ふ事をよく申しますが、偕て實行と云ふ事になつて成功したためしはない、假令ば日本の繪には影がないからとて影を付けて見ると大變可笑しな物が出来る、日本の畫題は狭いからとつと廣くしろと云つて、西洋の畫題を取つて日本の繪を畫くとこれも妙なものが出来る、私は音楽もそれと同一であらうと思ふ、日本の繪に於ては線の美を以て基とし又西洋の繪に於ては影を以て基と致しますと同じく、日本の音楽は早く言つて見るとメロデーを以て基と致し、西洋の音楽は之に反してハアモニイを以て基として居ります、所が日本のメロデーばかりの音楽に西洋のハアモニイを付けるとどうであるかと云ふと、却てあまり感心しない思が起るでは御座いませんか、それで美術の折衷と云ふ事は議論では一應尤ですが、其實行には一寸逡巡する、或は大膽な者があつて實行しても決して藝術界又民衆の賛成を得たためしがない、と云ふのも、原と美術はさう云ふ安つばいものでなくして、國民の性情から出て自然と發達しなればならないからであります、故に世間の人は美術の折衷と云ふ事をよく申しま

すが、それは私は大不賛成であります。

次に門外漢なる者は此美術に就て殆ど言ふべき權利を持って居ない所の者である、なせなればさう云ふ門外漢は随分學者であつて議論を唱へ、或は本を讀んだ者である、西洋の審美學も讀みませう、或は西洋の美術史も讀んだであります、併しながら肝心な美術其物を解した者は少ない、是と云ふのは明治維新の前に當つて天下が亂れ、隨て明治維新以後も教育が行渉らなかつた、家庭に趣味がなかつた、而して此の如き教育家庭を有したものが一方に専門の學をやつて或る相當の地位に登ると大膽な議論を吐て困るのである、それで音楽とか繪畫とかに就て好みを持て居ない人々であるから、其論は理論としては一應聞えても、實行に苦しむ、隨て音楽者なら音楽者の参考として折角注文しても不親切のやうな事があつて、どうも進歩の方に少しも機能がないでございますから、私の考へるに先づ音楽なら音楽を盛んにしやうとするには家庭に於て其趣味を作らなければならぬと思ふ、又是を大にしては社會の公衆が之を喜ぶやうになつて音楽が出来る、音楽あつての人生ではなくして人生あつての音楽であります、野蠻人には野蠻人の音楽があり、

開明人には開明人の音楽がある、斯うしたい、あゝしたいと云ふ念が集つて今日のやうな日本又は西洋の比較的立派な音楽が出来た是から二十世紀二十一世紀になりましたならばどんな又音楽が出来るか分らない。已にワグネル Wagner 杯の論を見ると、音楽は未來の藝術であると云ふ事が書いてある。未來の藝術と云ふのは私も委しくは存じませんが、此音楽又總ての他の美術を集めて、建築であるとか彫刻であるとか、繪畫又は詩歌などの協同した一つの立派な藝術である。それを未來の藝術と名付けてワグネルが荐に主張致しましたが、斯く云ふやうな藝術も未來に於ては起るかも知れぬ、さう云ふ工合に人生の進むに従て、社會の進歩するに伴つて必ず音楽も變化する。それ故に音楽は絶對的或る一つの物があつて之を世間の者が學ばうとか、之を味はうとか云ふむづかしい物ではなく、唯一邊やつた所が面白いから之を繰返し又發達せしめる専門家が出來又解らない者に教へて遣ると云ふやうな順序になつて參つて居るのである。であるから趣味を養成された人は誰でも一種の音律を聞いたら面白い、心が壯快になる、又他の音律を聞くと悲しくなるとか陰氣になるとか示ふ工合から、色々な種類の音楽が出来るのであり

ます。

第一趣味と云ふ事は音楽の進歩に對して伴ふのであります。所が今の世の事情は大層亂雜になつて居りまして、學問をやる者に趣味が無くて困まる。追々此缺點に人々は氣がついて參りますけれども、まだ世間には是を言ふ者が少ないやうに見受けます。一體自分の嗜みを能くして始終美しい事を思ひ、美しい事を好む心があつて始めて美術と云ふ物が盛んになるのである。それで唯本を讀んで理屈ばかり知つて居ても決して音楽などを味ひたくはないので、御座いませうが、西洋にも音楽を賞する風がある、それ故日本人も體裁上之を賞さなければならぬといつて獎勵するやうな風のやうに御座います。それでは音楽の當事者が御骨折になつても大した結果はありますまい、若し音楽などはやらなくつても宜しいと云ふ事になつたならば、直ぐ止して仕舞ふ、又西洋の真似を日本でしなくつても宜いとなつたならば、さう云ふ御客は直ぐ減つて仕舞ふのであります。

所で今音楽を好んで音楽を彈き繪畫を愛して繪畫を賞すると云ふ人が兎角乏しいやうであるのを救ふにはどうして宜いか、色々な法がありませうが、先づ少し

く理屈を知つた者は黙つて居て、則ち教育を以て無趣味の人を諭し、せめて其人々の子孫にさういふ人が出ないやうにする外仕方がないと云ふ者である。家庭教育に音楽を入れ、社会教育に美術もあるやうにして、始て音楽の進歩を來たすべき者である。と言ひますと、大變に新らしいやうな事で、明治の教育に美術を入れると云ふやうな事を言ふと不思議に聞えるが併し之は決して耳新らしい事ではない。則ち徳川氏の時代でも斯う云ふ風はあつたのでありまして、たゞ今のオルガンと昔の三味線とか琴であるとかが變つただけであります。今でも家でオルガンを鳴らす者が少ない、ピアノを弾く者が少ないが、方々を通るとよく三味線を弾いて居る、西洋の音楽とは劣つて居るかも知れぬが、何しろ三味線を弾いて居る。それを弾いて居る者は何であるかと云ふと裏店の子である、しかし三味線も音楽であるから小さい時から弾くと音楽を好む思想は自然養はれて居るのである。即ち却て中以下の社会に美術を好むと云ふ思想が養はれて居る。之に反して中以上の門前を通ると何にも音のしない事がある、偶に琴の音、ピアノの音などが致しますが、是は至て少ない。さう云ふ處に養はれた者が大人になつて、音楽などは要らぬと云ふ時勢にあつて御

覽じろ、音楽の見込は皆無です。徳川時代に於ても又明治の時代に於ても中以下の社会に於てさう云ふ趣味がありません。學者——理屈を知つて居る者の中に美を愛するといふ心がないのは慨かはいしに至りではございませぬか。そこで私は音楽の當局者に望むのであります。どうか音楽を普及したい、高尚な音楽ばかりでなく、通例の音楽を廣く擴めたならば或は高尚な音楽を發達せしめる階梯になるかと思ひます。それではどう云ふ音楽が宜いかと言ひますと、是は色々論のある事でありませうが先づ唱歌であります。小學校で教へます唱歌、教育の用に供する唱歌、其次には色々な人情を諳つたり或は軍のいぐさこととか或は男女の間を諳つた歌でも宜しうございませう。さう云ふやうな歌をどん／＼流行させるのである。所が唯今の音楽界を見ますとさう云ふ風は少ない。マスカーニイ Mascagni 等のやうな色々西洋今日流行の高尚な音楽は随分演奏せられますが、あのやさしい誰にでも諳へる蘇格蘭のメロディと云ふやうなものは少ないやうであります。偶に唱歌となつて現はれますと随分私共は感心して聽いて居ります。併しながら歌の言葉がすつかり違つてるのでありますから私のやうな不完全の耳を持って居る人間はそれ程感じ

強くないのであります。であるからさう云ふ唱歌を歌ふ時は、凡て唱歌の言葉に、原とのメロディにあるやうな思想を持たせて、お謠ひになつたならば、尙ほ々々感が深からうと思ふ。極く人情の切な所を言つたり、或は國を思ひ家を思ふ心をもう少し適切に現はして謠つたならば、音楽を能く知らない者迄段々それに導かれるやうになつて感心するであらうと思ふ。又器樂に於ても大仕掛の管絃樂であるとか何かは勿論必要であります。それをやる前に一樂器の音楽を盛んにして何處の家でも備へ付けてやるやうにしたならば、是も音楽の趣味を擴める一つの手段でありませう。要するに何しる趣味を擴めると云ふ事は肝心で御座います。人生に觸れた音楽を殖やすと云ふ事は必要である。

それで今のは小さい事を申しましたが大きく云へば私はオペラ見たやうなものをも日本に輸入したら宜からうと思ふ。オペラも色々ありますが、兎に角私はオペラは日本人に適するであらうと考へます。なせなれば日本の芝居は西洋のドラマよりもオペラに近いものである。其起原に於て又現在に於て似て居るものである。西洋今日のドラマは何であるかと云ふと、是は踊りよりも寧ろ言葉、歌より生じたり

のであります。或は茶番の如きものより生じた。或は宗教の教祖聖僧の一代記を述べたミステリイと云ふ物から生じた。之に反して日本の芝居は人形或は踊りより生じた物である。故に此西洋のドラマと日本の芝居と比較して見ますと、音楽に近い方は日本の芝居である。壯士芝居は違ひますが今日でも通例の芝居へ往くと矢張りチヨボがある。音楽に伴つてやる。例へば三味線に合はして書置きを書くとか云ふやうに、音楽に近い所がある。是に由て日本の者がオペラなどを見たら感ずる事が容易くはあるまいか。それでまだ色々オペラに就ての論もありませうが、追々日本の芝居の仕組をもう少し改良して往つたら宜からう。今のチヨボや何かは非常に變な物で、ドラマの進歩を害すると云ふやうに論ずる所の一種の突飛なる論者があります。それは美術の過去の歴史及び將來前途を重んじない論であつて決して取るに足るべきものではございませぬ。それよりも今日の芝居に西洋音楽の趣味を加へるとしたならば一方に於て國民の音楽の成立を圖る一助にも成らうかと思ひます。オペラの如きは歴史を案じますと極く近世の發達でございまして、則ち文藝復興以來十七世紀あたり今の形をなした、グロック、Chalkなどが完全

なるオペラの始めの人であります。それで此オペラは勿論音楽に大變頼つて居りますが、元々オペラを起したのは希臘の芝居を慕て起したのです。どうか今日の西洋人も希臘の芝居見たやうな物を作りたいと云ふやうな議論が古文學者——古の文學を研究した者の間に起つたので、それから段々音楽一方で進んで参りました。近世に至つてワグネル Wagner などが出て是ではならぬ、音楽ばかりではない、是に宜い語彙を加へ是に美くしい道具を備へ、則ち彫刻建築などの助を借りてもつと大きい美術を拵へたいと云ふ都合になりました。則ち西洋の方では日本の芝居に段々近付いて参つた。日本の芝居はワグネルの言ふ未來の藝術かも知れない。大道具の立派な物を使い、家元などを呼んで来て謠はせ、又名優が踊を踊ると云ふやうな事で、決して西洋に耻ぢないものである。ワグネルも未來の藝術は過去及現在の藝術を綜合したものだとして居るのでは御座いませんか。

であるから日本と雖もさう捨てたものでない。兎角世人は藝術の如き直接に國家の體面に關らぬ事になると外國の物を褒めますが、日本の藝術はさう捨てたものでない。一概に琴や三味線を排斥しますが、是は如何であらうかと思ふ。茲に至て

西洋音楽と日本音楽の關係になつて参りますが、近來西洋音楽を論ずる者は日本音楽は全く止して仕舞つて西洋音楽を入れる、國民の性情などは構はないと云ふが、藝術は國民の性情を現はしたものでありますから外來の藝術がしつくり民心に合はないと云ふ事は解りきつた事である。又一種の論があつて日本の性情に合はない藝術は取るに足らない、であるから西洋音楽は全く排斥して仕舞へると云ふ。これまた極端な論であります。それでは日本人は西洋人のする事が出來ないと云ふことになつて仕舞ふ。さう云ふ一種の宿命説は間違つて居る。どうしても西洋の美を取込む手加減は必要であります。併しながら憂ふべき所は是から此學校が盛になつて色々世間の論題に上る時に至つて、日本の音楽學校であるから日本人民に適さなければならぬ。それ故に西洋音楽を廢しても日本主義を貫かなければいけないと云ふ論になつて参るであらうと思ふ。其時に若し此注文に應じて作る所の作曲者が世間の輿論に諂つて、西洋樂と日本樂とをやたらに混せて拵らへたならば必らず妙な事になり、洋服に下駄を履いたやうな物が出來るであらうと思ふ。どうかさう云ふ事にはしたくない。

さうしたならば私の論は何所に歸着するか、西洋音楽も宜い、日本音楽も宜いと云つたらどうなりますか。曰くです、音楽の如き高尚な物は一朝一夕に出来る物でないから氣を長くやるのでございませう。それで此學校なら此學校でやる所の音楽を、西洋音楽と極めたならば何所迄も西洋音楽をやつたら宜からう、西洋の音楽の宜い所も悪い所も分るまでやつたならば旨い考も出ませう。一年や五年、十年位で日本の國民美術を作ると云ふ事ではやらない方が宜い、やつても無駄である、變な物が出来るに違ひないから、繪畫などもさうでございませうが、音楽の如きは特にさうであらうと思ふ。東西の音楽には随分氷炭相容れざる事情もあるので御座います、さりながら昔から國民の性情に基かない藝術は築えないと云ふ事を申して、逆も今音楽學校でやる西洋音楽が其儘日本の國民美術となる事は、望む可からざる事でありませうが唯今ではやる所迄やつて何處迄も西洋音楽を味て見るのは損がないと思ひます。氣が長い話であります、其中に宜い考も出来、或は從來の日本音楽の方も發達して參つてそれで始めて完全した所の、丸く纏つた音楽が出来ませう。其時こそ本當の日本音楽が出来た時である。おもふに徳川時代に發達した三味

線——三絃樂の如きもさう云ふ工合であつたのでありませう。で日本の昔に於ても王朝に於て支那の音楽を盛に輸入した、印度樂高麗樂を輸入した、舞も輸入した、源氏物語を開いて見ると紅葉の賀の巻に、源氏の君が袖を翻へして青海波を舞つた事が書てある、是を當時の田舎者が見たならば妙に思つたに違ひない、若し關東あたりの百姓が都へ出て行つて、あの紅葉の賀に書いてあるやうな舞を見たならばさぞ可笑く思つたに相違ない、恰も先年鹿鳴館あたりでワルツや何かを踊つたのと同じとである、双方ともに少しも日本に關係ない妙な着物を着て踊つた兎に角美醜の差はありませうが、源氏の君が舞つたものも今の人がワルツを踊つたのもさう酷い違ひはない、然るに此外來の支那樂も日本になじむに隨ひ段々發達して琴や何かになりました、唯だ悲しい哉日本の古美術は國民全體の上に立てられた物でなく、即ち百姓であるとか平民であるとか商賣人であるとか云ふ者の音楽では無かつた、然るに徳川氏に至て平民にして巨萬の富を持つて居る者がある、敢て武士に劣らない所の者があると云ふやうに餘裕が出来て參りました、それ故に餘裕の出来た平民が自分に藝術を欲しくなつて芝居が出来た、芝生の上に坐つて

踊を観るやうになつた。茲に於て繪畫の界には浮世繪が出来た。昔の支那の繪でなくして日本の人が華美な色を観たい面白風景を観たいが劫じて、當時眼に觸れて居る人情風俗を寫した繪が出来ました。又當時の平民は昔の奇妙な支那の服を着てゐる人の音楽でなくして、日本人のやうな髷を結てる者の音楽が聴きたい。所が三味線が日本に渡つた。是に於て各々性情を述べ自分の欲する所を充したのであります。さればこそ三絃樂はあの位に發達をして今に至るまで民間に傳播して居ります。さう云ふ工合に多少國民の上に立てられた所の藝術でありますからあつた。云ふ樂は中々滅びない。是故に今後とても西洋音楽をやつてゐれば其中に國民全體に關係した音楽が出来るとありませう。近來日本音楽を排斥したり西洋音楽を排斥する所の論が世間に現はれ、又是に隨て妙な折衷案を出す者も見えます。から將來の爲に具へむとて近時の音楽論と云ふ題でお耳を汚しました。

樂 話

(明治三拾七年一月、帝國文學)

我邦に於ける音楽の將來に關して、これ迄多少の議論はあるが、論者の音楽に關

する智識經歷等より見て近頃最も注目すべき一説は、田中理學博士の『我邦音楽の發達に就て』といふ風俗改良會に於ての演説であらう。人の知る如く田中博士は素より音楽の耳を有し、久しく大陸に遊んで審に歐洲音楽の現状を知るのみならず、一種の新樂器を發明して、所謂世界の名譽を博せられた方であるから、這回の議論も局外者の漫言と異り、一々着實にして専門家の參考に資すべきものである。この説に就いて私は別に精しい批評を試みて見たいが、未だ考の熟せざる所もあり、研究を更に深く進めなくてはならぬ點もあるから、今はたゞ思ひついた一二の管見を述べやう。

抑も、我邦人の音楽と普通に呼ぶ時には、主として聲樂を先きに思ひだし、器樂を忘却する傾きがある。即ち一口に音楽といへば、『歌』といふ考が先づ腦裏に浮ぶやうである。然しながら今日の發達した音楽の狀態に於いては、音楽といふものは單に歌はれるものでなく、簡單にいへば、『鳴る』ものである。といふのが私の考だ。元來何といつても、今日の歐洲音楽は、現時の日本音楽より遙かに發達したものである。ことは、少しでも音楽の歴史を檢べた人の決して否定することの出来ない事實

である。かくいへば如何にも國民の自負心を傷けるやうであるが、一國民の發達進歩を念頭に置くものは、徒らに一種の Chauvinism を唱へるより、文明の大勢に隨つて、その潮流に乗り込むのが却つて得策であらう。恰も日本畫風の一部が、亞斯利亞、埃及の造形術に似てをる如く、日本音樂の一種は、古代の希臘音樂に類してをり、その後發達したる中世以降の音樂より見れば幼稚なる域に止まつて居ることは、日本音樂の將來を論ずる人が、必ず第一に考ふべきことであるまいか。然るを、世の論者が東西の音樂を殆ど同等にして類を異にするものと見做し、その二つを折衷し調和せよと勸めるのは、殆ど不可能の事業であり、又よし可能の事とするも望ましからぬ事である。又、上にいふ如く聲樂の思想が先入主となつて居るので、近世音樂の精髓なる器樂をさまざまに重んぜず、隨つて完全なる器樂を基として起つた歌劇の如きものを、俄かに相當の準備もなく、音樂者に創作せよと逼る論者のあるのは、私の密かに驚くところだ。この點について、田中博士の議論は、滔々たる世上の音樂論者よりも、愈かに勝れて居るやうに見受ける。

一體、私は我邦音樂界の急務として、なるべく早く實行したいと思ふ事業がある。

それは民謡樂の蒐集である。文明の普及と共に、山間僻地も自ら都會の俗惡なる諸分子を吸収して、醇朴なる氣風の消滅すると共に、古來より歌ひ傳へたる民謡も全然滅亡しさうであるから、今のうち早くこれを蒐めて保存することは、歴史家其他の人の急務であるが、私の目的は左様いふ考古上の事に止まらず、實は他日國民音樂を大成する時に、一種の尙ぶべき材料と成るであらうといふ考だ。文學の方面から見ても、俗謡を書き留めてこれを詩歌の材とするものは、極めて興味あり且つ有益なる事であるが、同時にその曲譜を作つて、永く吟詠することの出来るやうにし、又その變調を案出し、之れを器樂に活用するものは、音樂者がその思想を得る一方便であらう。左様いふ例は、歐羅巴の音樂史に極めて數多いことで、人の熟知する所であるが、日本にても三絃樂の妙所は、諸國の情趣多き俗謡より得來つたものが多い。確か河東節『編笠』の『白鷺が』の節は、初代が靈岸島で讃岐船の帆捲歌を聞いて讚嘆し、船頭に教を乞うて作曲した一種の Barcarolle である。すつと普通の例をとれば『越後獅子』でも『來るか〜』と濱へ出で見れば、邊が頗る雅致に富んで居るではないか。歐羅巴の音樂を平生研究して居る人が、露西亞の民謡を歌ひ、瑞西、チ、ロル

等の農民歌、獵夫歌を奏して居ながら、なせ眼前に横はるこの民謡蒐集といふ急務に氣が附かぬのであるか。これも私の密かに驚く所だ。

其上、私がこの醇朴なる民謡樂を重んずる所以は、更に一つある。苟くも國民の聲となるべき大音樂は、健全なる基礎の上に立たねばならぬ。それで、在來の日本音樂が柔弱なる宮庭の樂であつた。唐朝の文明に眩惑した王朝の精神が弄んだ樂で、いは、偏狹なる美術に過ぎない。是を以て今日の思想を發揮しやうといふのは、『懷風藻』の詩形を以て明治文學のそれとするやうなものだ。然らば、琴の音樂は何處である。是又國民の間に行はれた旅行リョウギョウを基としたものでなく、寧ろ雅樂等の擬外國樂より轉化したもので、作曲者は社會思想の本流を遠ざかつた廢人の輩、又これを弄ぶものは、人生の風波を知らざる深窓の少女に過ぎない。これを以て國民樂の一端とするのは、墮落したる中世以降の和歌を以て、我等の慰藉と仰がうとするのに近い。さて、次に來たるものは、徳川文明の産み出した三絃樂である。その以て富足利の世より謠曲の音樂はあるが、これは武人の専有したる藝術であつて、健の風

に富み又おのづから莊重の趣があつて、今も士人の間に浸み渡つた樂であるが、何分社會一部の聲に過ぎず。又その上、感情のある一部分を抑壓して、充分に思想を發揮しない傾きがあるので、我等はこれのみを以て満足することが出来ない。それで、日本音樂の過去を穿鑿して將來の策を立てやうとする者は、どうしても、田中博士の如く、徳川三絃樂に據らざるを得なくなる。殊に歐洲の樂に慣れた者は、三絃樂の拍節リズムの變化多く、節廻しの緩まやかな點に感服すること、恰も外人が浮世繪を見て、意外の趣味を感じ、又、少なからざる藝術上の工夫を會得するのと同じやうである。然し世人が、三絃樂を以て將來の音樂を定めたく思ふ時に、一の障礙とする所は、歌詞の猥雜といふ點である。猥雜といひ或は卑俗といふのは、人によつて大に見解を異にするもので、一部の人士は事少しにても戀愛に關すれば、その歌を以て他人の前に歌ふべからざるものと考へるやうである。例へば、今日までの音樂學校の如きは、その一例で、西樂の曲に日本語の歌を附して演奏する時、原曲が如何に熱烈なる戀愛を歌つたものであつても、歌詞は至極平凡無味なる思想を列ねるに過ぎない。事多年の間、千篇一律である。たゞ、茲に滑稽なのは、かゝる矛盾を行ふのみならず、私

とは意見が異なるが、トルストイ伯などに云はせれば、亂倫悖徳の讚美といふべきワグネルの樂を屢演奏して、何とも思はない事である。して見ると音楽學校は音楽より寧ろ歌詞を重んずる所であつて、研究者は其の研究の進むに随つて益學校の鎮壓せんとする危険に近づくものとなる譯だ。畢竟斯ういふ事の起るのは器樂よりも聲樂を重んじ、聲樂そのものに就きては、音楽よりむしろ何人にもわかり易き歌詞を氣にする通弊に基くので、又一方には、窮屈な道學風の偏見が未だ教育ありといふ人々の間に絶えないからである。それで左様いふ人の眼から見れば、三絃樂の歌詞は甚だ面白からぬ感を起すであらうが、吾々は一般の人程餘り音楽の歌詞といふものを重んじないし、又戀愛などの文字にはびくともしない。たゞ茲に考ふべきことは元來三絃樂は謠曲と異なり、教育あり見識ある上流士人の間に行はれずして、重に狹斜の地に養成發達された事である。此悲しむべき藝術の分裂は獨り音樂のみならず、繪畫に於ても文學に於ても見る所であつて、例へば土佐繪其他に對し浮世繪は、重に社會下層の極て偏したる部分に材料を採り、士人の漢文學、國文學に對し所謂戯作者の作つた小説の類は、動もすれば理想の低い人生觀のひねくれ

た社會の人心を代表してをる。夫故に三絃樂も亦所謂通といひ粹といふ消極な思想を表はして、一種幽婉な趣味はあるものの、歐洲樂の上乗なるものに顯はれたる如き堂々たる樂聲の或は神の讚美となり或は人間の心に起る大暴風の破裂を顯はし、又は世界の秘密を啓かんとするやうな偉觀は決して之に望むことができない。それで三絃樂と歐洲樂の上乗なるものとの差異は、分量の相違でなく性質の相違である。それも其の筈、彼れは一代の天才がその國民全體の性情に基き、その時代の最も勝れたる階級を代表して更らに數歩を進めたものであるのに、此れは多少民間に潛みたる音樂の思想を洩らしたとはいへ、極めてすねた、極めて偏よつた下層社會の一部を代表してその間の藝人が遊戯半分に作つた、悪るくいはい、一種の Decadent Art である。夫故に私は偏屈な考を以て三絃樂を非難するのでは無いが、他日の堂々たる大音樂を作る基礎としては、その餘りに拗れて片意地で普遍なものでないのを危ぶむのであるといふところ、私の尊敬する田中博士と多少意見を異にするので、三絃樂の如き妙に一方に發達して了つたものを國民音樂の基礎とするよりも、寧ろ其の根元に遡つて、民謠の醇朴なる曲を拾ひ集めて、例へば、我が

邦のケルト人種ともいふべきアイヌの旅行ユキウツかもしれぬ追分節の如きものを參考してすなほに普遍なる傾向を將來の音樂に注入したいので、年來頻りと私は民謡樂蒐集を主張するのである。

歌劇オペラを如何にして我國に生長せしむべきか、といふ事に就き種々の考はあれど、それは後日に譲りてたい。茲にはその事業の中々容易でないといふ事を斷つて置きたい。森博士が『兩浦島』の劇を作つて勇氣ある俳優に演せしめた時に、平日は詩で書いてある沙翁劇韻を踐んである佛蘭西劇を引證して、演劇改良を極論する人達も、森博士が眞面目に美しき詞を以て高い理想を歌ひ、我が劇界に新天地を開かんとした言語の劇を靜かに味はふことが出來ず、直にこれを歌劇オペラにて演すべしなどい、出來ない相談を試みた事があつたが、歌劇の一曲といふものは、左様造作もなく出來るものでなし、又出來たとした所がグルックやモツァルトの Libretto を書いた人の如く、鷗外氏をして仕舞ふことが御氣の毒であることに氣が附かない言である。これといふのも歌劇は音樂を知らない人が見ても多少の興味は起るから、俄かに西洋へ行つて、歌劇堂の壯觀に打たれた人の言ひ出した説に、歌劇構造の何たる

をも知らない雑誌記者などの、雷同したに過ぎない。苟も歌劇を論ずるなら、せめて田中博士が『羽衣』に就て工夫された考案ほどの用意を以て論じられたいものである。『羽衣』といへば今想ひ出したが、若し將來に於て我國に純正器樂が發達しこれを翫味する聴衆が出來るやうになつたら、我國の歌劇は、能樂が傳へた形式を取つて發達するであらう、又發達させるがよい。歐羅巴の歌劇は、もと音樂家及び古典學者達が、希臘の劇を復活して見たいといふ考で始めたのから發達したのであるが、希臘の劇と日本の能樂とは殆ど軌を一にするといつても差支のないのは、頗る注目すべき點ではないか。今日の大志ある音樂家は、この所奮勵一番能樂に基づいて更に活動した情熱のある新藝術を案出すべきである。但しこゝに忘るべからざる事が一つあるのは外でもない。文藝復興時代に希臘劇を復活しやうとし、一變して歐洲歌劇の源を發した當時の人は、今の日本音樂より復かに勝つた器樂の趣味と智識とを持つて居たことである。左れば、日本將來の音樂に就いて畫策する人は、是非ともこの器樂を獎勵して、發達せしめねばならぬ。繰り返していふが、音樂は歌ふものばかりでない鳴らすものだ。

戦後の思想界

(明治三拾八年九月八日「時代思潮」)

戦後吾邦に於て諸般の事業が盛大に趨くことは誰しも豫言する所であります。文學、宗教、哲學等の方面に於ても、以前に立ち優つた盛況は必ず起るだらう。即ち文學は以前よりも一層眞面目になり、宗教に對する考も、哲學の思想も漸くに緻密になるだらうとは、誰も思ふ所でありますが、又一方に於ては、總ての思想界に於て大なる混亂動搖が生じるだらうとも考へられます。と云ふのは、今日まで日本は實物の文明を輸入し、發展させることにのみ注意して、精神上の事業に向て、一般の人は考を用ゐることが少なかつた。其爲に思想界に屬する大問題には未だ解決を経ないものが澤山ある。今日迄の所では成るべく大問題を避けて、目前に横はる實際問題をのみ研究し、各人の目的とし、事業とする所の或る一つのこと、が直接に、即時に、社會に向て如何なる利益を來すであらうか、幸福を與へるだらうかと云ふことにやうとは試みなかつたのであります。

然るに明治の新教育を受けて、世界の思潮に觸れて來た方面の人の間には、此十數年來、段々さう云ふ大問題に就て確乎たる解決を望む聲が盛になつて來て、文藝其他の方面には随分世の中からは、危険と云はれ、異端邪説の如く思はれて居る意見を、敢て發表する勇氣を有つた人もあります。今回此戦争に國民の壯丁は、死生の間に身を處するやうになつた。即ち鐵火の洗禮を受けたのであります。故に後日凱旋の曉、此等勇敢なる將士の間には、必ず死生の間に處する道、或は人間の重大難にあつたときの覺悟等に就て一種の考を持つた人が多くなるに違ひない。それが戦後、社會に立つて色々のことを考へ、或は色々のことを行ふ人になる時、今日まで、彌縫塗抹して置た考へ様では、中々眞の安心立命を得られなくなる。扱てこそ宗教上の信仰に就ての疑惑、且つ哲學、宗教の問題を善い意味でいふ素人も研究するやうになります。今まで自分は實際家である、軍人である、政治家であると云ふ簡單なる前提の下に安んじて、人間の重大問題を考へなかつた人も、多少は此處に注意するやうに是からならうと思ふ。

是に就て戦争最中から、随分所謂學者間には議論があるので、多くの人の口には

る所に據れば、武士道と云ふものは日本道徳の基礎である。何事も此武士道で、左右し嚮導して行かれやう、又行かうと云ふ者があります。併ながら此武士道の聲は自ら戦争に關係して、前に言ふ如き死生の間に往來した人の口から出るのは少く、寧ろ國內に留守をして、書齋の中で靜に冷かに考へた學者の口から出て居ります。是が第一此武士道と云ふ聲に對して容易に安心を懷かれない理由の一であります。

實際我忠勇なる將士は鎌倉足利あたりの思想を以て今日二十世紀の戦争に従事して居るのであるか、或は西洋の思想も今日非常に日本に染込んで來たのであるから、一種の新思想を以て戦争に従事して居るのであるか、是は十分調べて見る價值がある。一體其武士道を呼ばる人の説を聞いたばかりでは其に就いて明なる觀念を得ることは出来ない、或は單に日本魂と云ひ、或は忠孝と云ひ、之を具體的に現はせば、耻辱を受けたときは割腹すると云ふやうな考のやうであります。が、さう云ふ思想は或る特別なる社會に於て初めて生ずべきもので、今日のやうな社會の平時に應用して、將來の道徳を維持する事が出来るものであらうか、或は若し今日

武士道と云ふものが日本にあるならば、それは一つの惰力であつて、今後盛に趨く所の新理想とは思はれないといふ反對論を、どこまで破る事が出来やうか、徳川時代の教育を受けた人が、今日もまだ随分日本の事業に關係して居る。故に其人々の生きて居る間だけは、或は其惰力が續くかも知れない、而して數年にして老人がなくなつて仕舞へば、がらりと變つて意外な思想が社會に汎濫することを認めるやうになるかも知れない、此時宗教家或は教育者が人爲の力を以て、如何に武士道の保存成長を圖つても、今日の社會組織より生じた大勢に反抗することであるから、到底永遠の勝利はあるまいと思ふ。一體今日武士と云ふ階級はないのである、一朝事あるときには國民皆兵である、又社會は始終今日の戦争状態にあるものではないので、平和のときには又平和なる生存競争が行はれる、此平和の生存競争に當つて、昔の武士道を振廻はしても到底仕様がなくなつて、其競争には敗北者となるのである。此武士道と云ふ一種の曖昧なる理想が平時に於て如何に培養され得べきかに就て詳しく論じた學者の説を聞きませんが、恐くは誰も其策はないのであらう、抑々近世文明の大勢と云ふものは民主の制度である、即ち人は其腦力と體力と

に依つて勉強し奮勵すれば、或る程度まではどこまでも自分の身を進歩させ、位置を高めることが出来る筈になつて居る。一國の政治でも之を動かす人は一個人でなくして、多數の人の決議を得た結果となつて、常に人民が大事業に參與するやうになつて居る。此事は敢て十九世紀、二十世紀の人民の特別に有つて居る所の幸福とは言へない、或る點から言へば不幸かも知れないのである。何となれば人間と云ふものは十八世紀の學者の言ふ如く、決して平等なものではない。體力には強弱あり、腦力には賢愚あつて、大多數は少くとも今日の場合に於て、教育なき、經驗なき集合體であります。世界の大勢は此集合體に向つて一種の權力を授けるやうになつたから、世の中の事が丸で古代と趣を異にして來た。其利益も種々ありませうが、弊害の方を言へば、天才を抑壓し、俊傑を排斥するやうな傾向があります。又一方に於ては古の道徳理想を打破して何事も成功を善惡の標準とするやうになつて來た。口に人道を唱へ、道徳を唱へても、詰る所其社會の繁榮と國家の隆盛とが目的であつて、實は道徳其物に確乎たる信念を置いて働いて居るのではない。世界全體から論じて、随分今の世は古道徳の見地よりしては嘆はしいやうであります。ついで

年前あたりまでは、世界が愈々惡に趨くやうな傾きがあつたのである。我々が深く記憶して居る遼東還付の當時、露西亞が世界に覇を稱して、天下意の如くならざるはなしと云ふやうな時代に於ては、列國間の關係、又は帝國主義、侵略主義等が、古道徳論者に如何に映じたか、舊式の意味を以てすれば善が必ず負けて惡が必ず榮へるやうな世が來た。所謂反基督の世が近づいて、澆季の天下となつたやうに思はれた。英吉利の文學だけに就いて言ひましても、キップリング *Kipling* と云ふ詩人が名聲を博して、帝國主義、アングロサクソン *Anglo-Saxon* の膨脹、英帝國の繁榮を理想とし、他の國の幸福などは眼中に置かない考を歌つたのであります。此詩人の作であります。『白人の重荷』 *White Man's Burden* と云ふ歌が出ました。白人は優等人種である。一の權利がある。従つて之れに對する責任と負擔とがあつて、甚だ困難なる地位に立つて居る人種であると云ふのは、態々頼まれもしないのに、黑人、其他の劣等人種を征服して道を作り、橋梁を架け、鐵道を敷いて、剩へ其受ける所の名は侵略的であるとか、或は蠻民を壓服するとか云ふやうな汚名である。善いことをして惡く言はるゝ馬鹿々々しい白人であると云ふやうな意であります。其結論に云ふには併

ながら此負擔と云ふものは神の命する所であつて、白人はどうしても免れることが出来ない。故にどしどし軍備を整へ、貿易を盛にして、劣等人種を征服するが宜しいと云つて居る。之に對して或る人は『黒人の重荷』Black Man's Burden と云ふ歌を作つて答へたことがあります。理窟から言へばキェプリングの歌よりも『黒人の重荷』の方が道徳に適して居るやうであります。何にしても當時の形勢から言つて、到底さう云ふ考は社會から相手にされなかつた。そこで三國干渉あり、トランスヴァール Transvaal の戦争があり、フィリピン Philippine の征服があつたやうな譯であります。然るに此大勢に反動として起つた思潮は隠然歐羅巴人の間に於て起つて來た。文學に於て云はむに、例へば白耳義人で、一種の哲學者であるマアテルリンク Maeterlinck の如きは『貧者寶』Le Trésor des Humbles 『智慧及運命』La Sagesse et la Destinée と云ふ書を作つて、道心日々に微かになつて行く所の世に警戒の聲を與へた。實際の方面から言へば、今回の日露戦争に依て、さしもの強國と云はれた露國が人口幅員等から言へば、比較にならぬ程の小さい日本の爲に敗北を受け、正理を以て戦つて居る兵が、不正の兵に打勝つたと云ふ事實が起つて、數年前の形勢を一變したやうな勢

ひがあります。従つて列國間の外交も正直を専らとし、奸譎詐謀を行はないやうになる傾向を生じたのは、今回米國が人道の爲めに媾和の事を取次いだやうな事實にも微かながら現はれて居る。是に至つて道徳を重じ、正義を主とする所の人は、ひとつ一息ついた位のことである。併ながら此二者の争は中々此位のことでは解決が出来ないのであつて、所謂人道主義等と征服主義との争ひが一層複雑になり、一層解決しにくくなるだらうとは今から見え透いて居る所であります。

佛蘭西大革命の結果として、世界の歴史に二大思潮が出來た。其一つは世界主義であつて、他の一つは國家主義である。世界主義、國家主義の二つは、兩方とも相當の理由があつて、俄にどれが正しい、どれが悪いと云ふことは言へません。世界主義を揚げて云へば、今の所では世界主義は人道主義を代表し、國家主義は動もすれば此征略主義を代表することになつて居る。又國家主義の肩を持って云へば、世界主義は動もすると今日の社會の組織を紊亂し、一時人心を動搖させる弊害があるのである。國家主義は之に反して愛國心を養ひ、國家の獨立を鞏固にすると云ふやうな利もある。二十世紀の責任は此二大主義を如何に調和すべきかにあるのであらう。一

見すれば氷炭相容れることが出来ないやうな主義であるが、又或る意味よりすれば、大革命と云ふ母から生れた兄弟であつて、必ずしも永久争はなくとも宜しい、真正の國家主義は世界主義の趨く所と自ら一致し又真正の世界主義は國家主義の上に立たなければならぬやうになるのであります。勿論理窟はさうであるが、其調和の方法又は之を調和させる推論の成行に就ては多の人が説を異にする所があるので、是までは成るべく、斯う云ふ問題を出さないやうにして避けて居つたのであります。

併し前申すが如く是から此謎語を正面から見るとやうな眞面目の人が殖へて來たに就いて、どうにか是うにか此問題を解決しなければ安じなくなる。それ故に戦後は一時此種の問題に就て心ある人は大に苦心し、従つて煩悶等が生ずるであらうと思はれる。扱て之を解決する人は、誰であるかと云ふに、多少の權威を以て之が解決を試むる人は、どうしても學者である。而して今の日本の學者と云ふものは、其大多數はどう云ふ意見を懐いて居るか、思想上どう云ふ系統に屬して居るか、云ふに、中年以上の學者は概ね十九世紀前年の英國哲學の説を奉じて居る。又獨逸の

學を専らにする人は、科學を土臺とした一種の人生觀、進化論に基いた哲學等を信じて居る。英國功利派の學者の言ふ所に據れば、世の中は放任して置いて差支ない。慙じつか、人爲の方法を以て社會を改良すると、とんでもない間違があると云ふことになつて居るので、之を經濟上に應用しますと所謂 *Laissez faire* の説に基いて、生存競争の激しき渦の中に社會の人を投じて何とも思はないやうな説を生じます。尤も此説は英國に於て曾て試みられて非常な弊害を生じて、歐羅巴に於ては斯う云ふ類の經濟學或は廣く言へば哲學に反對する運動が盛んになつたのであります。併ながら日本の中年以上の學者は其奉ずる所の哲學者は *スペンサー* *Spencer* が主である。其他 *ミル* *Mills* などの説を早く習込んだのが、先入主となつて居る傾向がある。中々此考は容易なことでは頭から取れないのでありませう。曾て我日本でもかの *ドレイパー* *Draper* の『宗教科學衝突史』 *History of the Conflict between Religion and Science* と云ふ本が愛讀せられたことがあります。私の知つて居る古い學者の中には未だ之を愛讀して、若い人に勧める人もある。斯う云ふ人の目から見れば、宗教とか藝術とか云ふものは常に或る制限の下に居なければならぬものと

考へられるので、文學の如きは世道人心を益するものに限り、宗教の如きは愚夫愚婦を慰め之に安心を與へる方便としか思はれない。是を以て世界の眞理を説明すると云ふやうなことは夢にだも考及ばないのであります。早く言へば此宇宙は科學を以て十分説明が出来るると云ふ簡單な世界觀を以て満足して居る。

それから獨逸の學問を修めて、科學や進化論を信じて居る人は此功利派の人よりは、一層冷酷なる人生觀を有つて居つて、何事も唯後來の進化と云ふことの爲に、現時のことを犠牲にして願みない論者である。併ながら人間と云ふものは矛盾の動物であつて、一方に於ては冷酷なる科學説を信ずるかと思ふと、多方に於ては自分の幼少の中から受け入れた感化、即ち舊道德の惰力に依つて之を調和して居る。若し科學の命ずる所に従へば今の所謂道德國家、家庭など云ふものは、絶對に價値を有つて居るものではないのである。それ故に道德は法律に觸れない限り、或は自分の感情を害さない限りに於て、如何に之を破つても差支ないものである。國家の存在とか、民族の意味と云ふやうなことに就ては、社會を一つの有機體と見て、之が保存と、之が發達を圖ると云ふ點だけを見て居る傾向がある。さう云ふ論者が前に申す如

き大問題の解決するに至るのであるから、到底眞面目な人には満足は出來ないのである。

此『時代思潮』は、重に若い方の學者の説を代表するのであつて、此一二年の間多少世の中の潮流に逆つて勇氣ある言論を試みられたものと思ひます。殊に此戦時になつて動もすれば戦争の爲に戦争することを謳歌する人もあるのに反對して、戦争其物を人生の恨事とし、人心を永遠の平和に導かうと試みられたのは、尙に感服して居るのである。想ふに、今出征して居る將士も決して殺戮を事とし、血を流すことが道德上の美事であると云ふやうな考で戦つて居る人は少なからう。私は先日某地に於て戦死した將校の日記を読みまして、大に得る所があつた。和漢の學を深く研究した譯でもなく、又西洋の思潮に觸れて居る人でもない其將校が、どう云考を以て此戦争に臨んで居るかと思ふことが解つた。是に由つて此純潔なる、淡白なる我軍人の胸中を察すると、世間の好戦論者の言ふ如きものではないと云ふことがはつきりする。又徒に戦を好むと云ふやうな考では到底今回の如き連戦連勝の好結果を得なかつたのでありませう。軍人にしてさうである、不斷から軍事に縁

の遠い、さうして眞面目な人は此戦争に就いて一種の深い感觸を得て居るに違ひない。さう云ふ人が學者の冷淡なる説、又卑怯なる言論に於て満足し得られませうか、必ず之に反抗し、之を打破して、さうして其中から一の完全なる解決を求めて行かうと云ふ人が殖へるに違ひない。是が此戦後思想界に人心の動搖すると云ふ點であります。

文學に志す人の中にもイブセン Ibsen の如き社會觀を有つて居る人や、トルストイ Tolstoj のやうな世界觀を懷いて居る人や、又マアテラルリンクの如き穩健なやうで非常に大膽な不可思議論を懷いて居る人もある。而して此等の思想が日本新時代の青年にどう響くかと云ふことは今後の注意すべき事柄であります。それで青年を指導して行く可き先達が單に武士道を復活させやうとしても、到底成立まいと思ふ。私の考へるになせ世人は目前に横はつた大問題に注目しないのである。其大問題と云ふのは日本の新社會に於ける生存競争の事實である。想ふに日本今日の社會と佛蘭西革命後に於ける佛國の狀態と比較すると、佛蘭西大革命は佛國に於ける階級を打破して一時社會の動搖を來したので、維新の革命とは國情が違ふか

ら勿論同日の論でない。併し階級を打破し、舊慣を破壊したことに就ては同一である。而して其後に於ける生存競争の事に就ては兩方共殆ど其揆を一にして居る。佛蘭西の小説家にアンリ・ベイル Henri Beyle と云ふ人が居りました。之がスタンダール Stendhal と云ふ號を以て『赤と黒』 Rouge et Noir と云ふ小説を作りました。其人は拿破崙崇拜家であつて、若いときに皇帝の軍に投じて、露西亞征伐に従軍した士官である。莫斯科の焼打を見、或は悲惨なる經驗を嘗めて大軍の殘餘と共に佛蘭西に歸つて來た。其後に伊太利亞に住で暇を得たから、それで小説に力を用ひて、許多の著書を作つたのであります。然るに當時の人の趣味には全く適しない。著書は頗る賣れなかつたさうであります。それで死ぬときに、今後三十年にして我は佛蘭西の有名な作者となるであらうと言つた。然るに丁度其豫言の通りに三十年の後、此人の本が廣く佛蘭西の讀者に讀まれるに至り、十九世紀の大家と仰がれて居る。此『赤と黒』と云ふ長篇の小説は佛蘭西革命以後那翁帝政の後に於ける社會の狀態を詳に書いた物で、主人公をジュリヤン・ソレル Julien Sorel と云ひ、身分は低い、才智がある爲漸次と立身して終に才の爲め身を誤まる話である。之を精讀すると實に心を寒

からしめるやうな事が多い。今日の評家は之に依て現社會の事情を照し戰慄すべき事があると云つて居る。ポール・ブルジェ Paul Bourget であつたか知らん、かう言つて居る。社會と云ふものは實に奇態なもので、子供の學校に居る頃には、父兄や先生が大層獎勵して呉れて、お前はえらくなれ、一の人となれと云ふ風に勸めて呉れます、併ながらそれが大學でも出て社會に獨り立にならうとすると、是まで自分を獎勵して呉れた長者或は社會が頻りと頭を押へる、社會全體が之に迫害を加へる。學校に居た時分には一躍してえらい人になると思つた所か、中々爲れない、後數年間に生存競争と云ふことが激しくなつて、餘程都合の好い境遇に居る者でなければ頭が出せないのであります。斯う云ふ場合に通例の人はどうするか、大部分は諦めて社會の水平線以下に排斥されるか、又智識の優れた人で學問或は藝術に興味のある人は社會實物上の利益を棄て、清貧を樂しむ、所謂夢を見て居るやうな境遇に安じます。併ながらさう云ふ考もなく、才智優れ功名心の強い人、或は單に不徳であつたり、或は意思の盛んな人は如何にしても此の迫害を破つて頭を出さうと

試みる。このスタンダールの小説にある主人公ジュリアン・ソレルの如きは此後の方に屬して居る人間であつて、極めて強健なる意志を以て現代社會の迫害を免れ、種種の手段を回らして、人情道徳は之を蹂躪して着々自家の位置を進めて行くことを圖りました。終に或る事情の下に罪を犯した爲に處刑されるといふので小説は畢つて居りますが、此小説が今の人の胸にひしと應へるのは實に能く今日の生存競争の激甚なる社會の状態を寫して居るからであらうと考へます。

日本の現社會も段々さう云ふやうな傾向になつて來るので教育ある無産者が驚くべき速力を以て増加して行く。是がどう云ふ活動を十數年先きに試みるかと云ふことに就ては社會のことに意を用ゐる者は深く考へなくてはならぬことである。維新前の舊道徳で以て此新事實を壓することが出來やうか、到底それは出來ないのである。何か活氣ある雄大の新思想を傍らから注入して『成功は總ての惡徳を合宜にす』と云ふやうな思想を打破するか、何かしなければ非常な動亂を社會に來すだらうと今から心配になります。戦後に於て著しき日本の發展があればある程此争は激しくなるので、是は單に貧富の關係、財産の分配ばかりの問題でない、廣

く精神界に涉り民族の消長に關するやうなことでありますから、學者は歩を揃へて此研究に當らなければならぬと思ひます。之を要するに大にしては世界主義國家主義の表面に現はれた矛盾衝突を如何に調和すべきか、小にしては即ち日本一國に限つては此激甚なる生存競争より起る道徳上の危機を如何にして凌ぐべきか、是が戦後の思想界に於ける大問題であります。

戦後の文壇

(明治三十八年十月『新小説』)

連戦連捷の勢威を享けた戦後の日本が、諸般の事物に亘つて大發展を遂げるであらうとは、誰あつて疑を挿むものもあらず、文學も人心活動の一つであるから、齊しく今回の大事件の爲に、影響を被つて、今後著るしい變化を見るに至らう。然し戦後一二年を出でずして、俄に文藝の隆盛を見、一般公衆の趣味は一大進境が現はれやうとは私に考へられぬ。

戦争の勝利は、必らず直に大文學の勃興を來すものだと斷言する人もあるが、冷

靜の見を以て古來の文藝史を通覽すると、何時も、さうと定まつたものでも無く思はれる。一體類推を以て、何にでも論斷を付けるのは、淺薄な西洋の新聞記者たちの癖で、希臘人は波斯の大軍を撃破した。それ故、直に希臘大文學の勃興があつた。無敵艦隊を全滅したエリザベス Elizabeth 朝の英國には、戯曲其他文學の隆盛が踵いて起つた。斯るが故に、今日の日本にも、文藝の盛期が近づいたものと速斷する。希臘や波斯の戦争は大昔の事で、到底今日の事情に當筈らないから論外であるが、エリザベス朝の英國と雖、今日の英國とは、まるで、社會人心の様子、或は宇内の形勢が相異して居るので、まして、吾日本の今日は、同一の標準を以て論すべきものではない。戦争と文藝との關係を考究するのには、上記の二例は、勿論著るしい好材料ではあるが、又一方には之と多少趣を異にした史料の在るのを忘れては、正當の判斷を下されぬ。即ち千八百七十年七十一一年普佛戦争に由つて、戦勝國たりし獨逸に、どういふ目覺しい文藝の發達が、直にあつたか。ゲエテ、シルレル時代の隆盛期と比肩す可き時代が現出したか、どうであつたか。獨逸も實はやうやく近來に至て、歐洲文壇の視聽を助かずやうな文學者と出したが、それは普佛戦争時の思想と直接に關係無いも

のではあるまいか。普佛戦争の結果に就て、かのニイチエは何と言つたか。獨逸の國情と吾邦の今日とは相異した點が頗る多いから、此例素より研究上の一材料、事實に過ぎない。然し世人の云ふ如く二千數百年前の波斯戦争、三百有餘年前の無敵艦隊全滅の史實が常に戦後文壇豫想の材料となり得るならば、少くとも同等の重みを以て、僅々三十年前の普佛戦争、又尙ほ近年南阿戦争の事實を参考しても宜からう。而して、眞に吾文壇前途の豫想を定めるには、前後特別の理由を求めて、日本は日本だけの事情から、眞正の判断を下す可きは言を俟たぬ。

全體、今日のやうな複雑の社會に就て、よしや、僅々數年後の事にしろ、豫想を發表する事は、少からず、困難なものである。事に依つたら、數十年、數百年後の變化より、數年後の事を預言する方が、直ぐに適中したか、しないか、定まるから、尙ほ斷言しにくいかも知れぬ。まづ早い話が、今回戦争開始の時に當て一時盛に唱道され、つた所謂戦争文學要求の聲はどうしたのである。論者の云ふには、斯る國家多事の日に際して、日本の文學者は何を爲て居る。やれ理想の煩悶の、戀愛や風景や人情の描寫に憂身を獲してゐる法はあるまい。何故、西洋詩人のやうにしないのだ。獨逸國難

の際には、ケルチル Körner が在つた、アルント Arndt も居た、英國にはホオヘンリンデン Hohenlinden の詩や何かで馴染のカメル Campbell 等が居る、佛蘭西大革命は、馬耳塞歌一曲に成り、遠くは希臘のテュルタイオス Tyrtaios の詩或は北歐の何とか云ふ覺えにくい歌も、いづれ軍歌だ。近代の小説には、トルストイに、『戦争及平和』といふ大作が在るでは無いかと、威勢の宜い議論が行はれたが、どうしたものか、所謂戦争文學は、質に於てどころか、量に於ても見るに足るもの無く、此大聲疾呼も、何時の間にやら、消滅した。抑も此戦争文學の意義が判然しないので、單に士氣を鼓舞する軍歌の積か、延て國民全體の胸奥に響くやうな歌謠なのか、又、戦闘の勇氣に勢を付けるやうにと、一種の傾向を含ませた小説といふのであるか、多分さうなのであらう。然し、トルストイの小説を例に引くやうでは、老伯の非戦論を加味して、戦争の悲惨を浴く世人に示めさうといふ文學なのか、眞逆さうではなからう。戦争文學の要求は既に過去に屬したことで、今更既往を喋々したくはないが、一時戦争を歌はない文學者を指して、全然文學上の責任を怠る者の如くに云つた論者に對し、且つは、戦後文壇に向て、餘り過大なる發展を預望する人に對し、聊か参考材料を供したばか

りである。畢竟するに、戦争と文藝との関係、戦争に對する思想の變遷等を深く考へないと、徒らに數千年前の例に據つて、類推して、數年の後、大きに當が外づれたのに驚くであらう。

戦争と文藝との関係は、今、戦後文壇の趨勢といふ題に限られて居て、詳論することが出来ないが、一通りの研究法といふのは、世界文學の古今を通覽して、戦争と之に對する社會の意識との関係を討究し、例へば、蕃族の戦争に關する歌、亞刺比亞人、古代希伯來人の軍歌と希臘人羅馬人が戦争を歌つた詩とを比較し、又近世歐羅巴人の軍歌等に、古今どのくらゐの相異があるかを調査し、支那文學に現はれた戦争に關する詩を精察するもよし、又、一口に武士道とか、大和魂とか言ふが、記紀萬葉に在る軍歌や、後世の軍記物や、武家時代の戦争に關する思想、或は今日の日本人が實際如何なる思想を以て戦場に莅むで居るかを一々精しく考へて見て、始めて精確な斷案を下し得る事と思ふ。少し洒落のやうであるが、文學の始めは、三つのWにあるともいへる。即ち war, woman, wine、戦と女と酒とである。而して之と同時に、此三者の上には、一つの大きなW即ち Wisdom、智慧が、すつと高い處から統轄指導して居る。此

智慧は、宗教、哲學、人道、道德、理想、眞、善、美、あらゆる人類の高尙なる經驗、翹望、即ち他生物と一種異なる萬物の靈、特有の點を含で居るもので、所謂大詩人ホメエロス、ダンテ、沙翁、彌兒敦、ゲーテ等は此大なるWの分子と深く汎く關係して居るものである。それで此智慧は他の小なる三Wに勿論關係はあるので、之を淨化し、進化させてゆく。尤も『酒』と言ふのは、唯玉山將に崩れむとする態をいふのではない。人生の無害なる歡樂、宴遊、社交等を含むので、『女』と言ふには、種々の戀愛や、或は女あつて始めて成立する家族の情愛までも含ませたい。而して『戦』は、最も簡短に言はゞ、つまり格闘である。然し此格闘も時代の進歩——頗る緩漫なる進歩ではあるが、又人種、國民に由て相異はあるが——とにかく、其進化に應じて、民心の之に對する態度に著るしい變遷がある。日本人は古來非常に精神上、又實物上に清潔を好む人種と見えて、死を恐れぬ勇敢の氣象はありながら、残忍の蠻行を戦争中に行ふ事は、歐洲人や、今日の蕃族に比較すると皆無である。歐洲人中、今の露西亞人の祖である所謂スラヴ人や、人種學者の定めた短頭顱の地中海人種、即ち伊太利亞人、西班牙人の基礎などは、随分近世史上に於ても残忍な行を敢てしたが、昔未開の時は、戰場などで、日本人に

は想像も付かない思切つた亂暴非道を働いた。それ故他の歐洲諸國に於ても、中世期の初に戦争を歌つた詩などには、今日の人が殘忍悲惨と思ふ事實を平氣で、面白さうに歌つてゐる。然るに段々世の進歩につれて、近世の詩人は其歌はうとする戦争に正當の理由を求め、將軍の偉功を稱揚する時は、必らず正義の師に將として、文明の進歩、後來平和の端緒を開く救世の人として讚美する。即ち野蠻時代の詩に現はれた戦争の爲に戦争を爲るといふ思想や、殺戮即ち美といふ感情は漸々薄らいで來て、戦争といふものは、悲惨は即ち悲惨だけれども、今日の人類進化の経路に於て、萬已むを得ざる一手段である、場合に依つては、漫に平和を欲して兵を動かすことに躊躇すれば、却て後に戦争其物より更に悲惨の結果を招きはしないかといふ考を人間が持て來た。此點に就ては、近世歐羅巴よりも舊國だけに東洋諸邦の方が進歩した思想を夙に抱いて居た。歐洲中世の國王諸侯たちは、秋高く馬肥ゆとか、春來り雪消えたりとか言つて、宛も遊獵にでも出るやうに、戦争をしたものであつたが、近世に至ては、プロッホ Bloch の所謂軍器の精巧、經濟情態、政治情態が、戦争を困難ならしめればかりで無く、以前のやうに無名の師、欲望の戦争が少くなつたのは、戦争

の事實と道徳上意識との間に於ける一大矛盾が一般に明になつて來た爲であらう。此説は今日の文明世界を通じ、誰も首肯する穩和な意見なので、殺戮欲望のみを唯一の目的とする戦争を以て、理論上、完全無缺なる道徳界の一大美事と是認するものは、西洋の學者にも、日本の學者にも無からう。理論上、戦争を合宜とするものは、自己より言へば國家自衛、人類より見れば、進化途上の一方便と見做す説である。今回の日露戦争は、露國官僚政治の暴横なる政策が、東洋禍亂の本となつたのを、こちらが防止し膺懲したので、東洋平和の爲めに、日本國民は戦つて居るのである。即ち邦家の獨立自營といふ、戦争を合宜ならしむる理由の中、最も高尚なる道に基いて兵を動かしたのであるから、斯の如く舉國一致し、一個人の信念も安心立命の悟を得て、全力を傾注する事が出來て居る。それは、人間といふものが理性にのみ由て働くもので無い以上、戦争中、殊に亂軍酣戰の際には、種々の感情、劃策等も生じて來やうが、何しろ、東洋永遠の平和といふ大目的が根本である。自分は、今回の戦争に出征して、生死の間を往來した忠勇なる將士の心事、感慨等を親しく談話で聞き、又日記類等で知らうと心掛けて居るが、近頃ある日記を見て、非常に感動した。それは昨年

某地で非凡なる勇戦の後、光榮ある戦死を遂げられた何某大尉の戦争中の日誌であるが、同氏の自叙傳めいた随感録に據れば、氏は深く和漢の書を讀まれたのでも無く、又、東西の宗教、哲學、文藝に就て研究された様子も無い、實に玲瓏として鏡の如く、生活も精神も極めて質樸なる日本軍人の好標本で、出征に際し、戦闘に莅むで、種の感想を日誌に止められたものは、今日の純日本思想である。會々西洋の格言、金言等を挿むのであるのを見れば、戦史或は西洋の軍人傳に就て記憶されたもので、此日誌は、冥々の間、世界の文明思想が如何に純日本思想と融化して居るかを示す貴重なる『ヒウマン、ドキュメント』である。忠勇なる一軍人の心中、寸毫の粉飾虚偽無き、幕のあなたよりの消息を得て、わが軍の連戦連捷に一大理由ある事が認められ、今此鐵火の洗禮が、日本國民に如何なる感動を與へて居るか、ほゞ解かつた。

戦後の文壇は斯る眞面目の生活を閱歷した人を、少くとも聴衆の一部に持つのである。中には、凱旋の後自から文筆に關はる人もあるかも知れぬ、又自から劍を提げて、出征しなかつても、此目前の大事變に依つて、多少思想を動かされて居る人もある。故に、今後文壇の中堅たる可き文學の特色は、眞面目といふ事が、第一條件であ

らう。一體此日露戦争は、大日本勃興の序幕であつて、平和克復の後、吾國民の責任は益々加はり、努力は愈々必要になつて來て、決して悠長な所謂天下泰平の時世とはならぬ。凱旋式が濟むと、吾等は、遊で居て金が儲かり、無爲にして、國家が隆盛になると思へば、大變な心得違だ。これからは、愈々世界文明の中流に棹して、平和の競争を試み、國民の特色を發揮して、全人類の進化に貢獻するのである。それ故、識見ある人は、是迄瀾縫塗抹してあつた種々の胡魔化を信じて安心する事が出来なくなつて、眞面目の解釋を人生に就て試みるやうにならうし、又一方には、此思想界の變動と共に、現今の社會組織より起る實際の考究問題も生ずるし、それやこれやが眞面目の人々の心に寫れば、茲に始めて生氣ある文藝が成立しやうと思ふ。戦後文壇の靡ち得べき利は、人生に對する深刻なる考究、眞摯なる態度である。

さりながら、社會は眞面目の人ばかりで成立つて居ない。人生に就て深く考へる人は、何れの世でも實に少數で、他は皆其日々々の風潮に左右せられ、意氣或は亢奮し、或は銷沈するので、戦後暫時の間は、唯何が無しに企業熱の生ずるのと同じく、文壇にも、唯矢鱈に空虚な大風呂敷を廣げたり、公衆を驚るやうな平俗の文章が流行

することであらう。出版業者は増加し、購讀者も増加し、所謂新文豪が輩出しやうかの美を樂まうとする者には、幾分か迷惑かも知れぬ。全體、平俗文學が段々多くならめ、愈々時を得て、之を喜ぶ讀者、甘じて之を産出する作者が殖える。十數年前の吾文壇は、讀者も少なし、作家も少なし、實社會の相を捕捉する點が幾分か缺けて居たやうの感はあつたが、其代り靜に人生を考察する風もあり、かたゞ藝術上の理想は高く、良心は固かつた。今日文壇二三の大家と仰がれて居る人々は此間に奮勵して、現今の地位を占められた。然るに後進者のうちには、同じ努力をせず、一躍名人の伍に列らうとしても出來ないし、そちこちして居るうち、世間を見廻はすと、趣味低級の讀者には、所謂大家の作より、他の書物が廣く愛玩される故、初め志した眞の藝術を斷念して、二の町以下の理想を設けることになつたのが、こゝ十年許のうちに、漸々増加して、一方の勢力となつた。之に睡いでなほ後進の作者や、とにかく明治文學では名著となつて居る數年前の書を知らない讀者は、一は成功を急ぎ、他は一時

の面白味を貪つて、藝術のみならず、何事にも缺く可らざる訓練といふ事を経て、趣味の進歩を計らうとせず、不完全な雜駁な作品に満足する。尤もこれは、文藝の進歩した國でも、近世の民主時代には免がれぬ現象で、今日の英國などは大に此弊を受けて居る。しかし、文藝の中堅はやはり少數の理想高き精華の士が占領して居るので、詩人名家と通俗小説家とは段が違ふやうにしてある。日本でも、これから益々平俗文學の増加するのは、避けにくい、又或は若干の制限を加へれば却て有益であるから、自分は敢て之を排斥しないが、唯眞の文藝と混じられては困る。今日の西洋のやうに、眞の詩人名家は俗耳に入り難くとも、高い處に尊敬して置きたい。藝術の聖殿は訓練を経ない者の蹂躪を容るさないのである。

それにしても、今の評論家や作家の一部はあまり欲が無いではないが、以前は、ともかく、『何故に大天才出でざる』『大文學出でよ』など、呼はつて、ダントテよ、ミルトンよと騒いだものだが、今日では、此等の大詩人は到底解す可からず、解りもせぬに、解らうと苛るのは無駄だと、至極勉強の嫌ひな者には都合の善い議論が流行する。まさか淺薄な宗教小説、家庭小説、滑稽文學を大文學だとも言ひ悪いから、自分達